

史跡 斎宮跡

平成14年度発掘調査概報

2004年3月

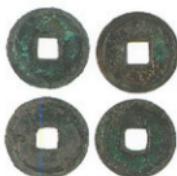
斎宮歴史博物館



第136次調査区全景（北から）



第130次調査出土和同開珎（表、2：3）



第130次調査出土和同開珎（裏、2：3）



第5次調査出土馬具（表、原寸）



第5次調査出土馬具（裏、原寸）



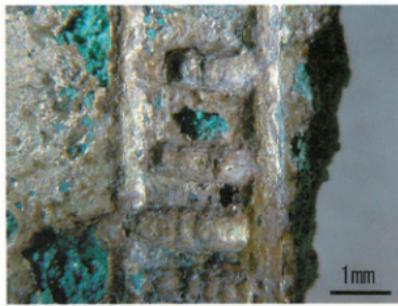
第133次調査出土鉢処理前



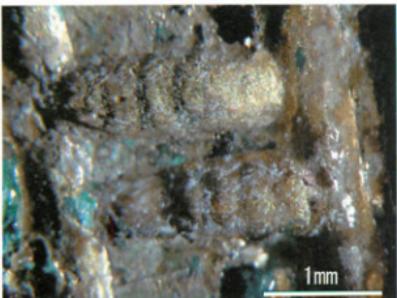
第133次調査出土鉢処理後（数字はP143、144の本文に対応）



第137次調査出土毛彫馬具処理前（上：表、下：裏）



第137次調査出土毛彫馬具（数字はP144の本文に対応）



鋲痕拡大写真2（④の部分）



鋲痕拡大写真3（④の部分）

序

史跡東部では、これまでの調査で平安時代を中心とした斎宮跡の様相が明らかとなっているのに対して、史跡西部では、飛鳥・奈良時代の斎宮跡が所在したと考えられていますが、その解明が進んでいませんでした。このため、飛鳥・奈良時代の斎宮跡（「初期斎宮」）の解明を、平安時代の斎宮跡解明に並ぶ当館の重点課題と位置づけ、その第一歩として、平成14年度から5カ年計画でトレンチ調査による範囲確認調査を開始しました。この第137次調査では、奈良時代の土坑から毛彫馬具が出土するなど、当時の様相を考える上で、貴重な成果があがっています。

このほか、平成14年度は2ヶ所の計画調査を実施しています。第136次調査は、史跡東部の寮庫区画南部の状況把握を目的としたものです。また、第139次調査は、奈良古道の範囲確認を目的としたものです。それぞれの成果については、本文のなかで各担当が述べておりますのでぜひ御一読ください。

これらの成果を見ますと、史跡斎宮跡ではかれこれ30年間余も発掘調査を継続しており、かなりのデータが蓄積されているわけですが、それでも毎年の調査によって新たな発見や疑問点が出てくることがよくわかります。地元明和町や三重県は言うまでもなく、日本国民共通の財産として、史跡斎宮跡に関する「知の情報」を提供し続け、この激動の時代においてもなお絶やすことのない、いや、このような時代だからこそ忘れてはならない「歴史に学ぶ姿勢」に、少しでも寄与できればと思います。

史跡斎宮跡の保存と調査研究・整備にあたりましては、地元明和町在住の方々、明和町および関係機関、斎宮跡調査研究指導委員をはじめとする諸先生方や文化庁から、有形無形の援助を頂いております。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

2004(平成16)年 3月

斎宮歴史博物館

館長 桂川 哲

例　　言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成14年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第136・137・139次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第138次調査報告書は、別途明和町教育委員会が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第VI座標系を基準とし、世界測地系の対応は、平成14年度については行っていない。方位は旧国土座標による座標北で示している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器の分類と時期認定については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告』I 斎宮歴史博物館 2001年）による。
- 5 遺構表示記号は次のとおりである。

S A : 柱列 S B : 堀立柱建物 S D : 溝 S E : 井戸 S F : 道路 S H : 窃穴住居
S K : 土坑 S X : 土壙墓・墓 S Z : 落ち込み・その他
- 6 遺物実測図は実物の4分の1を基本とし、資料の性格に応じて変更したものもある。遺物写真はとくに指定した物以外は縮尺不同である。
- 7 出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（1995年版）に掲る。
- 8 遺物の文字表現には、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。
- 9 本書の執筆は、泉 雄二・伊藤裕偉・小瀬 学・水橋公恵があたり、目次および文末に記した。編集は調査研究グループで行った。また、発掘調査および資料整理については、西村秋子・杉原泰子・八木光代のほか、次の学生諸氏の参加があった。

服部英世・清野陽一・阿部美保・奥野絵美・竹内絵里奈・山田真靖・鈴木敦夫・大久保幸枝
(以上、三重大学)、井上紗織(専修大学)

目 次

I	前言	泉 雄二	1
II	第136次調査	水橋公恵・伊藤裕偉	7
III	第137次調査	小瀬 学	37
IV	第139次調査	伊藤裕偉	87
V	第7次調査	伊藤裕偉	103
VI	史跡斎宮跡出土資料の保存処理と自然科学的調査	山岡奈美恵・菅井裕子・渡辺智恵美	
		(財)元興寺文化財研究所	141

挿図目次

第I-1図	史跡斎宮跡位置図	2
第I-2図	平成14年度発掘調査区位置図	3
第I-3図	斎宮跡方格地割区画名称	5
第I-4図	史跡斎宮跡における大地区（2002年）	6
第II-1図	第136次調査区 位置図	7
第II-2図	第136次調査区 大地区・グリッド図	8
第II-3図	第136次調査区 東壁上層図	8
第II-4図	第136次調査区 平面図	9
第II-5図	第136次調査区 掘立柱建物・柱列配図図	10
第II-6図	第136次調査区 出土遺物実測図(1)	16
第II-7図	第136次調査区 出土遺物実測図(2)	17
第II-8図	第136次調査区 出土遺物実測図(3)	18
第II-9図	第136次調査区 出土遺物実測図(4)	19
第III-1図	第137次調査区 位置図	38
第III-2図	第137次調査区 大地区・グリッド図	39
第III-3図	第137次調査区 土層断面図(1)	40
第III-4図	第137次調査区 土層断面図(2)	41
第III-5図	第137次調査区 平面図(1)	42
第III-6図	第137次調査区 平面図(2)	43
第III-7図	第137次調査区 平面図(3)	44
第III-8図	第137次調査区 SB8668-8674	
第III-9図	第137次調査区 SB8669-8670-8671	
第III-10図	第137次調査区 SB8668-8674	
第III-11図	第137次調査区 SK8564-SH8576-8586	
第III-12図	第137次調査区 SH8572-8574	
第III-13図	第137次調査区 SB8573-8638	
第III-14図	第137次調査区 SB8606-8607-8619-8641	
第III-15図	第137次調査区 SH8604-8635	
第III-16図	第137次調査区 SK8647-SW8575-8644-SZ8561平面・断面図	
第III-17図	第137次調査区 出土遺物実測図(1)	59
第III-18図	第137次調査区 出土遺物実測図(2)	60
第III-19図	第137次調査区 出土遺物実測図(3)	61
第III-20図	第137次調査区 出土遺物実測図(4)	62
第III-21図	第137次調査区 出土遺物実測図(5)	63
第III-22図	第137次調査区 出土遺物実測図(6)	64
第III-23図	SB8673と周辺の遺構	65
第III-24図	馬具の部分名称	65
第III-25図	第5次調査出土馬具の出土地点と 遺物実測図	66
第IV-1図	第139次・第7次調査区 位置図	87
第IV-2図	第139次調査区 平面・土層断面図	88
第IV-3図	第139次調査区 SH8685平面・断面図	91
第IV-4図	第139次調査区 SK8681平面・断面図	91
第IV-5図	第139次調査区 出土遺物実測図	93
第IV-6図	第139次調査区 時期別道路遺構の 変遷	95
第V-1図	第7次調査区 地区割り図	103
第V-2図	第7次調査区 平面図	104
第V-3図	第7次調査区 道路遺構断面図	106
第V-4図	第7次調査区 出土遺物実測図(1)	111
第V-5図	第7次調査区 出土遺物実測図(2)	112
第V-6図	第7次調査区 出土遺物実測図(3)	113
第V-7図	第7次調査区 出土遺物実測図(4)	114
第V-8図	第7次調査区 出土遺物実測図(5)	115
第V-9図	第7次調査区 出土遺物実測図(6)	116
第V-10図	第7次調査区 出土遺物実測図(7)	117
第V-11図	第7次調査区 出土遺物実測図(8)	118
第VI-1図	分析結果(1)	142
第VI-2図	分析結果(2)	142
第VI-3図	分析結果(3)	142
第VI-4図	分析結果(4)	142
第VI-5図	分析結果(5)	142
第VI-6図	分析結果(6)	142
第VI-7図	断面構造略図	143

写真図版目次

巻頭 1	第136次調査区全景、和同開珎、馬具	III - 12	第137次調査 遺物(1).....	82	
巻頭 2	鉗、毛彫馬具	III - 13	第137次調査 遺物(2).....	83	
II - 1	第136次調査 遺構(1).....	27	III - 14	第137次調査 遺物(3).....	84
II - 2	第136次調査 遺構(2).....	28	III - 15	第137次調査 遺物(4).....	85
II - 3	第136次調査 遺構(3).....	29	III - 16	第137次調査 遺物(5).....	86
II - 4	第136次調査 遺構(4).....	30	IV - 1	第139次調査 遺構(1).....	97
II - 5	第136次調査 遺構(5).....	31	IV - 2	第139次調査 遺構(2).....	98
II - 6	第136次調査 遺物(1).....	32	IV - 3	第139次調査 遺構(3).....	99
II - 7	第136次調査 遺物(2).....	33	IV - 4	第139次調査 遺構(4).....	100
II - 8	第136次調査 遺物(3).....	34	IV - 5	第139次調査 遺構(5)・遺物(1).....	101
II - 9	第136次調査 遺物(4).....	35	IV - 6	第139次調査 遺物(2).....	102
II - 10	第136次調査 遺物(5).....	36	V - 1	第7次調査 遺構(1).....	131
III - 1	第137次調査 遺構(1).....	71	V - 2	第7次調査 遺構(2).....	132
III - 2	第137次調査 遺構(2).....	72	V - 3	第7次調査 遺構(3).....	133
III - 3	第137次調査 遺構(3).....	73	V - 4	第7次調査 遺構(4).....	134
III - 4	第137次調査 遺構(4).....	74	V - 5	第7次調査 遺物(1).....	135
III - 5	第137次調査 遺構(5).....	75	V - 6	第7次調査 遺物(2).....	136
III - 6	第137次調査 遺構(6).....	76	V - 7	第7次調査 遺物(3).....	137
III - 7	第137次調査 遺構(7).....	77	V - 8	第7次調査 遺物(4).....	138
III - 8	第137次調査 遺構(8).....	78	V - 9	第7次調査 遺物(5).....	139
III - 9	第137次調査 遺構(9).....	79	V - 10	第7次調査 遺物(6).....	140
III - 10	第137次調査 遺構(10).....	80	VI - 1	第5・130次調査遺物	145
III - 11	第137次調査 遺構(11).....	81	VI - 2	鉗・馬具顯微鏡写真	146

表目次

第I - 1 表	平成14年度発掘調査一覧.....	4	第III - 9 表	第137次調査区出土遺物観察表(4).....	70
第II - 1 表	第136次調査区遺構一覧	12	第III - 10 表	第137次調査区綠釉陶器出土地点・ 破片数一覧	70
第II - 2 表	第136次調査区掘立柱建物一覧	13	第IV - 1 表	第139次調査区遺構一覧	96
第II - 3 表	第136次調査区綠釉陶器出土地点・ 破片数一覧	20	第IV - 2 表	第139次調査区出土遺物観察表	96
第II - 4 表	第136次調査区出土遺物観察表(1).....	24	第V - 1 表	第7次調査区出土五輪塔一覧	110
第II - 5 表	第136次調査区出土遺物観察表(2).....	25	第V - 2 表	第7次調査区遺構一覧(1).....	121
第II - 6 表	第136次調査区出土遺物観察表(3).....	26	第V - 3 表	第7次調査区遺構一覧(2).....	122
第III - 1 表	第137次調査区遺構一覧(1).....	55	第V - 4 表	第7次調査区遺構一覧(3).....	123
第III - 2 表	第137次調査区遺構一覧(2).....	56	第V - 5 表	第7次調査区掘立柱建物一覧	124
第III - 3 表	第137次調査区遺構一覧(3).....	57	第V - 6 表	第7次調査区出土遺物観察表(1).....	125
第III - 4 表	第137次調査区竪穴住居一覧	57	第V - 7 表	第7次調査区出土遺物観察表(2).....	126
第III - 5 表	第137次調査区掘立柱建物一覧	58	第V - 8 表	第7次調査区出土遺物観察表(3).....	127
第III - 6 表	第137次調査区出土遺物観察表(1).....	67	第V - 9 表	第7次調査区出土遺物観察表(4).....	128
第III - 7 表	第137次調査区出土遺物観察表(2).....	68	第V - 10 表	第7次調査区出土遺物観察表(5).....	129
第III - 8 表	第137次調査区出土遺物観察表(3).....	69	第V - 11 表	第7次調査区出土遺物観察表(6).....	130

I 前 言

1 調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国の史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年からは斎宮歴史博物館を建設し、史跡解明の計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査は、これまでの発掘調査成果の蓄積から、史跡東部に存在すると考えられる平安時代の斎宮跡の解明を中心として進められてきたが、史跡西部に所在すると想定されてきた飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することも重要な課題として残っており、この課題解明のため平成13年度には第132次調査として面調査を実施している。

発掘調査

史跡東部の調査では、斎宮寮の中核部である内院地区の可能性が強い牛葉・鍛冶山地区の調査、その最北端の寮庫推定区画について、これまでの数次にわたる調査で区画の解明がほぼ終了しているが、この両者の区画間の神殿推定区画については、西半部の解明が進んでいるものの、東半部については不明な点が多いため、平成13年度の第133次調査に引き続き、本年度は第136次調査を実施した。

史跡西部の飛鳥・奈良時代の斎宮跡の調査は対象地域が広いため、効率を考えてトレンチ調査による範囲確認調査を本年度から5カ年計画で開始することとなった。今年度は斎宮歴史博物館南側の旧竹神社周辺で第137次調査を実施した。なお、近鉄斎宮駅北側の「斎宮跡歴史ロマン広場」と斎宮歴史博物館を繋ぐ位置に存在する奈良古道についても不明な点が多いため、幅員を明らかにするための第139次調査を実施している。なお、各次の調査内容については本文を参照されたい。

史跡整備

『史跡斎宮跡整備基本構想』に基づき、平成8年度から開始した近鉄斎宮駅北側での「斎宮跡ロマン広場」の整備は平成13年度に完了した。当該整備地の位置は、史跡東部で確認されている東西7区画・南北4区画の一辺120m程の方格地割の西北隅4区画の場所を占めている。この整備事業は、西北隅四区画の外周道路・溝等の整備のほか、平成11年度には体験学習施設「いつきのみや歴史体験館」、平成13年度には体験館の北側に1/10史跡全体模型を造成し、調査で区画の内容の判明している3区画については1/10建物模型を設置している。

平成14年度の整備は、前年度の「1/10史跡全体模型」内に設置した遺構の音声ガイダンス施設と同じ遺構の説明板（「内院」・「寮庫」・「古道」・「大溝」・「祓川」）を現地に設置し、1/10史跡全体模型と史跡の現地をリンクできるようにしたほか、近鉄斎宮駅前に史跡の案内板を1基設置した。

なお、平成14年10月2日に明和町総合体育馆で第37回全国史跡整備市町村協議会大会が開催され、大会終了後、「斎宮跡歴史ロマン広場」および斎宮歴史博物館の視察を行った。

2 調査体制

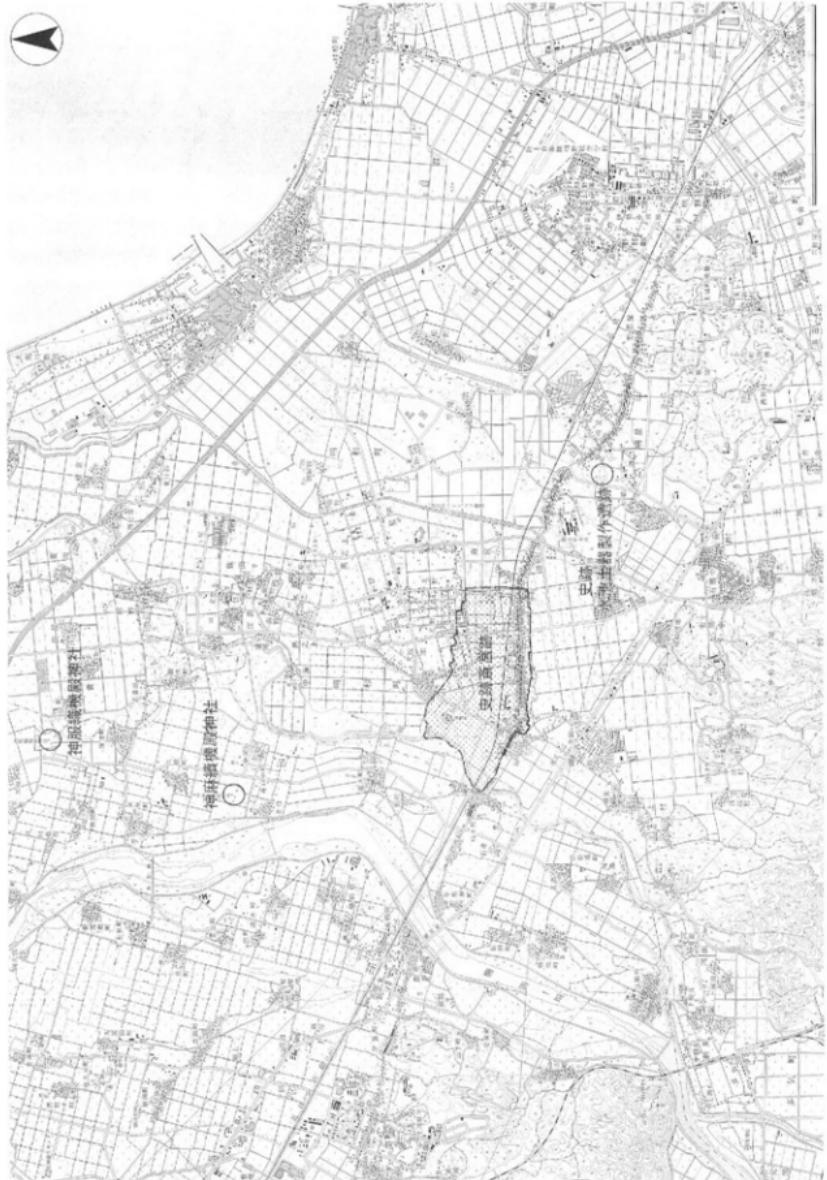
史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究グループが担当した。当報告に関する組織は以下の体制で行った。

平成14年度

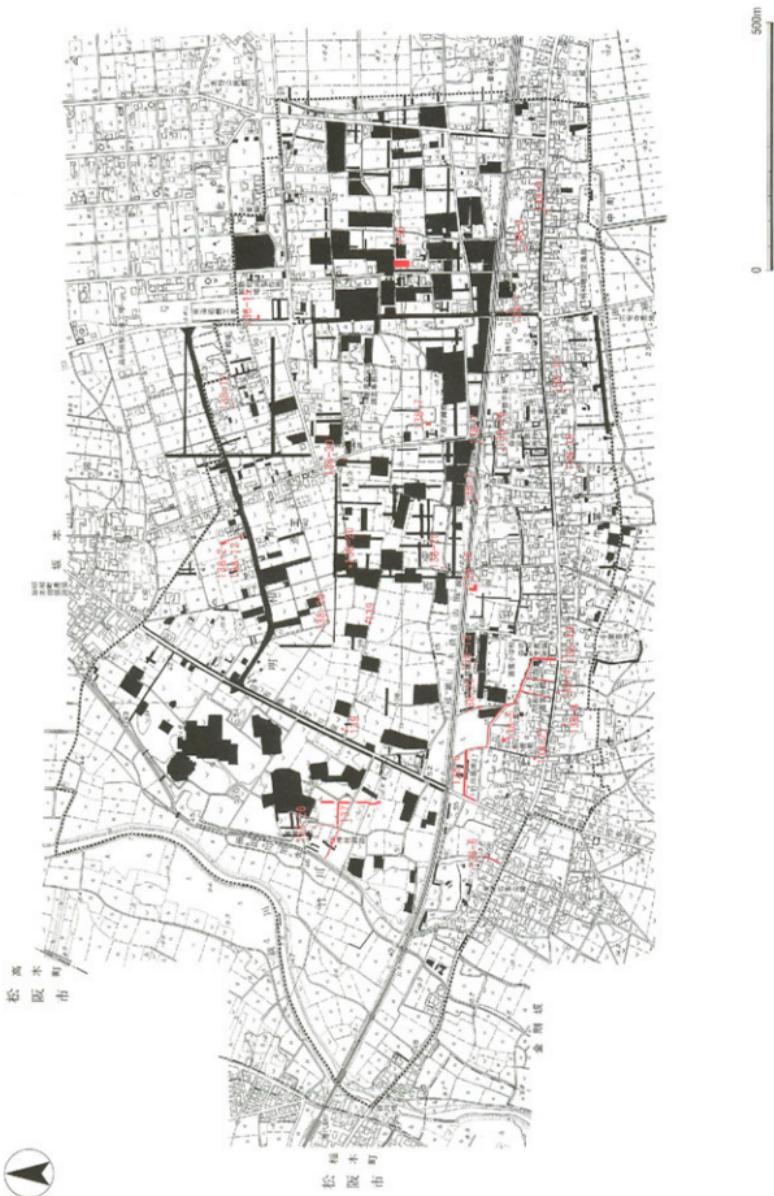
泉 雄二（主幹兼グループリーダー）・伊藤裕偉（技師兼学芸員）・小濱 学（主事兼学芸員）・水橋公恵（技師兼学芸員）

平成15年度

泉 雄二（主幹兼グループリーダー）・竹内英昭（主査）・伊藤裕偉（技師兼学芸員）・小濱 学（主事兼学芸員）



第1-1図 史跡斎宮跡位置図(1:50,000) 国土地理院発行 1/25,000「松阪」「明野」(平成4年)より



第 I - 2 図 平成14年度発掘調査区位置図 (1 : 10,000)

3 調査研究指導委員会議

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るために、斎宮跡調査研究指導委員会議を実施している。平成14年度は、第1回を平成14年7月18日（木）、第2回を平成14年11月15日（金）に開催した。指導委員の方々は下記のとおりである（順不同・敬称略）。

上村喜久子（名古屋短期大学教授）

狩野 久（京都橘女子大学教授）

北原 理雄（千葉大学教授）

佐々木恵介（聖心女子大学助教授）

鈴木 嘉吉（奈良国立文化財研究所所長）

所 京子（聖徳学園岐阜大学教授）

八賀 晋（三重大学名誉教授）

町田 章（奈良国立文化財研究所所長）

渡辺 寛（皇學館大學教授）

なお、このほか本概報作成にあたり、下記の方々

の助言を得た。（順不同・敬称略、所属は平成14年度当時）

井上和人（奈良文化財研究所）、仁藤敦史（国立歴史民俗博物館）、藤田盟児（名古屋造形芸術大学）、平尾政幸（（財）京都市埋蔵文化財研究所）、古川義彦（関西文化財調査会）、上村安生（三重県生活部）、大川勝宏（三重県教育委員会）、尾野善裕（京都国立博物館）、木野本和之（龜山市教育委員会）、中野敦夫（明和町斎宮跡課）、賛 元洋（豊橋市教育委員会）、濱邊一機（北勢町教育委員会）、山中 章（三重大学）、渡辺博人（各務原市教育委員会）、大川操・萩原義彦（三重県埋蔵文化財センター）・角正芳浩（四日市教育委員会）・森川常厚（嬉野町教育委員会）、尾崎 誠・山岡奈美恵・菅井裕子・渡辺智恵美（（財）元興寺文化財研究所）

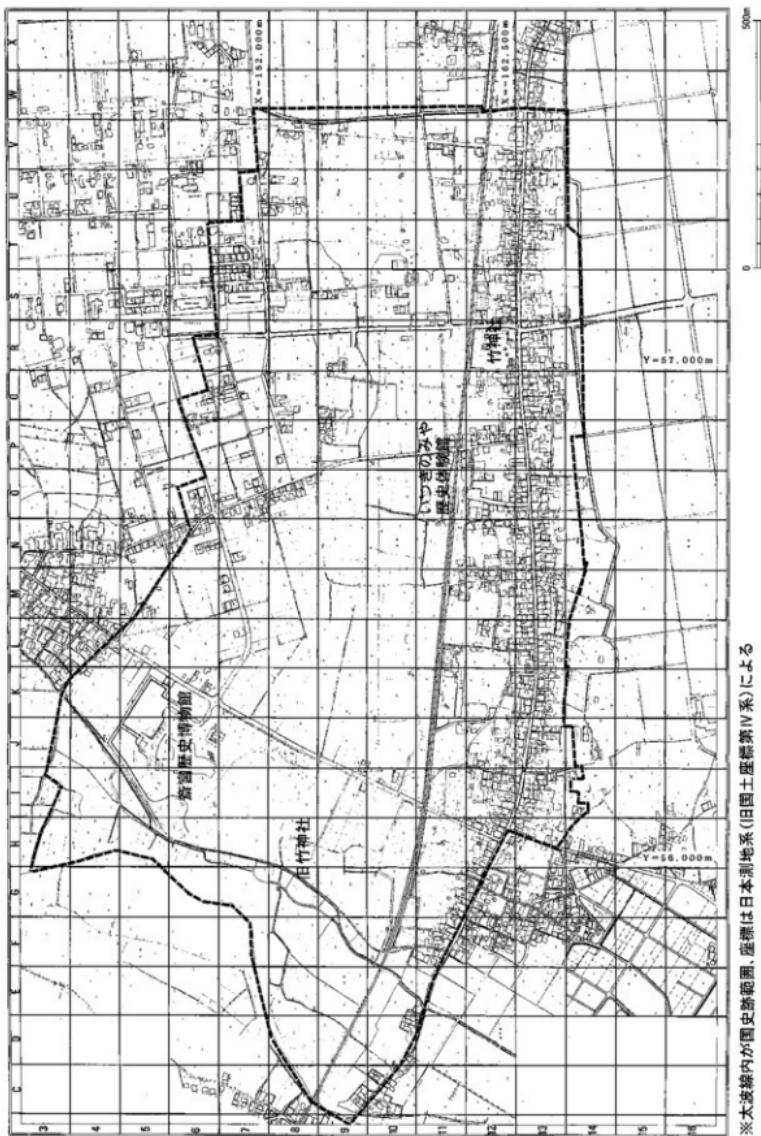
（泉 雄二）

調査次数	地 区	面積(m ²)	調査日時	位 置	土地所有者	現状変更名	保存区分
136	S10	460.0	14.5.14～14.8.13	明和町斎宮字西加座	明和町	計画発掘調査	2
137	G8・9, H8・9	700.0	14.8.19～14.12.3	明和町竹川字中垣内	明和町・個人	計画発掘調査	1・2
139	J 9, L 9	92.0	15.2.4～15.2.12	明和町斎宮字塚山・字広頭ほか	明和町	計画発掘調査	1
138-1	S 12	9.0	14.4.15	明和町斎宮	個人	浄化槽設置	3
138-2	N 6	74.0	14.4.23～14.4.30	明和町斎宮字篠林	個人	住宅新築	3
138-3	T 12	4.5	14.4.18	明和町斎宮	個人	住宅新築	4
138-4	K 13	2.5	14.5.13	明和町竹川	個人	浄化槽設置	4
138-5	J 12	125.3	14.6.11～14.7.9	明和町竹川字東裏	竹川自治会	仮集会所建設	3
138-6	L 12・13	360.0	14.7.5～14.9.27	明和町斎宮	明和町	水道管改修	3
138-7	O 11, P 11	1.5	14.6.17	明和町斎宮字内山	近畿日本鉄道	支援線設置	3
138-8	K 13	5.1	14.6.21	明和町竹川	個人	浄化槽設置	4
138-9	T 13	7.0	14.7.12	明和町斎宮	個人	浄化槽設置	3
138-10	K 13	3.4	14.7.19	明和町竹川字南裏	個人	浄化槽設置	3
138-11	Q 13	3.9	14.7.29	明和町斎宮	個人	浄化槽設置	4
138-12	L 7	0.8	14.8.2	明和町斎宮	明和町	水道管新設	3
138-13	K 11, L 11	11.0	14.8.20	明和町斎宮字広頭	明和町	斎宮小学校バリアフリー工事	4
138-14	P 10	22.0	14.8.21	明和町斎宮字御館	明和町	無料休憩施設建設	1
138-15	R 7	50.0	14.10.21～14.10.25	明和町斎宮字西前沖	個人	住宅建築	4
138-16	O 12, P 12	4.0	14.11.1	明和町斎宮字内山	個人	住宅改築	4
138-17	Q 6	6.0	15.1.17	明和町斎宮	個人	住宅建設	4
138-18	M 11	55.0	15.1.26～15.2.3	明和町斎宮字広頃	個人	住宅建築	3・4
138-19	O 13	4.5	15.1.21	明和町木葉山	個人	住宅増築	4
138-20	H 8, L 8, M 9, M 11, P 9	1.8	15.2.10	斎宮、竹川ほか	明和町	測量基準点の設置	1・2
138-21	I 13	3.7	15.3.10	明和町竹川	個人	住宅建設	4
138-22	J 11	4.9	14.9.27	斎宮336番1～334番1	明和町	水道管埋設	3

第I-1表 平成14年度発掘調査一覧



第1-3図 斎宮跡方格地割区画名称 (1:5,000)



第1-4図 史跡斎宮跡における大地区（2002年）

II 第136次調査

(6 A S 10 西加座地区)

1 調査の契機と経過

第136次調査区は、史跡地内では東部にあたり、調査地の地番は、明和町斎宮字西加座2717-3・7番地である。現況は畠地である。

今回の調査は、奈良時代末期から平安時代初期に成立する斎宮の方格地割のうち、西加座南区画と呼ばれる区画⁽¹⁾の東半北西部分を対象に実施した。これまでの発掘調査成果から、西加座南区画の西半は「神殿」、北側に隣接する西加座北区画は「寮庫」、南側の鍛冶山西区画は斎王が居住した「内院」に相当すると考えられている。しかし、西加座南区画東半については調査が進んでいなかったため、平成13年度に公開された斎宮跡歴史ロマン広場1/10模型で

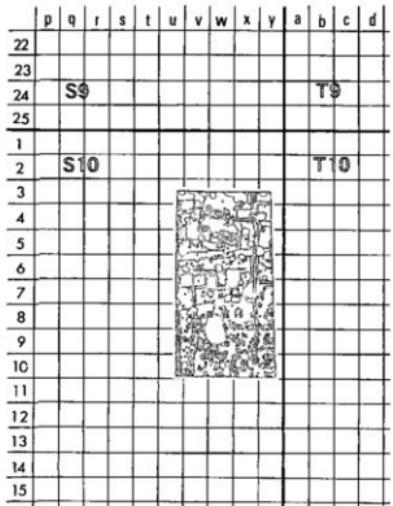
も建物等の復元がなされていない。このため、平成13年度以降の計画調査では、西加座南区画東半の空間構成を解明することに重点を置くこととなった。平成13年度の第133次調査では、南東部分を対象として調査を実施したので、平成14年度の第136次調査では、区画の北側の状況を明らかにするべく、西加座南区画東半の北西に発掘区を設定した。

調査は、平成14年5月14日に開始し、同年8月13日に終了した。最終調査面積は460m²である。調査期間中、5月30日には斎宮小学校児童の体験発掘（参加者70名）を、6月2日には「斎王まつり」にあわせた中間報告を、7月21日には現地説明会（参加者84名）を、それぞれ行った。

（水橋公恵）



第II-1図 第136次調査区 位置図 (1:2,000) ※破線は想定される方格地割側溝の位置



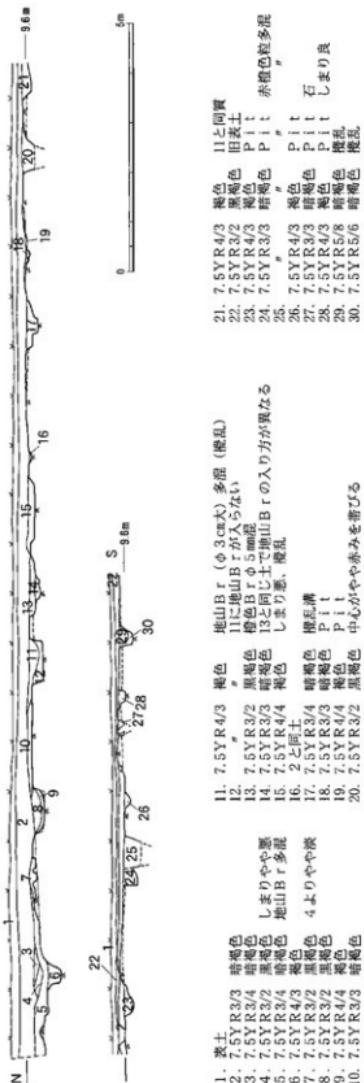
第II-2図 第136次調査区 大地区・グリッド図 (1:800)

2 調査区の層位

調査区周辺一帯には過去畑地が広がっていたが、地元の古老の話によると、調査地点には一時期水田が営まれていたようである。

基本的な層序は、上から表土（耕作土）・旧耕作土・地山（橙色粘質土）である。現況の地表面は、調査区南端部で標高約9.9m、北端も同じく約9.9mでほぼ平坦であるが、地山は南から北へ向かって低くなっている。表土上面からの深さは南端で約25cm、北端で約65cmを計測した。遺構検出は地山上面で行った。

（水橋公恵）



第II-3図 第136次調査区 東壁土層図 (1:100)



施立柱建物の追構番号は、第 11-5 図に示した。座標は日本測地系（日国土座標第 VI 系）による。

3 遺構

調査の結果、平安時代前半を中心とした時期の掘立柱建物8棟・柵（柱穴列）1列・区画溝1条・土坑多數のほか、近世以降の溝や現代の擾乱土坑などを検出した。以下、主な遺構について記述する。

(1) 掘立柱建物・柵（柱穴列）

調査区南半では多數の柱穴が集中して検出され、8棟分の掘立柱建物と柵（柱穴列）1条が復元できた。

S B 8536 調査区南半の北寄り、S 10区 v 8・9～y 8・9グリッド付近で検出された東西5間（12.1m）×南北2間（約4.6m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はN89°E。柱掘形は、一辺約50～70cmほどの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものが多い。柱穴の重複関係から、S B 8539よりも新しく、S B 8537・8540・8541よりも古いことが判明している。

S B 8537 調査区南半の北寄り、S 10区 v 8・9～y 8・9グリッド付近で検出された東西5間（11.2m）×南北2間（4.5m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はN87°E。柱掘形は、一辺約50～60cmほどの隅丸方形を呈するものが多い。南西隅の柱穴については、埋土の断ち割り調査を実施し、検出面からの深さが約70cmであることを確認した。柱穴の重複関係から、S B 8536・8538よりも新しく、S B 8540よりも古いことが判っている。

S B 8538 調査区南半の北寄り、S 10区 v 8・9～y 8・9グリッド付近で検出された東西5間（10.5m）×南北2間（4.4m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はN88°E。柱掘形は、一辺約50cmほどの隅丸略方形を呈するものが多い。柱穴の重複関係から、S B 8537よりも古いことが確認できた。

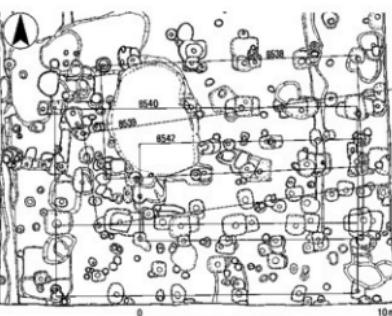
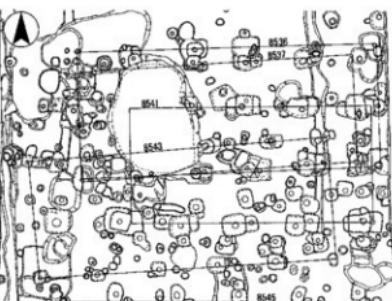
S B 8539 調査区南半中央、S 10区 v 9・10～y 8・9グリッド付近で検出された東西6間（12.1m）以上×南北2間（3.8m）の東西棟で、側柱建物である。東側隣接地の第120次調査区には、このS B 8539の棟の延長線上に、柱間が類似する柱穴がある。この柱穴をS B 8539とみれば、東西8間（16.2m）になる。主軸はN82°E。柱掘形は、一辺約75cmほどの整った隅丸方形を呈するものもあるが、やや不整形のものが目立つ。

柱穴のひとつが、後述のS B 8543と重複関係にあり、S B 8539のほうが古いように見受けられたが、

重複部分が小さいため先後関係を誤認している可能性も残る。また、北東の柱穴の重複関係からは、S B 8536よりも古いことを確認している。

S B 8540 調査区南半中央、S 10区 v 9・10～y 9・10グリッド付近で検出された東西5間（12.3m）×南北2間（4.8m）の東西棟で、南に1間（3.0m）の庇が付く側柱建物である。主軸はN90°S。身舎部分の柱掘形は一辺約75～110cmほどの隅丸長方形、庇部分の柱掘方は50×80cmほどの隅丸長方形を呈する。柱穴の重複関係から、S B 8537・8538・8541よりも新しく、S B 8542・S A 8545よりも古いと考えられた。

S B 8541 調査区南半中央、w 9・10～y 9・10グリッド付近で検出された東西4間（9.7m）×南北2間（4.6m）の東西棟で、側柱建物である。主軸はN90°S。柱掘形は一辺約60～90cmほどの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈する。柱穴の重複関係から、S B 8536よりも新しく、S B 8540・8542よりも古いことが判っている。



第II-5図 第136次調査区 掘立柱建物・柱列配置図（1:200）

S B 8542 調査区南半南寄り、S 10区w 9・10～y 9・10グリッド付近で検出された東西5間(9.0m)×南北2間(4.0m)の東西棟で、側柱建物である。主軸はN90°S。柱掘形は一辺約40～50cmほどの隅丸方形を呈するものが多い。柱穴の重複関係から、S B 8540・8541よりも新しいことが確認できた。

S B 8543 調査区南半南寄り、S 10区v 9・10～y 9・10グリッドで検出された東西5間(12.0m)×南北2間(4.8m)の東西棟で、側柱建物である。主軸はN86°E。柱掘形は一辺約40～60cmほどの隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈するものが多い。現代の攪乱に断ち切られた柱穴の断面観察によって、検出面からは約25cmの深さを有していることが知られた。柱穴の重複関係からS B 8542よりも古いことが判っている。S B 8539とも切り合い関係にある。

S A 8545 調査区南壁際、S 10区v 10～y 10グリッドで検出された柱穴列。調査中には掘立柱建物の北辺部分に当たるのではないかと考えていたが、平成15年度に実施した隣接地の調査(第140次調査)で、南側へは続かないことが明らかになったので、建物ではなく柵である可能性が高いと思われる。N89°Eの方向性で、東西方向に5間分(12.3m)を確認している。調査区南端に位置していたため、ほとんどの柱穴の南半部分を検出するには至らなかったが、柱掘形は一辺約40cmほどの隅丸方形と考えられる。検出面からの深さは、約25～37cm。柱穴の重複関係から、S B 8540よりも新しいことを確認している。

(2) 区画溝

S D 6050 平成9年度に当調査区の東側隣接地において行われた第120次調査で検出された、西加座南地区の北限溝。調査区北半のv 6～y 5グリッド付近でその西側延長部分を確認した。検出面での最大幅は1.3m、深さは約20cmで、断面は浅いU字形を呈する。N86°Eの方向性を有する東西溝で、w 5グリッドでS K 8516と切り合い関係にある。重複部分が僅かであるため断定しがたいが、S D 6050が切られているように見受けられた。埋土は、黒褐色粘質土である。

遺物は小破片が多いが、北側へ開口部を向けて溝底に据え置いたような状態で、土器師壺1個体分(第II-6図1)が出土したことが特筆される。

(3) 土坑

S K 8510～8516 調査区北半、S D 6050よりも北側のS 10区v 4・5、w 4・5グリッド付近で検出された土坑群。東西10.5×南北6.0mの範囲に、大小いくつもの土坑が重なり合う。検出面から40cmほどの深さで底部が平らになるものや、深さ約110cmの壠鉢形のものなど、深さ形状ともバラエティーに富む。埋土は、基本的に下層が地山ブロックを含む明赤褐色土で、上層が黒褐色粘質土であるが、深い土坑については完掘していない。

遺物は、いずれも上層から比較的多く出土する一方で、下層からの出土はほとんど認められなかった。

S K 8520～8522 調査区中央西半、S 10区v 7・w 7グリッド付近で検出した重複する3基の土坑。S K 8520は一辺2.2mの隅丸方形で、検出面からの深さ30cm。埋土は黒褐色粘質土。S K 8522は2.8×2.3mの隅丸長方形で、同じく深さ30cm。埋土は上層が黒褐色粘質土で、下層が地山ブロック混じりの暗褐色粘質土。下層から遺物が多く出土した。S K 8521は、西側をS K 8520に、東側をS K 8522に切られており、本来の東西方向の長さは不明だが、南北の長さ2.3m、検出面からの深さ約20cmである。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は少ない。

S K 8523 調査区中央、S 10区w 6・x 7グリッド付近で検出した不整構円形を呈する土坑。平面規模は3.5m×2.5mで、検出面からの深さは約30cm。埋土は黒褐色粘質土で、S K 8524の張り出し部を切っている。

S K 8524 調査区中央東壁寄り、S 10区x・y 7グリッド付近で検出した土坑。長径3.8m×短径2.8mの不整構円形で、北西側に張り出しを有する。張り出し部分は別遺構の可能性も考えられるが、埋土に顯著な差異が認められず、区分できなかった。検出面からの深さは、最深部で約40cm。埋土は黒褐色粘質土。

S K 8529 調査区南半西壁寄り、S 10区v 8グリッド付近で検出された不定形の土坑。平面規模は長辺約6m×短辺3mで、検出面からの深さ約20cm。中央西寄りで底部が10cm程くぼむ。黒褐色粘質土の埋土除去後、床面でS B 8536・8537・8538の柱穴が検出された。

道番遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時期	造営福年	遺構の性格・遺物・その他
SD 6050	区画溝	136	溝19	S10	v-y5・6	奈良末以前	I-4以降	方格地盤西加隈南区西北辺道路側溝 電出土
SK 8510	土坑	136	土坑28	S10	u-w4	平安前中期	II-2頃	北側土坑群 不定形 土器は小片のみ
SK 8511	土坑	136	土坑22	S10	u-w4・5	平安前中期	II-2頃	北側土坑群 不定形
SK 8512	土坑	136	土坑26	S10	w4	平安前中期	II-2頃	北側土坑群 不定形 上層は摩滅した小片が多い
SK 8513	土坑	136	土坑27	S10	w4	平安前中期	II-2頃	北側土坑群 不定形
SK 8514	土坑	136	土坑23	S10	v-w4・5	平安前中期	II-2頃	北側土坑群 不定形・大形 上層は摩滅した小片が多い
SK 8515	土坑	136	土坑24	S10	w-x5	平安前中期	II-2頃	北側土坑群 不定形
SK 8516	土坑	136	土坑25	S10	v-w5	平安前中期	II-2頃	北側土坑群 不定形
SK 8517	土坑	136	土坑29	S10	v-wc4	平安前中期	II-2頃	小土坑
SK 8518	土坑	136	土坑30	S10	x4	平安前中期	II-3頃	質権土器出土
SD 8519	溝	136	溝20	S10	v-y4	近世以降		SK8511・8514より新 土器は小片のみ
SK 8520	土坑	136	土坑11	S10	v-w6・7	平安初期	II-1	SK8521より新
SK 8521	土坑	136	土坑13	S10	v6・7	平安初期	II-1	SK8520・8522より古
SK 8522	土坑	136	土坑12	S10	u-w6・7	平安初期	II-1	SK8521より新
SK 8523	土坑	136	土坑10	S10	w-x6・7	平安初期	II-1	
SK 8524	土坑	136	土坑16	S10	x6・7,y7	平安前中期	II-3	
SD 8525	溝	136	溝8	S10	v7	平安中葉以前	II-4以降	SK8520・8521より新 SD8531と同・か?
SD 8526	溝	136	溝18	S10	w7	不明	不明	土器は小片のみ
SK 8527	土坑	136	土坑17	S10	w7	平安以降	II以降	
SD 8528	溝	136	溝15	S10	x7	平安以降	II以降	小規模
SK 8529	土坑	136	土坑6・14	S10	v-w8・9	平安中期	II-3・4	3基の土坑が重複か
SD 8530	溝	136	溝7	S10	v8	平安中期以前	II-4以降	SK8529より新
SD 8531	溝	136	溝5	S10	v9	平安以降	II以降	SD8525と同・か?
SD 8532	溝	136	溝1	S10	u5-10	近世以降		土器は摩滅した小片多い
SD 8533	溝	136	溝4	S10	w9・10	不明	不明	小規模 上層は小片のみ
SD 8534	溝	136	溝2	S10	x-y3・7	近世以降		土器は摩滅した小片多い
SK 8535	土坑	136	土坑3	S10	v10	平安初期	II-3	SD8532より古 鉄海あり
SK 8546	土坑	136	pH4	S10	w8	平安中期	II-4	小土坑 土器一括

第II-1表 第136次調査区遺構一覧

番号	整理番号	地名	地区	ゲット	ピット番号	ピット番号の時刻	建物時刻	施設東西(間)(m) ×南北(間)(m)	柱間 (東西・南北)	主軸	方位 (N 0°W)	備考
SB8536	建物1	S10		v8	p11		II-37	5(12.1) × 2(4.6)	2.4 - 2.3	東西	N1° W	SB8539より新 SB8537-8540-8541より古
				v9	p37	p37 --- II以降						
				w8	p8-9							
				x8	p11-13							
				x9	p8	p8 --- II以降						
				y8	p10-13							
SB8537	建物2	S10		y9	p10-12	p10 --- II以降	II-3	5(11.2) × 2(4.5)	2.3 - 2.4 - 2.3	東西	N3° W	SB8536-8538より新 SB8540より古 全体にピットの上部多い v9-p16に複数上部
				v8	p12							
				v9	p6-40	p6 --- II 2-3						
				w8	p8-8	p8 --- II以降						
				w9	p8-6	p6 --- II以降						
				x8	p8-9	p8 --- II 3						
SB8538	建物3	S10		x9	p6-9		II-37	5(10.5) × 2(4.4)	2.1 - 2.2	東西	N2° W	SB8537より古
				y8	p8-5							
				v9	p7-24							
				w8	p7							
SB8539	建物4	S10	T10	w9	p4	p4 --- II 2-	I-17 II-17	8(16.2) × 2(3.8)	2.0 - 1.9	東西	N8° W	SB8536より古 第120次調査区に延びる 全体的に上部少ない
				x8	p10-14							
				v9	p33							
				v10	p19							
				w10	p15	p15 --- II以降						
				x10	p26							
SB8540	建物5-9	S10		x8	p6		II-3	5(12.3) × 2(4.8)	2.4 - 2.4 - 3.0	東西	N0°	SB8537-8538-8541より新 SB8542-SA8545より古
				x9	p7-13	p13 --- II 2- III 3						
				x10	p3-14-18-19	p14 --- II 2- III 3						
				y9	p4-6							
				y10	p11-14	p11 --- II 2						
				v9	p28-39							
SB8541	建物6	S10		v10	p14-17-20	p14 --- II 2- III 3	II-3	4(9.0) × 2(4.8)	2.4 - 2.4 - 3.0	東西	N0°	SB8537-8538-8541より新 SB8540-8542より古
				w10	p3-7							
				x9	p7-13	p13 --- II 2- III 3						
				x10	p3-14-18-19	p14 --- II 2- III 3						
				y9	p4-6							
				y10	p11-14	p11 --- II 2						
SB8542	建物7	S10		w8	p6	p6 --- II	II-4	5(9.0) × 2(4.0)	1.8 - 2.0	東西	N0°	SB8540-8542より古
				w9	p2							
				w10	p1-11	p11 --- II 3-						
				x9	p16							
				x10	p6-27							
				y9	p12	p12 --- II						
SB8543	建物8	S10		y10	p17		I-47 II-17	5(12.0) × 2(4.8)	2.4 - 2.4	東西	N4° W	SB8542より古
				w10	p2-9	p20 --- II 3-4						
				x9	p9 or p10							
				x10	p6-10-13	p10 --- II 4?						
				y9	p4-8-14	p14 --- II 4						
				y10	p12の一部							
SB8544		T10		v9	p14-27			5(12.1) × 2(4.9)	2.4 - 2.4	東西	N4° W	第120次調査区内
				v10	p8-11-22	p11 --- II以降						
SA8545	建物10	S10		w9	p3		II-47	5(12.3)-	2.5	東西	N1° W	SB8540より新
				w10	p5	p5 --- II 以降						
				w10	p12	p12 --- II 1						
				x10	p9-16							
				y10	p10							

第II-2表 第136次調査区掘立柱建物一覧

S K8535 調査区南西隅、S 10区 v 10グリッドで検出した土坑。平面形は長辺2.1m×短辺1.9mの隅丸方形を呈する。底部は南半が一段深くなっている。検出面からの深さは17cm。黒褐色粘質土の埋土除去後、床面でS B8540・8543の柱穴が検出された。

(水橋公恵)

4 出土遺物

第136次調査区からの出土遺物は、整理箱に換算して約24箱である。内訳は、大部分が土器類で、少量の金属製品がある。

ここでは主立った遺物について記述する。古代の土器に関する分類・編年については、斎宮分類・編年^⑨および平城・長岡・平安京における編年（以下、「都城編年」と呼称）^⑩を参照した。

S D6050出土土器（1・2） いずれも土師器である。1は竈形土器。高さ約34.7cmである。形態の基本は、口縁部径約46cm、底部径約24cm、高さ約34cmの鉢形を倒立させたものである。鉢形は輪積み成形で、口縁部と底部のみや幅の広い素地を用いており、口縁部にヨコナデ、底部内面にヘラケズリが見られる。左右の把手は、鉢形の状態であれば通常の瓢形土器の方向と共通する。以上のように、この土器の基本形は瓢形土器の製作と同じであるといえる。焚口部分は、倒立させた鉢形の口縁部を半円形に切除し、上部に底を作り付けている。焚口部の前面両幅には脚が取り付いている。2は壺Aで、丸底になると考えられる。

これらの土器は、竈形土器の裾部形態から、斎宮I-4期に相当すると考えられる。

S K8515出土土器（3～5） 3は須恵器盤。摘部が輪状になる蓋と形態が類似する。内面調整に比べ、外面が丁寧であるため、その可能性もある。4は土師器杯A1で、口縁部があまり外反しないものである。5は底が狭く、口縁部の長い杯である。これまでの報告では杯Aに含めるもののが多かったが、形態的には明らかに別であるため、ここでは杯A3とする。口縁部外面に、弱いながらも2単位のヨコナデが見られる。

これらは、概ね斎宮II-2期に相当するものである。

S K8516出土土器（6～8） 6は土師器椀A。内

面に暗文が無いものである。7は土師器杯A1。8は須恵器で壺Gと考えられる。概ね斎宮II-2期に相当するものである。

S K8511出土土器（9・10） 9は土師器椀A。口縁部に油煙痕が付着しており、證明皿として用いられたと考えられる。10は土師器杯A1。口縁端部外面が四線状に産む。これらは、概ね斎宮II-2期に相当するものであろう。

S K8514出土土器（11・12） 11は土師器皿A2だが、口縁部は直線的に開いている。底部外面に墨書があり、筆跡から「木」と考えられる。破損部があるので、単漢字かどうかはわからない。12は須恵器で壺Gと考えられる。これらは概ね斎宮II-2期に相当するものであろう。

S K8517出土土器（13） 13は志摩式製塙土器である。底部は残存していない。全体に、被熱で赤～青変している。斎宮II期の範疇と考えられる。

S K8535出土土器（14～20） 14・15は土師器杯A2。14は剥離が激しく、調整等は不明。15は口縁部外面に2段のヨコナデが観察できる。16～18は土師器皿で、16・17は皿A1、18は皿A2である。19は志摩式製塙土器。20は灰釉陶器椀である。

これらは、概ね斎宮II-3期に比定できると考えられる。

S K8523出土土器（21～35） 21～23は須恵器。21は杯B蓋、22は杯A、23は長頸壺の体部と考えられる。22はやや深手のもの。

24～35は土師器。24は椀Aで、内面は粗雑な斜放射状暗文と、見込みに螺旋状暗文を施す。25も椀Aで、やや小形のもの。26は杯A2、27～30は杯A1である。29はやや厚手で、口縁端部は内面を強くヨコナデすることで、窪ませている。内外面ともに「キ」字形のヘラ記号を焼成前に刻んでいる。27・28は、30よりも古い様相を残しており、同一遺構内の出土遺物中に時期差があるのかも知れない。31～33は皿A1。

34は把手付の鍋で、斎宮では鍋Bに分類される。35は鉢で、口縁端部はやや内側に傾斜している。

これらの遺物は、概ね斎宮II-1期に相当しうが、いくつかは古い様相を残しており、全体としてはその前半期と考えられる。

S K 8522出土土器（36～59） 36・37は須恵器。36は皿B蓋で、美濃須衛産と考えられる。37は杯A。

38～59は土師器。38は杯Gで、内面に暗文が施さないもの。39～47は杯A 1。40の内面には、「キ」字形のヘラ記号が焼成前に刻まれている。45～47はやや大形のもので、小形のものに比べて形態的に古い要素を残している。48・49は杯A 2。49の外側調整はヨカナデとヘラケズリである。50は椀Aと杯Aとの折衷的な形態をなすもので、ひとまず杯Cの系統としておく。精良な素地粘土を用いているようである。内面には斜放射状暗文と、見込みに螺旋状暗文を施している。51も同様に、杯Cとする。

52～54は皿A 1。53のみ口縁部が強く外反するが、底部は54のみが丸みを持っている。54は皿A 2とも共通するものである。

55～59は甕・鍋類。55は甕Bで、体部に1箇所の把手が取り付く。体部外面下半はハケメ、内面下半はケズリである。56・57は甕A、58は長胴形となる甕Cである。59は鍋Bで、深手のものである。

これらの一群は、概ね斎宮II-1期に相当するが、杯Aに古い様相が認められるので、そのなかでも古相に相当するものであろう。

S K 8520出土土器（60～65） 図示したのは、いずれも土師器である。60は椀Aに類似するが、内外面に粗雑なヘラミガキを施すもので、あまり例を見ないものである。61は杯A 1、62は皿A 1である。

63は受口状の口縁部となるもので、底部は抜けており、内外外周をヘラケズリしている。内面には煤ないしは炭化物の付着が認められるので、製作手法的な特長は斬である。ただし、口縁部がやや波打った状態であるため、図は天地逆で、受口状の焚口笠部となる、少し変わったカマドである可能性もある。64は長胴形をなす甕C、65は甕Aである。

これらは、概ね斎宮II-1期に相当する時期のものであろう。

S K 8529出土土器（66～90） 66～78は土師器杯A。底が丸みを持ち、口縁部が弱く外反する形態となるもの。66～71は杯A 2、72～79は杯A 1の系譜と考えられる。80は、分類上は杯に含める他無く、杯A 2としておくが、全体的な手法は皿A 2にも類似する。類例が増加すれば、それらの折衷形として分離

ができる。81も杯A 2の系統であろうが、やや大形のものである。82も同様に、杯A 1の大形のものとしておく。

83・84は土師器皿で、83は皿A 1の系譜、84は系統的に追えないもので、皿A 3としておく。いずれも小形化しており、とくに83は、その後の小皿へつながる形態であろう。85は土師器で台付皿。

86～88は灰釉陶器で、86は小椀、87・88は椀である。概ね斎藤孝正氏による編年⁽⁴⁾の折戸53号窯式頃に相当するものであろう。

89は土師器壺、90は灰釉陶器で短頸壺である。

これらは、斎宮II-3期でも新しい一群に相当すると考えられる。

S K 8518出土土器（91） 91は土師器で、杯A 2である。斎宮II-3期に相当する。

S D 8534出土土器（92） 92は灰釉陶器椀。美濃産と思われ、東山72号窯式に併行するものであろう。ただし、SD 8534は近世以降の遺構と考えられるので、この土器は混入と思われる。

S K 8546出土土器（93～99） 土師器類のみであるが、出土状況から一括性の高いものである。93～97は杯Aで、95は杯A 1、97は杯A 3、他は杯A 2の系譜であろう。98は台付皿。高台が高く大きいが、それに比して皿部は小さい。99は椀。全体に薄手で、外側は整形の後にハケメを施している。

これらは、斎宮II-4期に相当するものである。

S B 8540出土土器（100） 100は須恵器杯B蓋である。摘部は腰高な宝珠形をなす。斎宮II-2期頃のものであろうか。

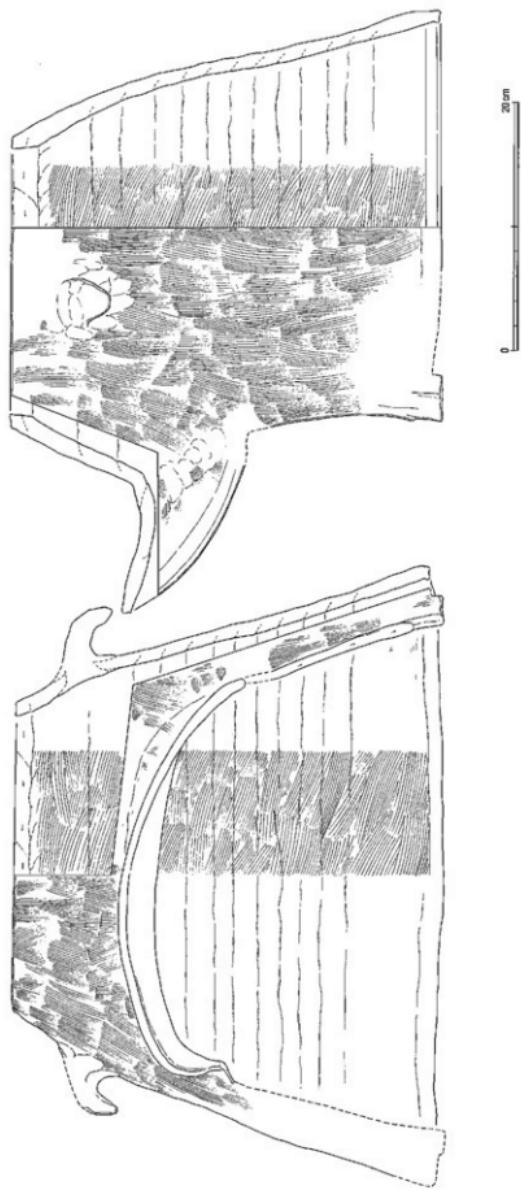
S B 8537出土土器（101） 101は土師器椀Aないしは杯A 2である。斎宮II-3期頃のものであろう。

S B 8543出土土器（102） 102は土師器杯A 1である。斎宮II-1期のものであろう。

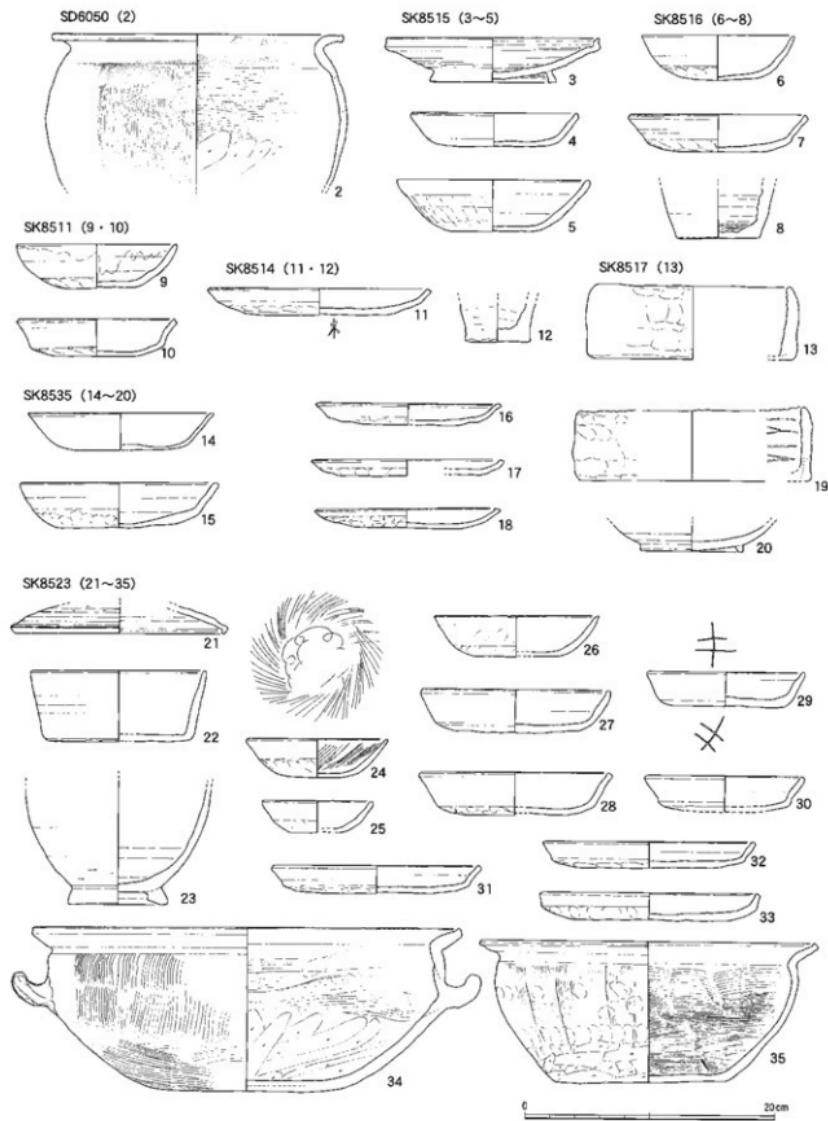
S B 8542出土土器（103・104） 103・104は灰釉陶器碗である。折戸53号窯式2型式から東山72号窯式にかけてのものであろう。104の高台内面には「衆」の墨書きが見られる。

その他ビット出土土器（105～115） 建物としてまとまらないビットから出土した土器をここにまとめた。105は須恵器杯B蓋、106～110は土師器で、106・107は杯A 1、108は小皿、109は杯A 2、110は皿A

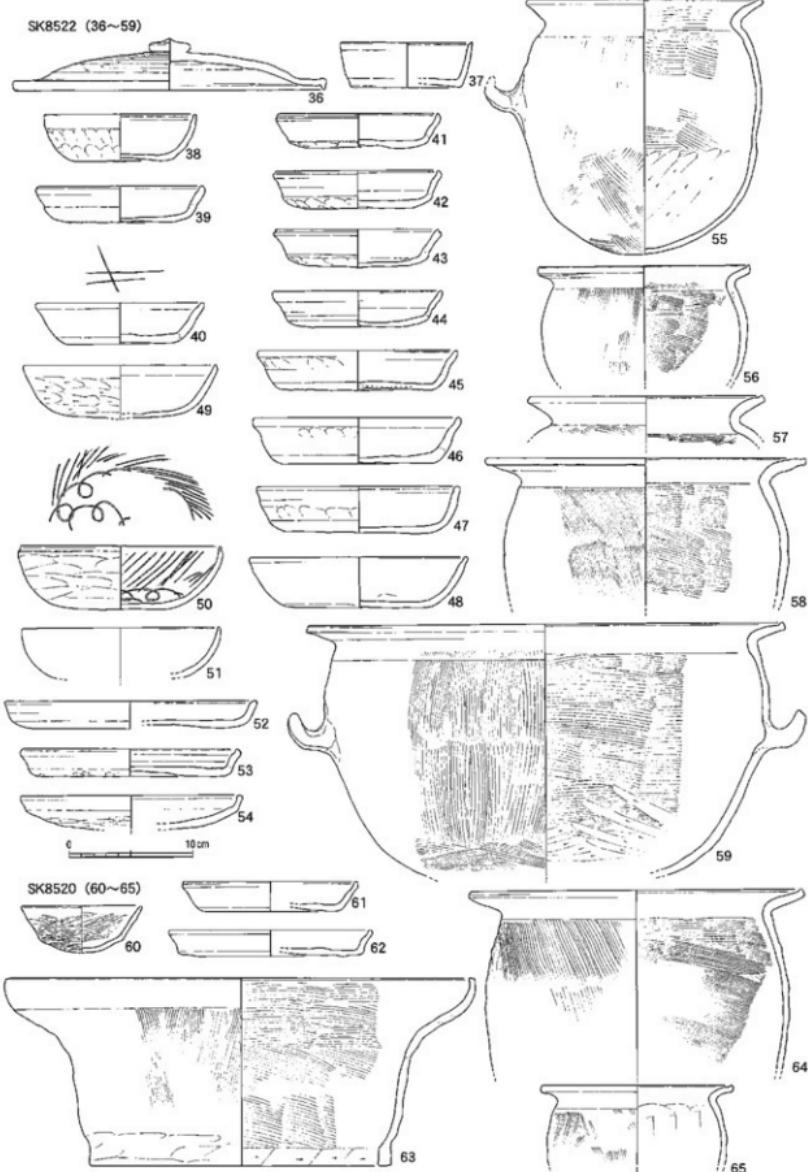
SD6050 (1)



第II-6図 第136次調査区 出土遺物実測図(1) (1:4)

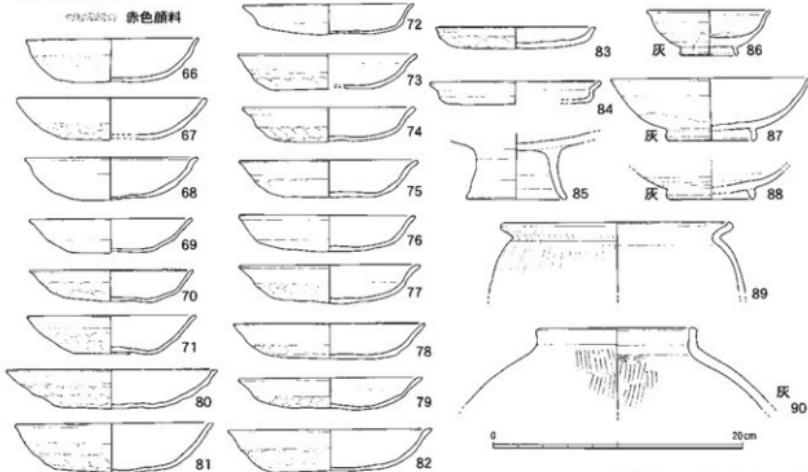


第II-7図 第136次調査区 出土遺物実測図(2) (1:4)



第II-8図 第136次調査区 出土遺物実測図(3) (1:4)

SK8529 (66~90)



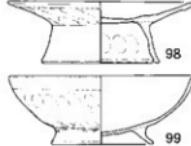
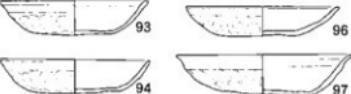
SK8518 (91)



SD8534混入 (92)



SK8546 (93~99)

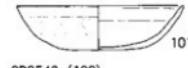


99

SB8540 (100)



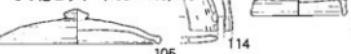
SB8537 (101)



SB8543 (102)



その他ピット (105~115)



111

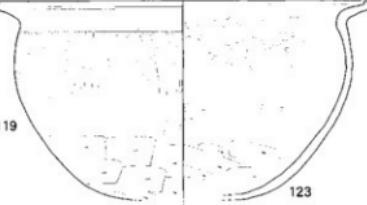
112

113

造模外 (116~123)



121



第II-9図 第136次調査区 出土遺物実測図(4) (1:4)

1である。106と107、および109と110はそれぞれ同一ビットから出土した。111～113は灰釉陶器楕・皿類。114は硯で、いわゆる「猿面硯」である。海部に同心円当て具痕が見られ、外側縁は研磨されている。115は須恵器で、円面硯の海部である。墨痕がよく残っている。

遺構外出土器 (116～123) 遺構に伴わずに出土した遺物をまとめた。116は須恵器円面硯、117は須恵器杯B蓋である。118は須恵器壺G、119は須恵器捏鉢で、底部外面には貫通しない刺突をランダムに施している。

120は綠釉陶器の楕で、全面に施釉が見られる。121は円管状のもので、貫通しない穿孔が中央に見られる。外面には螺旋状の凹線が巡っており、そこに綠釉の付着が認められることから、綠釉陶器の何らかの破片と考えられる。素地は軟質である。

123は土師器鍋Bと考えられる。破片のため、把手部は、遺存していかなかった。

その他の出土遺物 その他の特徴的な遺物には、軽石 (SK8529)、平瓦片 (SK8516)、記載内容不明の墨書き土器片 (SK8515)などがある。また、土錐が10個体ほど出土している。

鉄器・鉄製品類では、SK8535から鉄滓が、SK8522からは鉄釘のほか、用途不明の鉄器片が出土し

ている。

第136次調査区における綠釉陶器片の出土状況は、第II-3表にまとめた。総破数は37点である。これまでの調査区と比べて、当調査区での量はとくに多いというわけではない。

(伊藤裕偉)

5まとめと検討

第136次調査区の成果と課題をまとめておく。

(1) 地形の状況

今回の調査区は、調査区南端部の標高が9.7m(遺構検出面)で、北端はそれよりも約50cm低い9.2mである。今回の調査区からは南東にあたる、平成13年度に実施した第133次調査区では、北端が9.8m、南端が9.1mである。第133次調査区の南端は、方格地割西加座南ブロック南辺の区画溝(道路側溝)に近い。このことから、西加座南ブロックの南北断面は、南北端の区画溝(道路側溝)が低く、ブロックの中央部分が高い状態にあることがわかる。

第133次調査区の南部では、黒色土の堆積が確認でき、水脈が近い状況を確認していることから、元々地形的に低い部分に道路が設定されたと考えられる。それに対し、今回の第136次調査区では水脈が近いような状況は確認されていない。方格地割内部への水被害を防ぐために、西加座南ブロック北部の道路部分をやや下げるといった工夫がなされている可能性が考えられよう。

(伊藤裕偉)

(2) 方格地割道路内土坑群

西加座南ブロックの北辺となる区画溝SD6050の北部に、SK8511をはじめとした不定形土坑群が存在する。調査当初、これらの土坑は斎宮寮に関係しない時期の遺構かと想定したが、近世の遺構埋土であれば間違いなく含まれる基盤層のブロック土が見られず、黒色土を基本としたものであったことや、まとめた出土遺物こそ見られないものの、斎宮寮廃絶以後の遺物が全く見られないことなどから、斎宮寮機能時期に相当する遺構である可能性が高いものと判断している。

次数	地区	グリッド	遺構・器名	緑釉陶器片数	備考
136	S10	v5	包含層	1	
136	S10	v7	包含層	2	円筒状の破片(図II-9図121)
136	S10	v8	SK8529	3	
136	S10	v9	pit6	2	
136	S10	v9	SK8529	1	
136	S10	w4	包含層	1	輪花あり
136	S10	w5	包含層	6	
136	S10	w6	包含層	2	
136	S10	w7	包含層	1	
136	S10	w9	包含層	1	
136	S10	x10	pit5	1	
136	S10	x10	pit26	1	
136	S10	x5	溝2	1	
136	S10	x5	溝2	1	
136	S10	x6	溝2	1	
136	S10	x7	溝2	1	
136	S10	x8	pit9	1	輪花あり
136	S10	x8	溝2	1	
136	S10	y10	pit1	2	
136	S10	y5	包含層	1	
136	S10	y5	溝2	1	
136	S10	y8	pit1	1	
136	S10	y9	pit12	1	
136	不明	不明		3	うち1点は図示(図II-9図120)

第II-3表 第136次調査区綠釉陶器出土地点・破片数一覧

この土坑群から出土している土器類は、斎宮Ⅰ～4期を嚆矢にⅡ～1～3期を中心としたものである。つまり、出土遺物の状況からは、斎宮Ⅱ～2期頃にはこれら遺構の開削がなされていると考えられるのである。斎宮における方格地割の形成時期は、斎宮Ⅰ～4期と考えられているので、成立後間もなく、道路敷に土坑群が開削されたことになる。

方格地割道路敷が、成立後それほど時間を経ずに機能停止している状況は、第133次調査でも確認されている。方格地割の存在は、史跡斎宮跡を特長付ける重要な要素として公表されているが、その実態がいかなるものであったのかは未だ明確にはなっていないといえる。当調査区で確認された土坑群は、それを考察する上で非常に重要な資料となろう。

(伊藤裕像)

(3) 挖立柱建物の変遷

今回の調査では、掘立柱建物8棟と櫛（柱穴列）1列を確認した。8棟の掘立柱建物は、どの2棟を選んでも、必ず平面的に重複部分を有しているため、櫛1列を除いて、複数棟の同時存在はありえないと言える。したがって、この点を建物変遷検討に際しての前提とすることができるだろう。

さて、調査区内で検出された建物の新旧関係については先述したが、改めて建物どうしの切り合い関係から、先後関係を確定できる分についてまとめる

と、次のようになる。

S B 8536・8538→8537→8540→8542・S A 8545
(S B 8536・8538は同時存在ではないが、先後関係不明)

では、残るS B 8539・8541・8543はどこに位置付けられるだろうか。まず、S B 8541について考えてみたい。既に述べたように、S B 8541については柱穴の切り合いから、S B 8536→8541→8540という先後関係を確認できた。問題はS B 8538・8537との新旧関係が明らかでないことだが、S B 8536・8538・8537は、規模と主軸方位の共通性が極めて高く、ほぼ同一位置で検出されていることを考えると、連続して建て替えられた建物ではないかと考えられる。一方、S B 8541と8540の間には、東西に柱間一間分位置のなすれがあり、底の有無といった相違点も認

められるが、柱間間隔や主軸方位が非常に似通っている点に、連続性の高さを見出すことができそうに思われる。したがって、若干の不安要素を含みつつも、S B 8536の柱穴を切ると見られるS B 8541は、S B 8537よりも新しいと考えられ、先に示した建物変遷の順序にS B 8541を加えて、次のように考えることができる。

S B 8536・8538→8537→8541→8540

→S B 8542・S A 8545

つぎにS B 8539・8543についてだが、S B 8539の柱穴はS B 8536に切られているので、S B 8536・8538・8537が連続的な建て替えであるならば、S B 8536・8538のいずれよりも古いことになる。

では、最後に残ったS B 8543については、どのように考えられるだろうか。かなりの不安要素を孕みつつも、遺構検出時にはS B 8539がS B 8543に切られているように見受けられたので、一応S B 8539より新出の建物と考えたいが、他の建物との先後関係を遺構の切り合いから説明することは困難である。しかし、Ⅱ～3期に位置付けられるS K 8535の埋土除去後、その床面でS B 8543の柱穴が検出されていることが、この建物の時期を考える手がかりとなりそうである。

そこで、柱穴出土の遺物から、各建物の時期を検討してみる。ただし、調査区内での遺構の重複は非常に激しく、調査時に、一部新しい時期の遺構埋土を掘り残したまま切り合い関係にある古い柱穴の埋土を掘削している可能性も否定できないので、1・2点の小片での時期決定には慎重を期す必要がある。S B 8539 小片ばかりなので細かく時期を絞り込めないが、土師器はⅡ～3期以前と考えられ、灰釉陶器が小片も認められないことを踏まえれば、Ⅱ～1期にまで遡ることも考えられる。

S B 8536・8538・8537 図示していないが、いずれからも灰釉陶器片が出土しており、施釉方法と高台の形状が判るものは、いずれも刷毛塗りの三日月高台である。過去の調査事例から、こうした特徴を有する灰釉陶器はⅡ～3期の土師器に伴う可能性が高いと考えられ、これは伴出の土師器（第II～9図101）とも矛盾しない。

S B8541 小片ばかりなので細かく時期を絞り込めないが土師器はII-3期以前と考えられ、灰釉陶器片が出土している。

S B8540 図示した須恵器蓋（第II-9図100）は、II-3期以前のものと考えられるが、土師器杯の小片の中には白くて薄手のII-4期的な要素をもつものが認められ、II-3期～II-4期の過渡期頃に位置付けられる可能性が高い。

S B8542 図示した灰釉陶器のうち103（第II-9図）は灰釉が漬け掛けされており、過去の調査事例から、こうした施釉方法の灰釉陶器は平安時代中期以降の土師器に伴うことが知られている。また、伴出の土師器には白くて薄手の杯が多く、こうした特徴もこの建物を平安時代中期に位置付けること矛盾しない。

以上、S B8543をのぞく掘立柱建物の時期を、柱穴出土の遺物から検討してみたが、遺構の切り合いから想定した建物変遷との間に大きな矛盾はないことが判った。また、S K8535とS B8536・8538・8537はいずれもII-3期に位置付けでき、ほぼ同時期の遺構であると考えられ、これはS K8535とS B8536・8538・8537の間に重複関係が認められないこととも矛盾しない。したがって、S K8535に柱穴を切られるS B8543は、S B8536・8538・8537よりも古い可能性が高いと考えられる。さらに、時期的な形態変化の乏しい器形であるため、細かく時期を絞り込みにくいものの、S B8543の南西隅柱穴から出土した土師器碗Aの類品を、II-1期やII-2期に位置付けられる土器群の中に比較的容易に見出しうることは、この推測の傍証となるだろう（ちなみに、S B8543の柱穴のひとつから灰釉陶器碗の口縁部の小片が出土しているが、これは先にも触れたように調査時の遺物取り上げのミスかと思われる）。

すなわち、ここまで検討結果をまとめると、第136次調査で検出された建物については、次のような変遷順序を想定できる。

S B8539→8543→8536・8538→8537→8541
→8540→8542・S A8545
(S B8536・8538は先後関係不明で同時共存せず、S B8542とS A8545は同時共存する可能性あり。)

以上のことから、調査区内の建物変遷は大きく次の4時期に区分することが可能ではないかと考えられる。

第1期 建物の主軸方位が、真北と直交する東西線から4～8度ほどずれているS B8539・8543の時期。出土遺物からの時期決定が難しいが、II-2期以前に遡る可能性を有する。

第2期 建物の主軸方位が、真北と直交する東西線とほぼ一致しており、ほとんど同一の場所で同規模（5間×2間）の建物が連続的に建て替えられている時期。S B8536・8538・8537がこの時期の建物。柱穴出土の遺物から、II-3期と推定される。

第3期 建物の主軸方位は第2期とほとんど変わらないが、建物の位置がやや南にずれる時期。この時期の建物としては、S B8541・8540が該当する。出土遺物からみて、II-3期の終わり頃からII-4期にかかる時期かと思われる。

第4期 建物の主軸方位も位置も第3期と大きく変わらないが、柱間間隔が狭くなり、建物の平面規模が急速に小型化する時期。S B8542とS A8545が、この時期に属する。出土遺物から、II-4期と考えられる。

さて、改めてこの変遷から気付くことは、第1期と第2期の間で建物の主軸方位が大きく変化していることである。残念ながら、第1期の建物S B8543とS B8539がいつまで遡るかを示す直接的な証拠がないため、この変化が起きた時期については一部推測を交えざるえないが、II-3期以前であることはずまず間違いない。そして、II-3期の幅の中で、度々建物の建て替えが行われているらしいことを考えれば、第II期の始まりがII-3期に大きく食い込むことは考えにくい。したがって、建物主軸方位の変化を伴う第1期から第2期への転換は、II-2期もしくはそれ以前のことではないかと考えられる。これが、ちょうど斎宮の離宮院への一時移転時期と一致する可能性があることは注目に値する。つまり、建物の主軸方位の変化は離宮院へ移転する前と、当地に帰ってきた後の違いと評価できる可能性がある。

こうした建物主軸方位の変化は、今回の狭い調査区で確認されるだけの現象ではないことである。以前からこのような変化の方向性についての指摘はな

されており、今回の調査区周辺に限っても、同じ西加座南区画の第133次調査⁽⁵⁾では、同様の方向性での建物主軸方位の変化が報告されているし、西側の第120次調査⁽⁶⁾や同地区東半の第86次調査⁽⁷⁾などでもその傾向を読み取ることができる。こうした事例の多さから考えると、今後斎宮の研究を進める上で建物主軸方位の検討が更に重要な課題となることが予想されるが、詳細な検討はいずれ刊行される予定の正式報告書に委ねることとし、ここでは問題点の指摘にとどめておきたい。

(水橋公恵)

(4) S B 8543とS B 8544の関係

第136次調査区で確認されたS B 8543は、2001年度に実施した第133次調査の概報⁽⁸⁾で指摘した、「「寮庫」区画に類似する建物群」の1棟に相当する。第II-4図には、第120次調査区で検出されていた、同じくこれに該当する建物を「S B 8544」として表示した。これは、第120次調査区の概報作成段階では、掘立柱建物としてまとめられていなかったものである。

S B 8543とS B 8544は、方格地割西加座南区画東半部における当該建物群のなかで、東西2棟が並列する状況が明確に認識できる、現状では唯一の地点である。そのため、前年度の概報を補う意味で、この2棟の関係を見ておく。

まず、S B 8543と区画溝S D 6050との関係は、S D 6050の溝底中心からS B 8543の北側柱列までの間が約1,350cmで、1尺=30cm前後と見た際の45尺にあたる。これは、S B 8544とS D 6050溝底中心との間の数値と同様である。

つぎにS B 8543東側柱列とS B 8544西側柱列との間は約1,490cmで、尺換算では49.7尺となることから、50尺を基準にしたと考えられる。ただし、「寮庫」と推定されている西加座北区画では、同様な2棟間の間隔はまちまちである。一定の計画性があるとしても、それほど厳密なものではない可能性がある。

S B 8543は、前述のように時期的にはII-2期以前と指摘できるにとどまるが、西加座南区画東半部に、西加座北区画の「寮庫」と同じ時期に同様の区画が形成される時期のあることは認めてよいと考え

られる。

(伊藤裕偉)

<註>

- (1)過去の報告書等では西加座南地区と呼ばれることが多かったが、単に調査地点の字名をさす場合もあり、若干の混乱が認められる。方格地割の単位については、地区以外にブロックとも呼ばれており、統一された呼称ではないが、ここでは、区画という名称を使用する。
- (2)駒田利治・泉 雄二・倉田直純「斎宮跡の土器」(『斎宮跡発掘調査報告』I 斎宮歴史博物館 2001年)
- (3)都城編年については、奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』XIV (1993年) のほか、古代の土器研究会編『古代の土器 I 都域の土器集成』(1992年) を参照した。
- (4)齋藤孝正「猿投窓出土の灰釉・綠釉陶器碗・皿類の変遷」(『日本の美術』No. 409 越州窯青磁と綠釉・灰釉陶器 2000年 至文堂) 以下、灰釉陶器についてはこの文献に掲る。
- (5)斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡 平成13年度発掘調査概報』(2003年)
- (6)斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡 平成9年度発掘調査概報』(1999年)
- (7)斎宮歴史博物館『史跡斎宮跡 平成2年度発掘調査概報』(1991年)
- (8)斎宮歴史博物館編註(5)文献に同じ。

No	出土遺物	断面	法量 (cm)	調査・技法の特徴		出土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
				調査	技法						
1	S10-w6 SK 8050	上端部 電池	口縁 断面	14.6 34.7	裏:ヨコナギ、外:ハケメ、内:ハケメ。 横手棹入付	椎	良	にぶい黄褐 10YR7/4	口縁 8/12	内面下半に保	028-1
2	S10-w6 SK 8050	土器器 蓋A	口縁 断面	23.6 17.4	口内:ヨコナギ、外:ハケメ、内:(上)ハ ケメ。(下)ケズリ ハケメ。(下)ケズリ	やや 溶	良	浅黄褐 7.5YR8/4	口縁 1/12		023-2
3	S10-w5 SK 8515	羽衣器 盤B	口縁 断面	17.4	口内:回転ナヂ、外:回転ケズリ、ツ マミ貼付ヨコナギ	南	堅綱	黄灰 2.5Y6/1	口縁 3/12		021-1
4	S10-w5 SK 8515	土器器 杯A	口縁 断面	13.6 2.7	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	南	良	焼 5YR6/8	口縁 5/12	剥離	021-3
5	S10-w5 SK 8515	土器器 杯A	口縁 断面	15.6 4.2	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	南	良	黄褐 7.5YR7/8	口縁 6/12		021-2
6	S10-w5 SK 8516	土器器 碗A	口縁 断面	12.2 3.6	裏外:オサエナデ、以外削離	粗	秋	焼 5YR6/8 11/12	口縁	剥離	021-4
7	S10-w5 SK 8516	土器器 杯A	口縁 断面	14.4 3.6	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	密	良	焼 7.5YR7/6	口縁 5/12		021-5
8	S10-w5 SK 8516	土器器 底	口縁 断面	6.8	全体:回転ナヂ、底外:糸切り、内:回 転ナヂ	密	堅綱	灰 N6/0	底 4/12	底外面にぼらしき斑模	021-6
9	S10-w5 SK 8514	土器器 瓶A	口縁 断面	13.0 3.6	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	密	良	焼 5YR6/8	口縁 6/12	口縁部に当焼痕	020-2
10	S10-w5 SK 8514	土器器 杯A	口縁 断面	13.0 3.0	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	南	良	白 2.5YR6/8	口縁 2/12	底外側に剥離	020-1
11	S10-w5 SK 8514	土器器 瓶A	口縁 断面	18.0 3.0	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	南	良	焼 5YR6/8	口縁 2/12	底外面に剥離「木」	020-3
12	S10-w5 SK 8514	土器器 底	口縁 断面	2.2	2体:外:無いナヂ(ケズリ状)、底外:糸切り、内: ナヂ	堅綱	青灰 5BG5/1 12/12		底		020-4
13	S10-w5 SK 8517	土器器 質端土器	口縁 断面	16.8 6.0	内:外:オサエ・ナヂ	粗 小石子	秋	焼 5YR6/6	口縁 2/12	志摩式質端土器	021-7
14	S10-w5 SK 8525	土器器 杯A	口縁 断面	15.0	調査不明	並	秋	焼 7.5YR7/8	口縁 1/12	剥落観察	001-5
15	S10-w10 SK 8525	土器器 杯A	口縁 断面	16.0 4.0	口内:ヨコナギ、外:ナヂオサエ	並	貯留	灰黄褐 10YR4/2	口縁 4/12		001-1
16	S10-w10 SK 8525	土器器 底	口縁 断面	15.6 1.7	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	並	秋	焼 7.5YR7/6	口縁 2/12		001-4
17	S10-w10 SK 8525	土器器 底	口縁 断面	15.5 1.2	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	並	秋	焼 5YR6/8	口縁 3/12		001-3
18	S10-w10 SK 8525	土器器 瓶A	口縁 断面	15.0 1.5	口内:ヨコナギ、外:ナヂオサエ	並	秋	白 5YR6/8	口縁 3/12		001-2
19	S10-w10 SK 8525	土器器 質端土器	口縁 断面	18.6 5.6	内:外:オサエ・ナヂ	甚 多石子	並	灰褐 7.5YR5/1	口縁 1/12	志摩式質端土器 二次的な被熱あり	001-6
20	S10-w10 SK 8525	灰陶器 瓶	高台	8.3	底外:ヨコナギ裏口ヨコナギ、底内:ヘラ起し 曳出ヨコナギ裏ヨコナギ、内:ヘラヨコナギ	やや 硬	焼	灰白 N8/0	高台 6/12	内外面に自然焼灰か? 内面にトーション	001-7
21	S10-w6 SK 8523	泥水器 杯B	口縁	17.6	口内:ヨコナギ、外:回転ケズリ	並	硬	灰 10Y5/1	口縁 4/12		008-5
22	S10-w6 SK 8523	泥水器 杯A	口縁 断面	14.2 5.7	体外:内:ヨコナギ、底外:回転ヘラケ ナヂ	半 白粉	堅綱	サリーブ灰 2.5GY6/1	口縁 1/12		009-3
23	S10-w6 SK 8523	泥水器 瓶A	高台	8.1	裏外:回転ナヂ(層:ケズリ)、底外:回 転ヘラケ	半 白粉	反オリーブ 5Y6/2	高台 12/12	体外内面に自然焼	009-4	
24	S10-w7 SK 8523	土器器 杯A	口縁 断面	11.4 3.1	(上)ヨコナギ、外:オサエナデ、内:粒 状軸と螺旋状凹凸	粘結	秋	白 5YR6/8	口縁 9/12	明道温使用 四方に施埋	008-3
25	S10-w7 SK 8523	土器器 瓶A	口縁 断面	9.0 (5.5)	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	並	秋	白 7.5YR7/8	口縁 4/12	粗製	008-4
26	S10-w7 SK 8523	土器器 杯A	口縁 断面	13.2 3.2	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	並	秋	白 5YR6/8	口縁 3/12		007-5
27	S10-w7 SK 8523	土器器 杯A	口縁 断面	15.0 3.5	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ、瓶 底外:ナヂ	甚 秋	焼	5YR6/8 11/12	口縁	底面部に黒化部あり	007-2
28	S10-w7 SK 8523	土器器 杯A	口縁 断面	15.5 3.4	口内:ヨコナギ、外:ユビオサエ	甚 秋	焼	5YR6/8	口縁 3/12		007-3
29	S10-w7 SK 8523	土器器 杯A	口縁 断面	12.7 2.8	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	並	秋	白 5YR6/8 11/12	口縁	内燃灰に「木」字形のへら凹み 外側に焼付	007-1
30	S10-w7 SK 8523	土器器 瓶A	口縁 断面	12.9 3.0	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	並	秋	白 5YR6/8	口縁 4/12		007-4
31	S10-w7 SK 8523	土器器 瓶A	口縁 断面	16.9 2.2	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	甚 秋	焼	5YR6/8	口縁 4/12		008-2
32	S10-w7 SK 8523	土器器 瓶A	口縁 断面	17.0 2.1	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ	並	秋	白 5YR6/8	口縁 4/12		008-1
33	S10-w7 SK 8523	土器器 瓶A	口縁 断面	17.6 2.2	口内:ヨコナギ、体外:オサエナデ、内: 2.2 ホワイトオサエナデ	やや 堅綱	白 5YR6/8	口縁 6/12			009-2
34	S10-w7 SK 8523	土器器 瓶A	口縁 断面	34.6 13.2	口内:ヨコナギ、内:ハケメ、内:(上)ハ ケメ。(下)ケズリ	良 白 5BG5/2	良 浅黄褐 7.5YR5/6	口縁 5/12	口縁部に泥		010-1
35	S10-w7 SK 8523	土器器 瓶A	口縁 断面	27.1 11.7	3.3ヨコナギ、体外:1.2ヨコナギと2.2ナヂ、(下) ナヂナヂと2.2ナヂ	やや 秋	白 5YR6/8	口縁 8/12			009-1
36	S10-w7 SK 8523	土器器 瓶A	口縁 断面	25.4 2.2	口内:ヨコナギ、外:回転ケズリ、ツ マミ貼付回転ナヂ	南	堅綱	灰白 N8/0	口縁 1/12		017-4
37	S10-w7 SK 8523	土器器 杯A	口縁 断面	10.7 3.6	外:内:ヨコナギ、底外:回転ケズリ	南	堅綱	灰 N6/0	口縁 2/12		017-5
38	S10-w7 SK 8523	土器器 杯A	口縁 断面	12.3 3.5	口内:ヨコナギ、外:オサエナデ、内: ナヂ	良 白 5YR7/4	良 浅黄褐 10YR7/4	口縁 3/12			016-2
39	S10-w7 SK 8522	土器器 杯A	口縁 断面	13.6 2.9	1.1(内)ヨコナギ、外:ナヂ	やや 秋	白 5YR6/8	口縁 4/12	内面に「キ」字形のへら凹み	015-2	
40	S10-w7 SK 8522	土器器 杯A	口縁 断面	13.6 3.3	1.1(内)ヨコナギ、内:ナヂ	やや 秋	白 5YR6/8	口縁 5/12	色調の違う2片が接合	015-1	
41	S10-w7 SK 8522	土器器 杯A	口縁 断面	13.4 2.8	1.1(内)ヨコナギ、内:ナヂ	良 秋	白 5YR6/8	口縁 8/12		013-4	

第II-4表 第136次調査区出土遺物観察表(1)

No.	出土場所	器種	法量 (cm)	調整・技法の特徴	出土	構成	色 漆	残存度	備考	登録No.
42	S10-w7 SK.8522 杯A.1	土師器 蓋高	13.6 3.0	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 3.0	直 直	根 SYR6/8	口縁 6/12		015-5	
43	S10-w7 SK.8522 杯A.1	土師器 蓋高	13.6 3.0	口～内：ヨコナヂ、外：無いオサエナヂ 3.0	直 直	根 SYR7/8	口縁 5/12		015-4	
44	S10-w7 SK.8522 杯A.1	土師器 蓋高	13.6 2.9	口～内：ヨコナヂ、外：オサエナヂ 2.9	直 直	根 SYR6/8	口縁 8/12		015-3	
45	S10-w7 SK.8522 杯A.1	土師器 蓋高	16.4 3.2	口：ヨコナヂ（一部オサエナヂ） 3.2	直 直	根 SYR7/6 根石	口縁 9/12 内面剥離		013-6	
46	S10-w7 SK.8522 杯A.1	土師器 蓋高	16.9 3.6	口：ヨコナヂ（一部オサエナヂ）、外： 3.6 ユビオサエ 3.6	直 直	根 SYR6/6	口縁 8/12		013-5	
47	S10-w7 SK.8522 杯A.1	土師器 蓋高	16.4 3.6	口：ヨコナヂ、体外：オサエナヂ、内： 3.6 ユビオサエ、内：ナヂ 3.6	直 直	根 7.5YR7/6 11/12	口縁 11/12		013-1	
48	S10-w7 SK.8522 杯A.2	土師器 蓋高	17.6 2.2	口：ヨコナヂ、外：剥離、内：ナヂ 2.2	直 直	根 SYR6/8	口縁 5/12 外側剥離		016-1	
49	S10-w7 SK.8522 杯A.2	土師器 蓋高	15.6 4.2	口：ヨコナヂ、体外：無いケズリ 4.2	直 直	根 SYR6/8	口縁 5/12		013-3	
50	S10-w7 SK.8522 杯C	土師器 蓋高	16.4 7.1	口：ヨコナヂ、ヘラ、外：ナヂ、内：ナヂ、 7.1 傷文	直 直	根 SYR6/8 内 7.1	口縁 10/12		014-1	
51	S10-w7 SK.8522 杯C	土師器 蓋高	16.1 内	内：ナヂ	直 直	根 SYR7/8	口縁 1/12		013-2	
52	S10-w7 SK.8522 束A.1	土師器 蓋高	20.3 2.2	口：ヨコナヂ、外：オサエナヂ、内：ナ 2.2	直 直	根 SYR6/6	口縁 3/12		016-4	
53	S10-w7 SK.8522 束A.1	土師器 蓋高	17.8 2.2	口：ヨコナヂ、外：ユビオサエ、内：ナ 2.2	直 直	根 2.5YR6/8 内 2.2	口縁 2/12		015-6	
54	S10-w7 SK.8522 束A.1	土師器 蓋高	17.8 内	口：ヨコナヂ、体外：ナヂ、外：板ナ 内：ナヂのケズリ、内：ナヂ	直 直	根 SYR6/8 内 1.5	口縁 4/12		016-3	
55	S10-w7 SK.8522 束B	土師器 口縁	19.0 内	口：ヨコナヂ、(口)ナヂ、ナヂ(口)ナヂ、内： 内：ナヂ(口)ナヂ、(口)ケズリ、(口)ナヂのケズリ 内：ナヂ	直 直	灰白 2.5YR8/2 内 1.5	口縁 8/12 把手 1ヶ所のみ 外側に剥離		019-1	
56	S10-w7 SK.8522 束A	土師器 口縁	17.0 内	口：ヨコナヂ、内：ケズリ	直 直	灰 10YR7/4	口縁 4/12		017-2	
57	S10-w7 SK.8522 束A	土師器 口縁	19.0 内	口：ヨコナヂ、内：ハケメ	直 直	灰 7.5YR5/4	口縁 3/12 外側に剥離		017-1	
58	S10-w7 SK.8522 束C	土師器 口縁	25.8 内	口：ヨコナヂ、内：ハケメ	直 直	灰 7.5YR7/6	口縁 3/12 外側に薄く剥離		017-3	
59	S10-w7 SK.8522 束B	土師器 口縁	38.8 内	口：ヨコナヂ、(口)ナヂ(口)ナヂ、(口)ナヂ(口) 内：ハケメ、(口)ケズリ、(口)ナヂ(口)ナヂ 内：ナヂ	直 直	根 SYR7/8 内 1.5	口縁 4/12 把手付属		018-1	
60	S10-w7 SK.8520 束A	土師器 口縁	9.7 3.8	口～内：ヨコナヂ後にガモ、外：ユビオ 3.8 サビ後ミガモ	直 直	根 SYR6/8 内 1.5	口縁 6/12 把手 1ヶ所のみ 外側に剥離		011-3	
61	S10-w7 SK.8520 杯A.1	土師器 口縁	14.1 2.4	口～内：ヨコナヂ、外：ケズリ	直 直	根 2.5YR6/6 内 1.5	口縁 4/12		011-1	
62	S10-w7 SK.8520 束A.1	土師器 口縁	16.4 2.1	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ、 2.1 逃げ？ナヂ	直 直	根 SYR6/6 内 1.5	口縁 1/12 底面 4/12		011-2	
63	S10-w7 SK.8520 束A.2	土師器 口縁	38.1 15.3	口：ヨコナヂ、外：(上)ハゲメ、(下)ナヂ 15.3 オサエナヂ、内：ハケメ、(脚)ケズリ	直 直	灰 7.5YR7/4 内 1.5	口縁 3/12 内面に瘤ないしは灰化物付着 7.5YR7/4 内 1.5		012-2	
64	S10-w7 SK.8520 束C	土師器 口縁	27.0 内	口：ヨコナヂ、内：ハケメ	直 直	灰 10YR6/4	口縁 2/12		012-1	
65	S10-w7 SK.8520 束A	土師器 口縁	15.5 内	口：ヨコナヂ後ミガモ、外：ユビオサエ、 内：ハケメ、外：オサエナヂ、板ナヂ	直 直	灰 10YR6/3	口縁 2/12		011-4	
66	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	14.2 3.5	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 3.5	直 直	根 7.5YR7/6 内 1.5	口縁 3/12 内面に赤色鉱物による設けた 10YR6/3		004-5	
67	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	15.4 3.6	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 3.6	直 直	根 SYR6/6 内 1.5	口縁 4/12		004-8	
68	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	14.1 3.4	口：ヨコナヂ、以外不明	直 直	根 SYR6/8 内 1.5	口縁 9/12 外側剥離		004-4	
69	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	13.2 2.6	調査不明	直 直	根 7.5YR7/6 内 1.5	口縁 3/12 外側剥離		004-6	
70	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	13.2 2.5	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 2.5	直 直	根 10YR7/6 内 1.5	口縁 9/12		004-1	
71	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	13.6 3.1	口～内：ヨコナヂ、外：オサエナヂ 3.1	直 直	根 7.5YR7/6 内 1.5	口縁 4/12		002-2	
72	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	13.7 2.5	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 2.5	直 直	根 7.5YR7/6 内 1.5	口縁 12/12 内面剥離或開口		005-2	
73	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	14.5 2.9	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 2.9	直 直	根 10YR7/6 内 1.5	口縁 3/12 口縁部に油煙痕 10YR7/6		005-5	
74	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	14.0 2.8	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 2.8 底部：不明	直 直	根 7.5YR7/6 内 1.5	口縁 10YR7/4		003-4	
75	S10-w8 SK.8529 杯A.1	土師器 口縁	14.5 3.0	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 3.0	直 直	根 7.5YR7/8 内 1.5	口縁 9/12		004-3	
76	S10-w8 SK.8529 杯A.1	土師器 口縁	14.2 2.9	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 2.9	直 直	根 SYR6/6 内 1.5	口縁 5/12		005-1	
77	S10-w8 SK.8529 杯A.1	土師器 口縁	14.5 3.1	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 3.1	直 直	根 7.5YR7/6 内 1.5	口縁 7/12		005-3	
78	S10-w8 SK.8529 杯A.1	土師器 口縁	15.4 2.9	口～内：ヨコナヂ、外：不明 (ユビ縫) 2.9	直 直	根 7.5YR7/6 内 1.5	口縁 5/12 外側磨滅		005-4	
79	S10-w8 SK.8529 杯A.1	土師器 口縁	14.8 2.5	口～内：ヨコナヂ、外：オサエナヂ 2.5	直 直	根 10YR7/4 内 1.5	口縁 7/12		003-1	
80	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	17.0 3.2	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 3.2 底部：オサエナヂ 3.2	直 直	根 7.5YR7/6 内 1.5	口縁 8/12		003-2	
81	S10-w8 SK.8529 杯A.2	土師器 口縁	16.0 4.0	口～内：ヨコナヂ、外：ユビオサエ 4.0 底部：オサエナヂ 4.0	直 直	根 10YR7/4 内 1.5	口縁 10/12		003-3	
82	S10-w8 SK.8529 杯A.1	土師器 口縁	16.4 3.4	口～内：ヨコナヂ、外：オサエナヂ 3.4	直 直	根 10YR7/6 内 1.5	口縁 11/12 外側剥離		004-2	

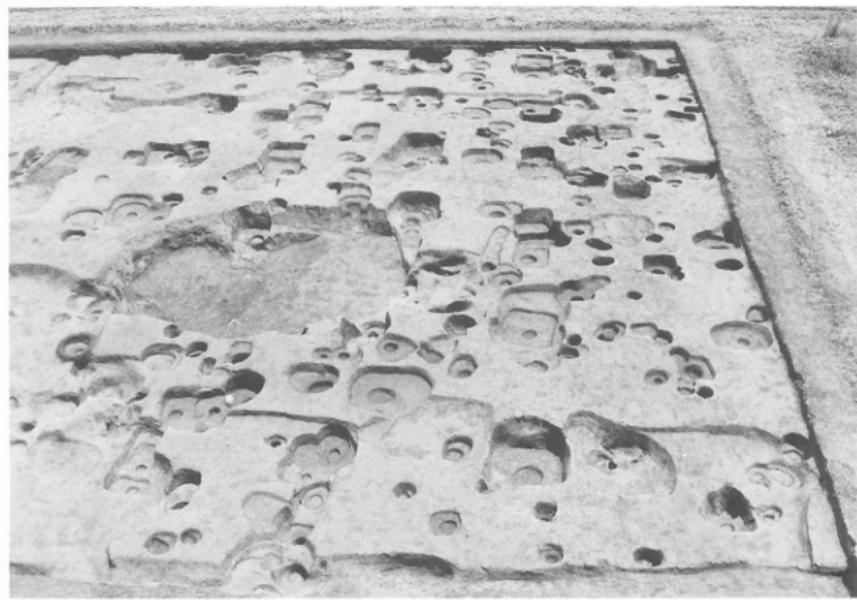
第II-5表 第136次調査区出土遺物観察表(2)

No.	出土遺物	種類	法量 (cm)	調整・技法の特徴	鉱土	焼成	色調	残存度	備考	登録No.
83	S10-w8 SK8529	土師器 皿	12.8 1.7	口内～：ヨコナヂ、外：オサエナヂ	赤	灰	に赤い黄斑 10YR7/4	口縁 12/12		003-5
84	S10-w8 SK8529	土師器 皿	13.8	口～内：ヨコナヂ、外：不明	良 半色均	灰	に赤い黄斑 10YR7/3	口縁 9/12		005-6
85	S10-w8 SK8529 台付器	窓台	8.1	ヨコ方向のナヂ	粘土	灰	明灰褐色 10YR7/4	高台 11/12		004-7
86	S10-w8 SK8529	灰陶器 小鉢	9.0	体外～内：ロクロナヂ、底外：ロクロケズリ	差	被覆	灰黃 2.5Y7/2	口縁 4/12 底面 11/12	口縁抜け部分 底面へラ起し	002-3
87	S10-w8 SK8529	灰陶器 鉢	10.0	口内：ロクロナヂ、底外：ロクロケズリ ロクロケズリ追加ロクロナヂ、底外：ロクロケズリ	差	被覆	灰白 2.5Y8/1	口縁 4/12 高台 4/12	口縁抜け部分 内面は全面灰陶	002-5
88	S10-w8 SK8529	灰陶器 鉢	7.2	体外：ロクロナヂ、底外：ロクロケズリ、 内：ロクロナヂ	差	被覆	淡黃 2.5Y5/3	高台 4/12	口縁抜け部分 内面は全面灰陶	002-4
89	S10-w8 SK8529	土師器 甕	18.0	口：ヨコナヂ、外：ハケキ、内：不明	やや 黒	灰	に赤い黄斑 10YR7/4	口縁 2/12		002-1
90	S10-w8 SK8529 直頭器	口縁	12.8	口：ヨコナヂ、外：タタキ、内：あて長 直	差	直頭	灰白 2.5Y7/1	口縁 2/12	口縁～外面に灰陶 直頭部剥み	002-6
91	S10-x4 SK8518 伴A2	土師器 甕	14.1	口：ヨコナヂ、外：オサエナヂ、内：ナ シ子	良	青灰	10YR8/6	口縁 8/12		021-8
92	S10-y9 SD852	灰陶器 桶	14.0	体外～体内：ロクロナヂ、底外：系切り、 内：ナシ子	やや 黒	灰	灰白NB8/0	口縁 5/12 高台 4/12	灰陶底が剥みあり	023-4
93	S10-w8 SK8546	土師器 杯A2	11.9	口：ヨコナヂ、外：オサエナヂ、内：ナ シ子	やや 黒	良	橙 7.5YR7/6	口縁 3/12		026-3
94	S10-w8 SK8546	土師器 杯A2	2.9	ナシ子	良	青灰	2.5Y8/3	口縁 11/12		026-2
95	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	12.1	口：ヨコナヂ、外：オサエナヂ、内：ナ シ子	やや 黒	良	浅灰 10YR8/3	口縁 8/12		026-1
96	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	12.3	口：ヨコナヂ、外：オサエナヂ、内：ナ シ子	やや 黒	良	浅灰 10YR8/3	口縁 10/12		026-8
97	S10-w8 SK8546	土師器 杯A2	12.3	口：ヨコナヂ、内：オサエナヂ	差	良	浅灰 10YR8/3	口縁 8/12	灰陶底が剥みあり	023-5
98	S10-w8 SK8546	土師器 杯A2	2.4	ナシ子	良	青灰	7.5YR7/6	口縁 6/12	内面剥き跡	027-3
99	S10-w8 SK8546	土師器 杯A3	14.2	口：ヨコナヂ、外：オサエナヂ、内：ナ シ子	やや 黒	良	橙 10YR7/3	口縁 3/12		026-5
100	S10-w8 SK8546	土師器 杯A3	3.5	ナシ子	良	青灰	2.5Y8/3	口縁 11/12		026-2
101	S10-w8 SK8546	土師器 杯A2	15.0	口：ヨコナヂ、外：系切り、底外：ナシ、内：ナ シ子	良	浅灰	7.5YR8/6	口縁 5/12 高台 4/12		026-5
102	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	5.1	口：ヨコナヂ、内：ナシ子（泡立サク）	良	浅灰	7.5YR8/6	口縁 12/12 高台 12/12		026-4
103	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	14.0	口：ヨコナヂ、外：オサエナヂ、内：ナ シ子	やや 黒	良	浅灰 7.5YR8/6	口縁 12/12 高台 12/12		026-4
104	S10-w8 SK8546	土師器 杯A2	15.9	口～内：ロクロナヂ、外：ロクロケズリ、ブ ル	良	灰	N6/	口縁 1/12		024-3
105	S10-w8 SK8546	土師器 杯A2	4.4	ナシ子	良	灰	N6/	口縁 1/12		025-5
106	S10-w8 SK8546	土師器 杯A2	13.3	口：ヨコナヂ、外：オサエナヂ、内：ナ シ子	やや 黒	良	橙 7.5YR7/6	口縁 8/12		025-5
107	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	3.5	ナシ子	良	青灰	7.5YR7/6	口縁 10/12	内外面剥落	025-2
108	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	14.2	口：ヨコナヂ、内：ナシ子（泡立サク）	良	小石	灰白 10YR6/4	口縁 10/12		025-2
109	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	3.5	ナシ子	良	青灰	2.5Y8/2	口縁 8/12	内外面剥落	024-4
110	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	16.8	口～内：ロクロナヂ、底外：ロクロケズリ 底内：ナシ子	良	灰白 2.5Y7/3	口縁 8/12			024-4
111	S10-w10 SK8546	土師器 杯A2	8.8	体外～内：ロクロケズリ、底外：ロクロケズリ ロクロナヂ	良	灰	N7/0	高台 8/12	当軸痕なし 正面に墨書き「波」	024-1
112	S10-w10 SK8546	土師器 杯A2	13.6	口：ヨコナヂ、外：オサエナヂ、内：ナ シ子	良	灰	7.5Y6/1	完形		027-6
113	S10-w10 SK8546	土師器 杯A2	2.8	ナシ子	良	灰	7.5Y6/1	完形		027-6
114	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	14.1	口：ヨコナヂ、外：ナシ子（泡立サク）	良	青灰	7.5YR8/6	口縁 12/12	内外面剥落	025-3
115	S10-w8 SK8546	土師器 杯A1	3.4	ナシ子	良	青灰	5YR6/6	口縁 10/12		025-4
116	S10-w10 SK8546	土師器 杯A1	11.1	口：ヨコナヂ、外：ナシ子（泡立サク）、内： ナシ子	良	青灰	10YR8/4	口縁 12/12	内外面剥落、裏変	027-2
117	S10-w10 SK8546	土師器 杯A2	15.3	口：ヨコナヂ、外：ナシ子（泡立サク）	良	青灰	7.5YR7/6	口縁 12/12	内外面剥落、 底外側黒変	027-5
118	S10-w10 SK8546	土師器 杯A1	2.1	ナシ子	良	青灰	5YR7/6	口縁 11/12	内外面剥落、 底外側黒変	027-4
119	S10-w10 SK8546	土師器 杯A1	15.7	口：ヨコナヂ、外：ナシ子（泡立サク）	良	青灰	5YR7/6	口縁 11/12	内外面剥落、 底外側黒変	027-4
120	S10-w10 SK8546	土師器 杯A1	1.9	ナシ子	良	青灰	5YR7/6	口縁 11/12	内外面剥落、 底外側黒変	027-4
121	S10-w7 包含柄	直径	7.7	ロクロナヂ、高台付	良	灰	5YR7/1	口縁 12/12	内面に自然釉	024-5
122	S10-w9 包含柄	直径	18.0	ロクロナヂ、体外：ロクロナヂ、内：ロクロナヂ、 ケズリ、底外：ロクロケズリ発達	良	青灰	2.5Y7/1	高台 4/12		024-2
123	S10-w8 pH7	直徑	—	（既：アーチ形、裏面：タキナギ+ケズリ、 既：ミガキ）	差	既	既N7/0	小片	背面留脂を軸用 既面に墨書き、墨脱	025-1
124	S10-w8 SK8546	直徑	—	外：（心）ロクロケズリ、（縄）ロクロナヂ、 内：ロクロナヂ	差	既	既N7/0	裏面 3/12	背面留脂を軸用 既面に墨書き、墨脱	026-1
125	S10-w6 包含柄	直徑	11.1	ロクロナヂ、縄：粘土、線削	良	青灰	5YR7/0	縫		022-3
126	S10-w6 包含柄	直徑	16.2	（内：ミガキ、外：自転軸ケズリ、 ケズリ、ナシ子）	良	青灰	N7/0	口縁 2/12	既面N4/0 既面N6/0	023-3
127	S10-w5 包含柄	直徑	5.2	体外：ロクロナヂ、底外：糸切り、内：ヨ コナヂ	良	青灰	N7/0	底部 6/12	既面N4/0 既面N6/0	023-5
128	S10-w5 包含柄	直徑	10.4	ロクロナヂ、既面は底軸具によるランダ ムな剥離	良	青灰	N8/0	底部 6/12		022-4
129	S10-w5 包含柄	高台	9.0	ロクロナヂ、高台付、全面施塗	良	青灰	N7/0	高台 3/12		022-5
130	S10-w7 包含柄	直徑	7.8	ロクロナヂ、既面付、既面引抜、内： ロクロナヂ	良	青灰	N8/0	高台 9/12	既面に重ね焼成	022-2
131	S10-w8 包含柄	直徑	30.0	（内：ヨコナヂ、外：（心）ハケメ、（縄）ケズリ、 内：（心）ナヂ、ハケメ、（縄）ケズリ）	良	青灰	10YR8/3	口縁 4/12	把手は遺存せず	022-1

第II-6表 第136次調査区出土遺物観察表(3)



全景（北から）



南部掘立柱建物集中部分（西から）



SD6050 (西から)



SK8514付近 (西から)



SK8514土層（南から）



SK8510土層（南から）



SK8529 (南東から)



SK8529 土師器杯類集中部分 (東から)



SK8522 (南から)



SK8546 (東から)



1



1



裏側

3



9



5



10



6



12



24



27



29



47



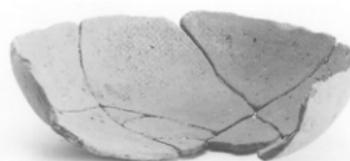
34



49



35



50



44



55



45



60



46





86



99



91



101



94



102



95



105



96



106



98



107



108



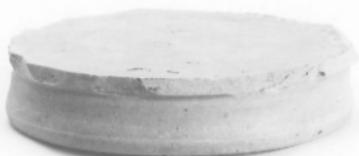
111



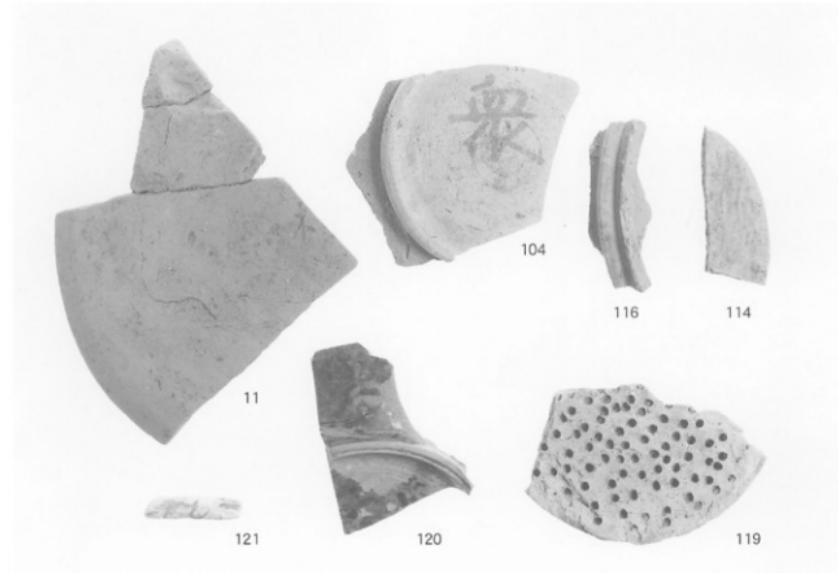
109



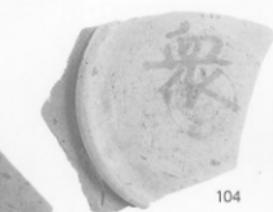
110



112



11



104



116



114



120



119

III 第137次調査

(6AG8・H8・H9・I9 中垣内地区)

1 調査の経緯と経過

第137次調査は、多気郡明和町竹川字中垣内地内で史跡斎宮跡の西部地域に位置している。調査区の周辺では、斎宮跡発見の端緒となった古里遺跡B地区（第3次調査）や飛鳥時代のものと考えられる東西の方向に延びる柵が検出された第100次調査などが行われているものの、史跡西部については、未だ解明の途上といえよう。

史跡西部の解明のために、平成14年度を皮切りに5年の予定で、これまで調査の入っていない部分を基本として、幅4mのトレンチを入れることとした。斎宮跡で設定している旧国土座標に乗った地区に沿って調査は設定した。なお、旧竹神社周辺については、立木の制約があり任意に調査区を設定した。調査面積は700m²、調査は平成14年8月19日に開始し、同年12月3日に現地作業は終了した。現地説明会は同年11月2日に行い、150名の一般参加があった。

2 調査区の層位

基本的には、表土あるいは耕作土を除去後、上から褐色灰土（5YR4/1）、黒褐色土（10YR3/1・遺物包含層）、橙色土（7.5YR7/6・遺構検出面）となる。場所によっては、橙色土に褐色灰土（10YR4/1）が混入している状況であった。調査区の東側ほど遺構検出面への到達が深くなるようである。周辺の地形をみても、谷地形と考えられる部分が調査区の東側である。

橙色土上面において、多くの遺構を検出した。この層は明確に遺構が検出できる層位であって、この層より上の黒褐色土上面での検出も可能と思われる。しかしながら、遺構検出面と遺構埋土が、黒褐色の同系統の色調であるため、黒褐色土上面での検出を、一部で実施したが判別は困難であった。

3 遺構

今回の調査区では、飛鳥時代から近世のわたる遺

構群を確認した。ここでは、主だったものを紹介する。紹介しなかった遺構については、後掲の遺構・掘立柱建物・竪穴住居の一覧表（第III-1～5表）を参照願いたい。

（1）古代の遺構

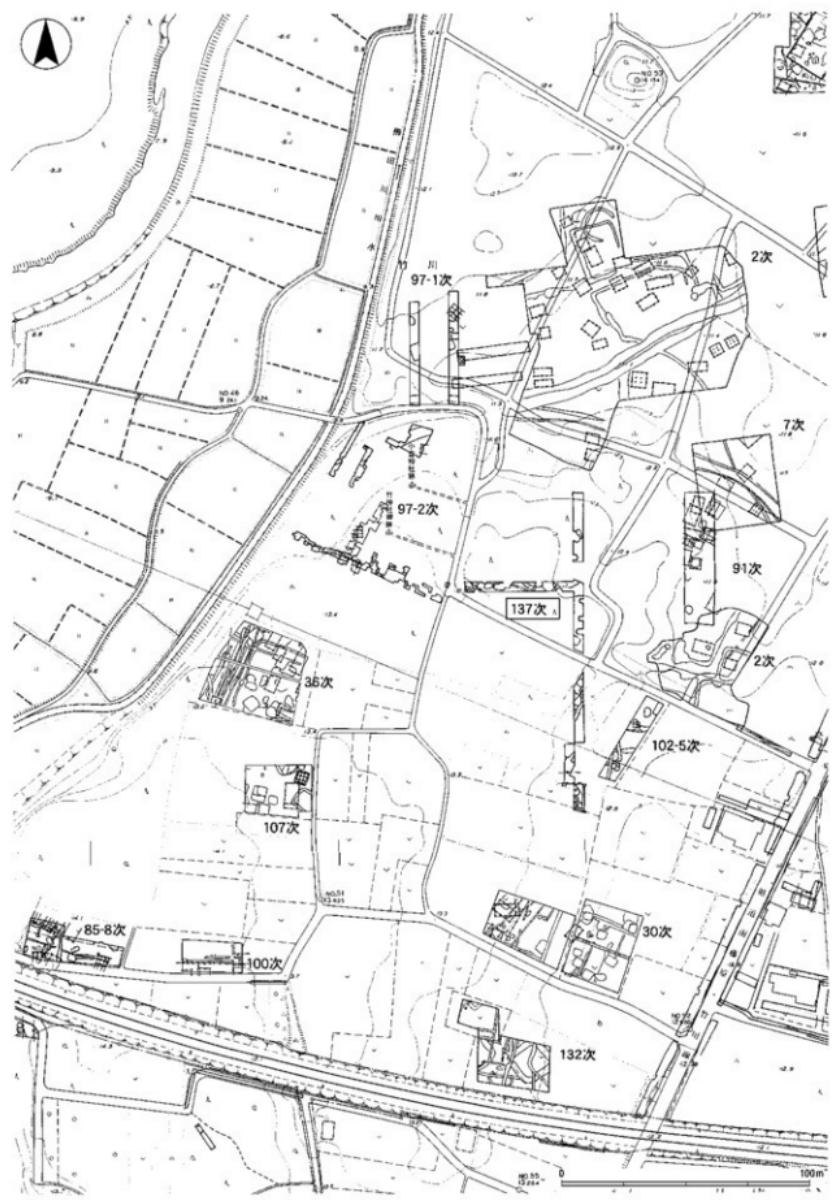
a 掘立柱建物・柱列

S B 8668 調査区南部分内で、南側については柱列東西2間分が確認でき、北側部分については柱穴1ヶ所を確認した。この柱穴全体を検出できていて、柱掘形が長辺95cm、短辺75cmの隅丸方形を、柱痕跡は長辺31cm、短辺19cmの楕円形を呈している。調査区外に延びていくようで、南北2間、東西2間以上の掘立柱建物が想定できよう。建物の方向はN 3° Wであった。柱穴出土遺物は小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮I期前半のものと思われる。

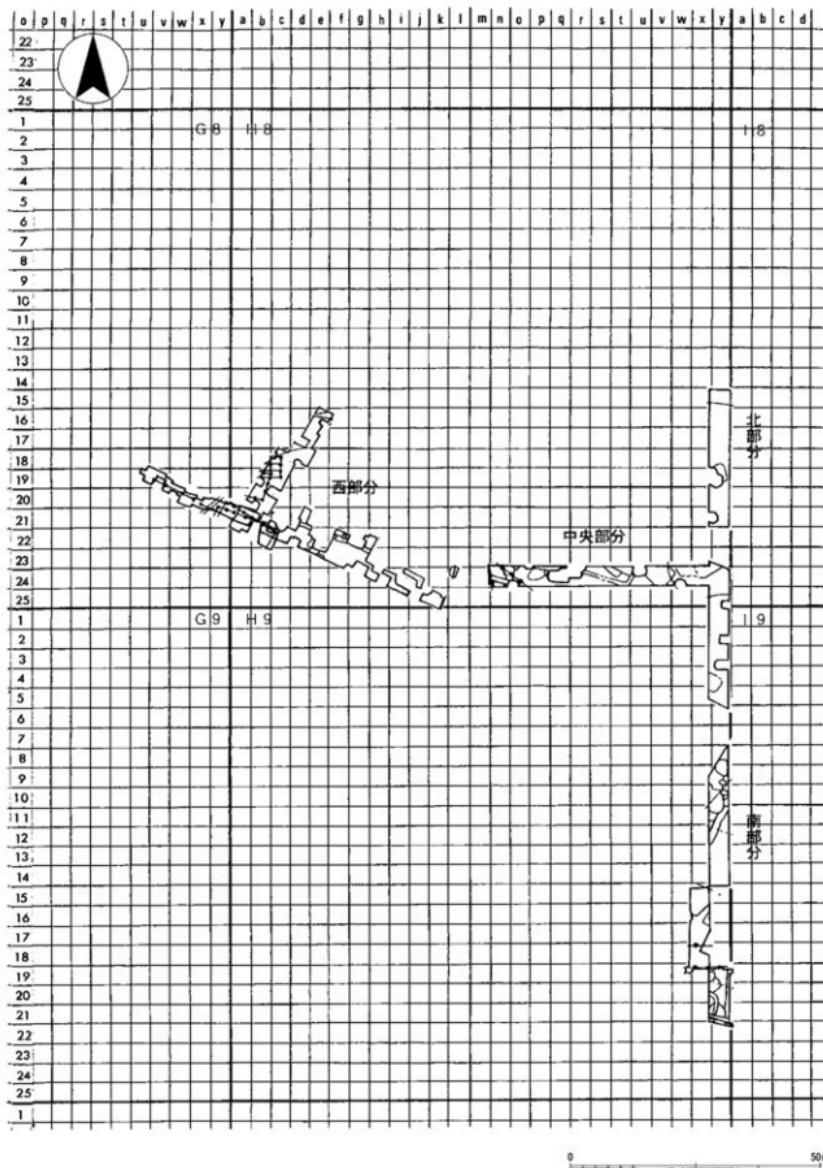
S B 8669 調査区西部分内で東西1間分の柱列を確認した。柱穴のすべてを確認できたものは1ヶ所で、柱掘形が長辺84cm、短辺78cmの不整円形を呈し、柱痕跡は確認することができます。もう一つの柱穴では確認することができ、長辺25cm、短辺20cmの楕円形を呈している。掘立柱建物ならば調査区外の北に延びていくものと考えられる。建物の方向はN 0°であった。柱穴からの出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮I期前半のものと思われる。

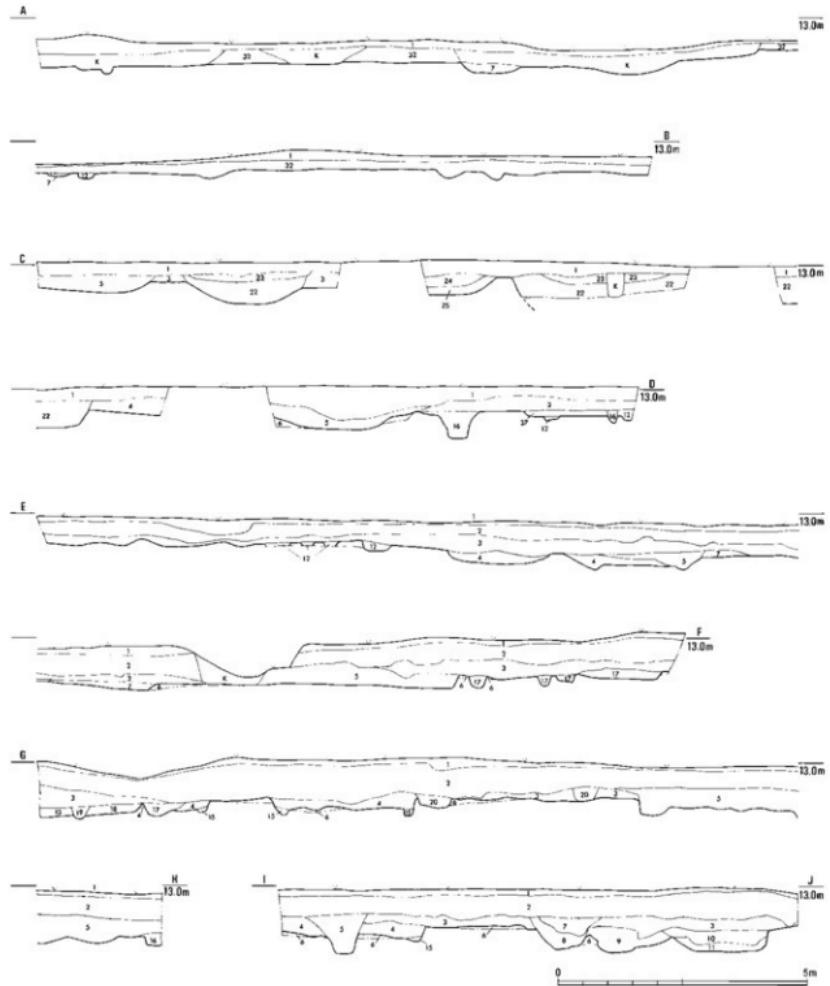
S B 8670 調査区西部分内では東西2間分確認した。柱穴全体を確認できたものは1ヶ所で、柱掘形が長径1.1m、短径0.65mの楕円形を呈し、柱痕跡は、径22cmの円形を呈している。調査区外の南北どちらかに延びていき、掘立柱建物になると思われる。建物の方向はN 29° Eであった。柱穴からの出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮I期前半のものと思われる。

S B 8671 調査区西部分内では東西2間分の柱列を確認した。柱穴全体を確認できたものは2ヶ所あり、柱掘形が長辺60～70cm、短辺55～65cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は1ヶ所で検出することができ、径12cmの円形を呈している。調査区外の南北どちらか



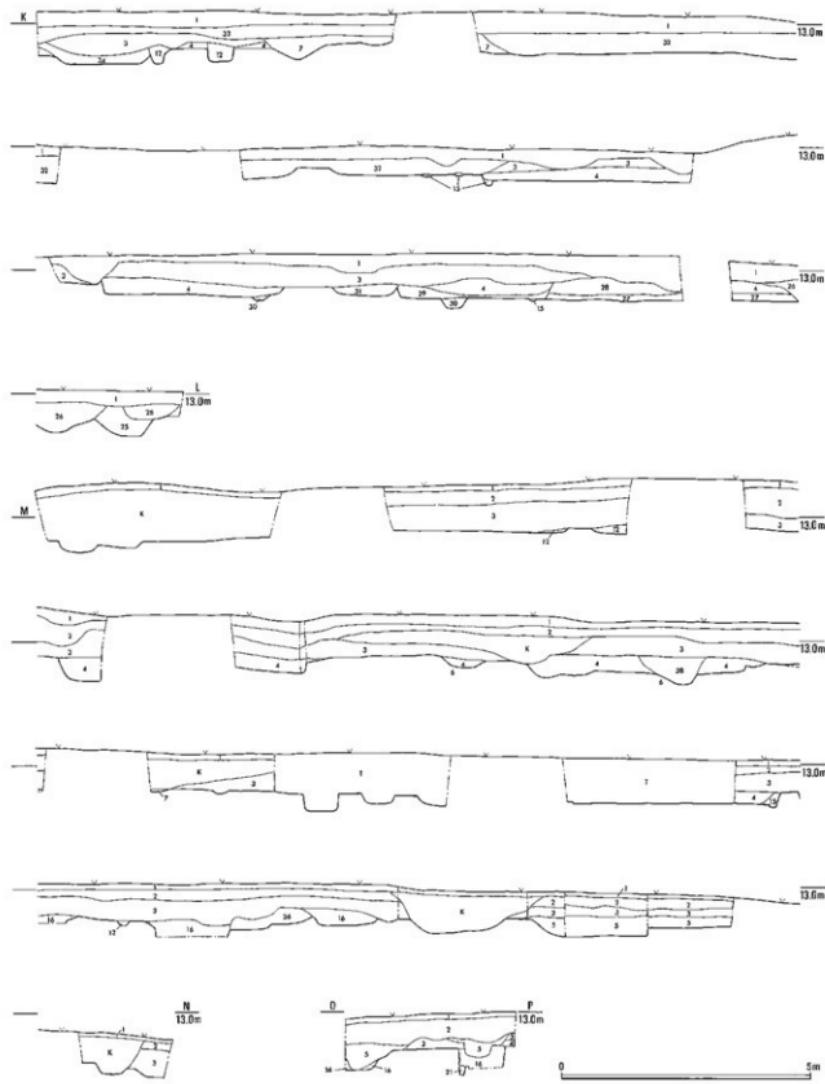
第III-1図 第137次調査区 位置図(1:2,000)





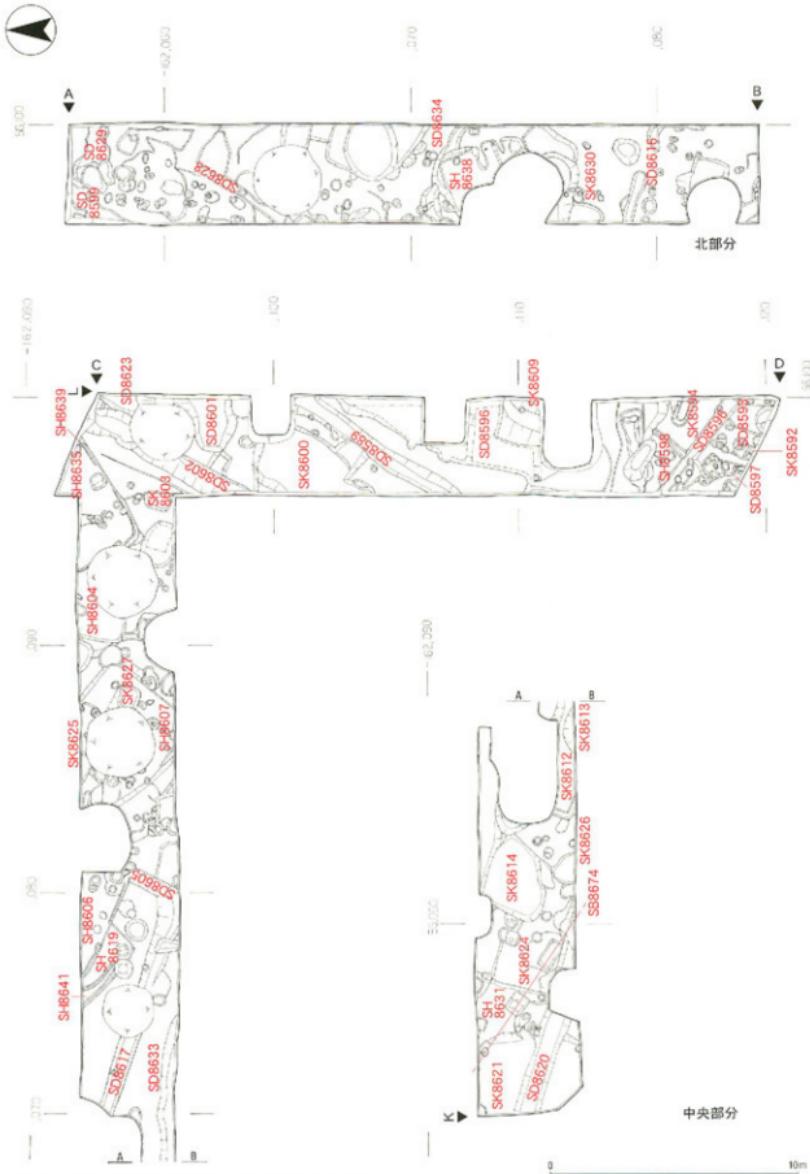
1 表土	9 10YR4/1 墓灰色土に 7.5Y7/6 橙色土が 混じる。道構埋土	17 10YR4/3 にぶい黄褐色土 道構埋土	25 2.5Y3/1 黑褐色土
2 5YR4/1 黑褐色土 土器混入	10 10YR4/2 反青褐色土に 7.5Y7/6 橙色土が 混じる。道構埋土	18 10YR4/4 棕色土 道構埋土	26 10YR5/4 にぶい黄褐色土に 7.5Y6/3 灰色土混入
3 10YR3/1 黑褐色土 包含層	11 10YR5/2 反青褐色土 7.5Y7/6 橙色土が 混じる。道構埋土	19 10YR3/4 暗褐色土 道構埋土	27 10YR2/3 暗褐色土 道構埋土
4 10YR2/2 黑褐色土 道構埋土	12 7.5YR4/1 墓灰色土 道構埋土	20 10YR5/3 にぶい黄褐色土 道構埋土	28 10YR7/1 黑色土 道構埋土
5 2.5Y5/1 黄灰色土 道構埋土	13 7.5YR3/1 黑褐色土 道構埋土	21 10YR2/2 黑色土 道構埋土	29 7.5YR5/3 にぶい褐色土
6 7.5YR7/6 墓灰色土に 10YR4/1 墓灰色土が 混じる。道構埋土	14 7.5YR5/3 暗褐色土 道構埋土	22 7.5YR4/4 棕色土	30 7.5YR5/4 にぶい褐色土
7 5Y5/1 灰色土 道構埋土	15 7.5YR1.7/1 黑色土 道構埋土	23 10YR5/6 黄褐色砂混土	31 10YR4/6 棕色土
8 5Y4/1 灰色土 道構埋土	16 7.5YR2/1 黑色土 道構埋土	24 2.5Y3/2 黑褐色土	32 2.5Y4/4 オリーブ褐色土

第III-3図 第137次調査区 土層断面図(1) (1 : 100)



- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 33 7.SYR4/3 棕色土 | 37 SYR3/1 黑褐色土炭泥り 透構埋土 |
| 34 SYR3/2 黑褐色土 後出面と同じ土が混じる | 38 7.SYR3/2 黑褐色土 |
| 35 7.SYR2/2 黑褐色土 | K 搾乱 |
| 36 SYR2/1 黑褐色土 | T 以前の調査の埋戻し土 |

第III-4図 第137次調査区 土層断面図(2) (1:100)



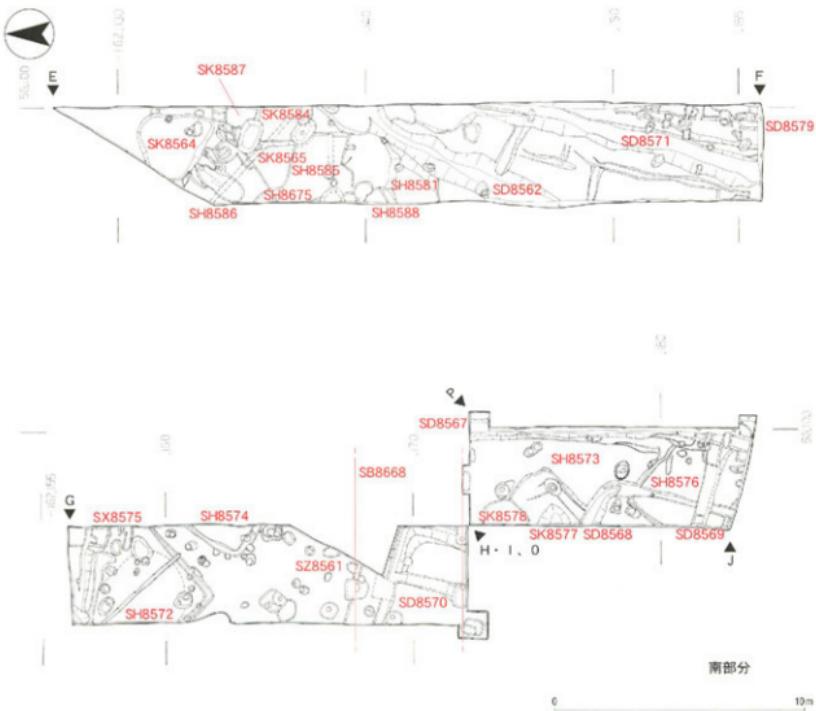
第三-5図 第137次調査区 平面図(1) (1:200)

に延びていき、掘立柱建物になると思われる。建物の方向はN20° Eであった。柱穴出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮I期前半のものと思われる。

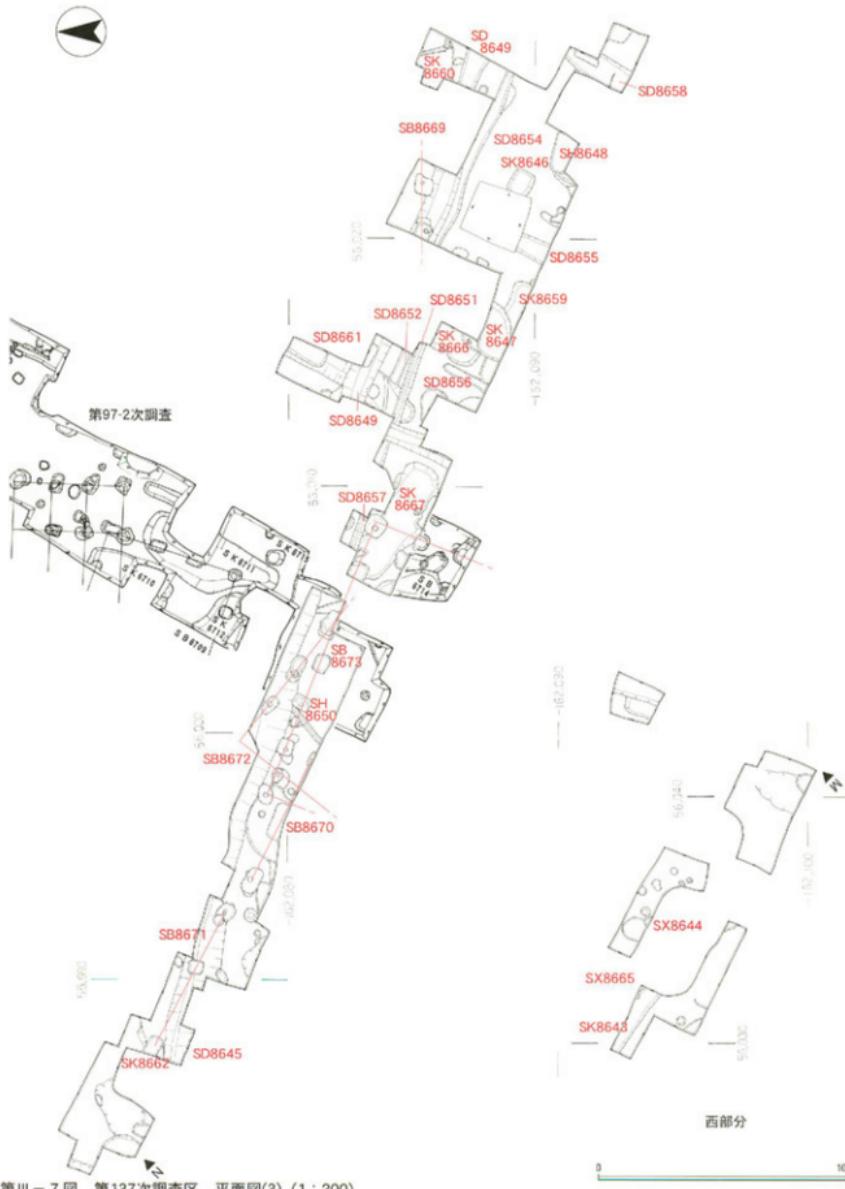
S B 8672 調査区内では柱列を東西2間分は確認することができた。第97-2次調査で確認された柱穴2ヶ所と今回確認できたH 8 y 21pit 1がそれである。その柱列の方向を北西に延長し、今回の調査で確認することができたG 8 y 21pit 3に向かって南へ曲がっていくようである。今回確認できた部分については、柱掘形が長辺64~83cm、短辺45~55cmの楕円形を呈し、柱痕跡は径18~21cmの円形を呈している。南北に2間以上、東西2間以上の掘立柱建物が想定できよう。建物の方向はN37° Eであった。

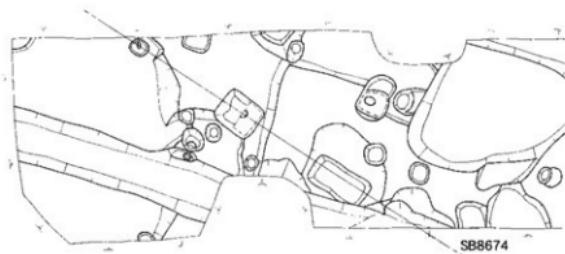
柱穴出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮I期前半のものと思われる。

S B 8673 調査区西部分内で東西6間、南北2間以上を確認することができた。建物の方向はN20° Eであった。東西方向のものについては、第97-2次調査で確認された柱穴4ヶ所と今回確認できた柱穴3ヶ所がそれである。南北方向のものについては、第97-2次調査で確認された柱穴2ヶ所と今回確認できた柱穴1ヶ所がそれである。今回確認できた部分については、柱掘形が長辺71~93cm、短辺60~65cmの楕円形または隅丸方形を呈し、柱痕跡は径18~21cmの円形を呈している。柱穴からの出土遺物が小片ばかりで判断に苦しむが、斎宮I-2期のものと思われる。



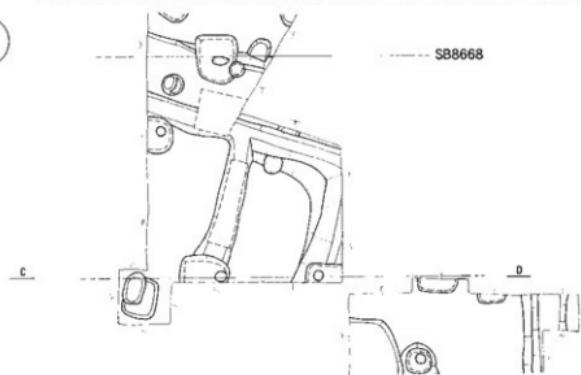
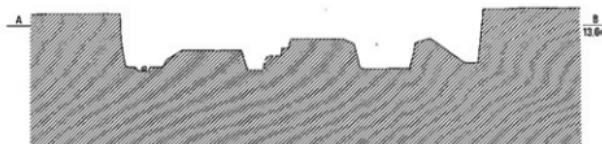
第III-6図 第137次調査区 平面図(2) (1: 200)





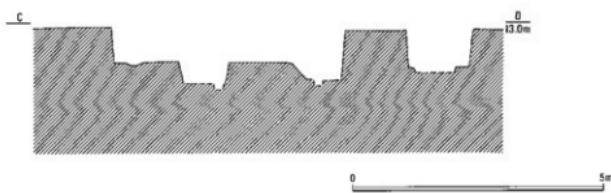
SB8674

m



SB8668

m



0 5m

第III-8図 第137次調査区 SB8668・8674平面・断面図 (1:100)

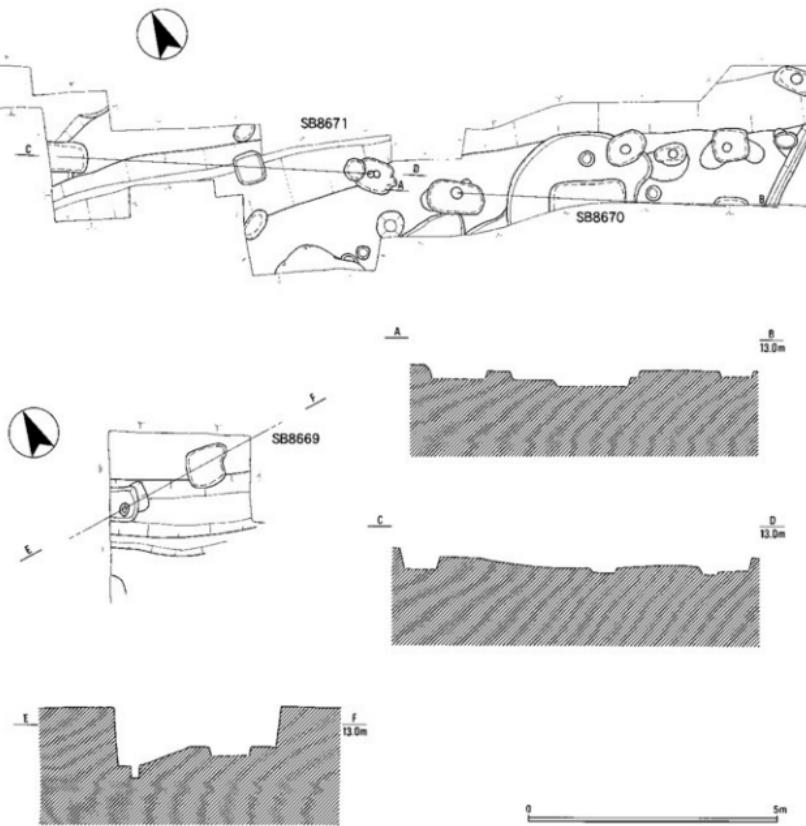
S B 8674 調査区の制約もあり、東西2間分の柱列を確認した。柱穴のすべてを検出できていて、柱掘形が長辺85cm、短辺75cmの隅丸方形を呈し、柱痕跡は径15cm以上の円形のものと考えられる。掘立柱建物と思われる。建物の方向はN36°Eであった。柱穴のひとつの柱掘形から斎宮I-1期と考えられる土師器杯が出土していて、その時期以降の建物と考えられる。

b 穹穴住居

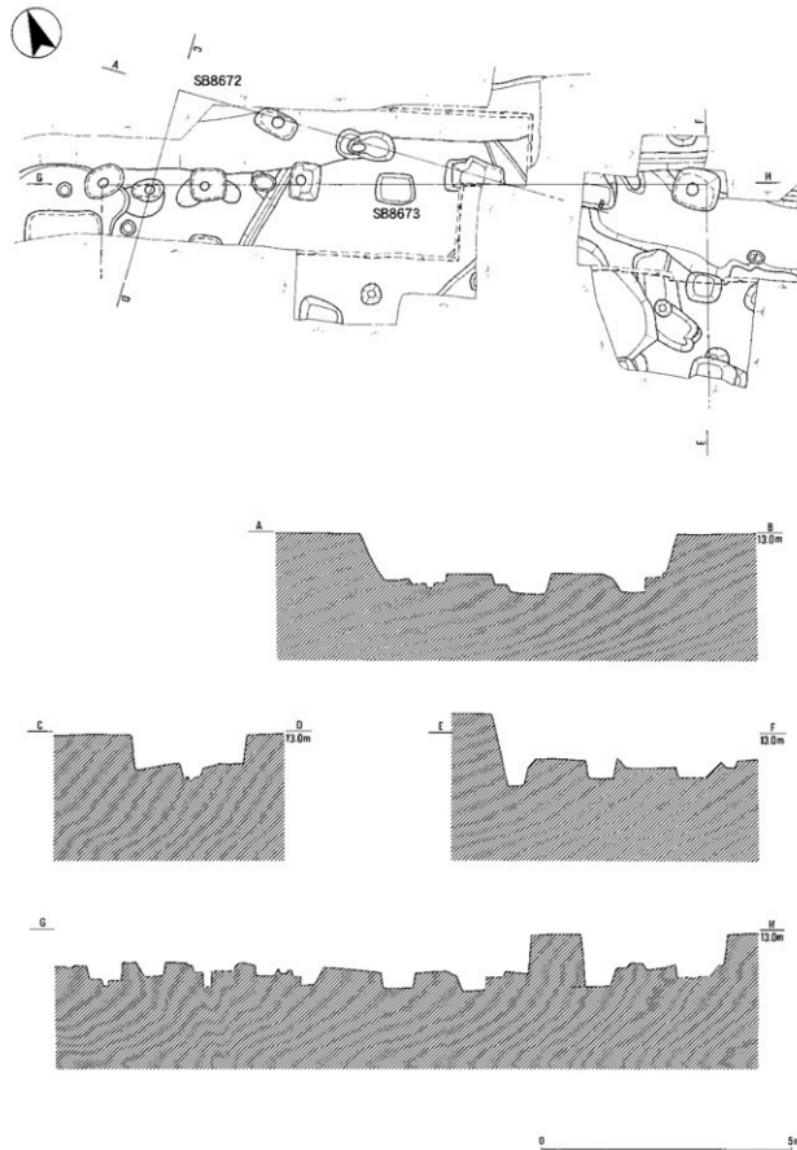
S H8572 調査区の制約やS X8575あるいは中近世の溝に切られているため遺構の全容は判然としないが、調査区北端で住居跡のコーナーと思われる部分

が確認することができたので、隅丸方形の竪穴住居が想定できよう。東西4.0m、南北4.2m、深さは遺構検出面から10~15cmであった。壁周溝は、途中で途切れるものの幅14~30cm、深さは床面から5~8cmを確認することができた。建物の方向はN44°Wであった。床面の中央あたりは貼り床になっていて硬化していた。埋土は黒褐色土の1層で、遺物の出土は確認することができなかった。隣接するSH 8574と、建物の方向がほぼ揃っている。同時期のものであろうか。

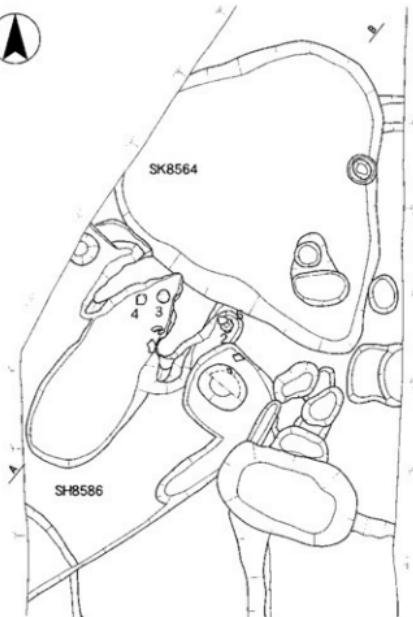
S H8573 調査区の制約があるため遺構の全容は判然としないものの、隅丸方形の竪穴住居と想定でき



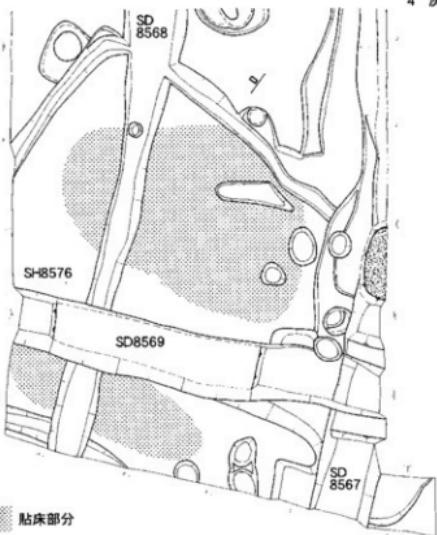
第三-9図 第137次調査区 S B 8669・8670・8671平面・断面図 (1:100)



第III-10図 第137次調査区 SB 8668・8674平面・断面図 (1:100)

B
13.0m

1 暗灰褐色土 2 淡褐色土
3 灰褐色土燒土混り
4 灰褐色土度混り

A
13.0m

貼床部分

0 2m

第三-11図 第137次調査区 SK8564、SH8576・8586平面・断面図 (1:50)

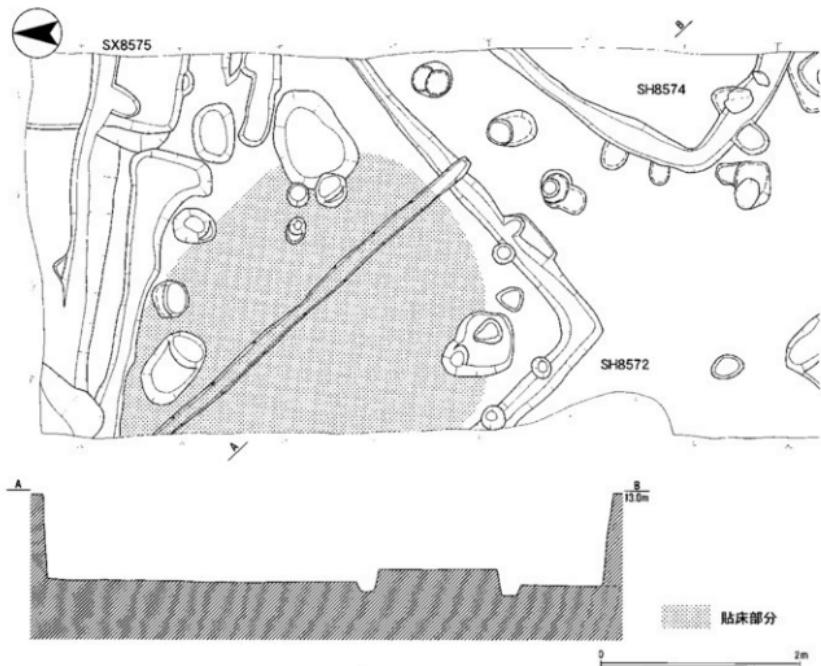
よう。SD8568・8569に切られ、SK8577・8578と重複している。調査区内で確認できるもっとも長い部分で3.3mを数え、深さは20cmであった。壁周溝は、途中で途切れるものの幅38~41cm、深さは床面から2~3cmを確認することができた。建物の方向はN45°E。床面の中央あたりは貼床になっていて硬化していた。SD8567と重複する調査区東側に焼土塊がみられたが明確に竈跡とはいえない。埋土からは、斎宮I~2期と思われる土師器甕・鍋の出土を確認した。

S H8574 調査区の制約もあり、遺構の全容は判然としないが、隅丸方形の竪穴住居と考えられる。東西1.6m以上、南北2.6m以上、深さは遺構検出面から18~22cmであった。壁周溝は、途中で途切れるものの幅15~33cm、深さは床面から7~11cmを確認することができた。建物の方向はN31°Eであった。埋土は黒褐色土の1層で、土師器甕小片の出土を確

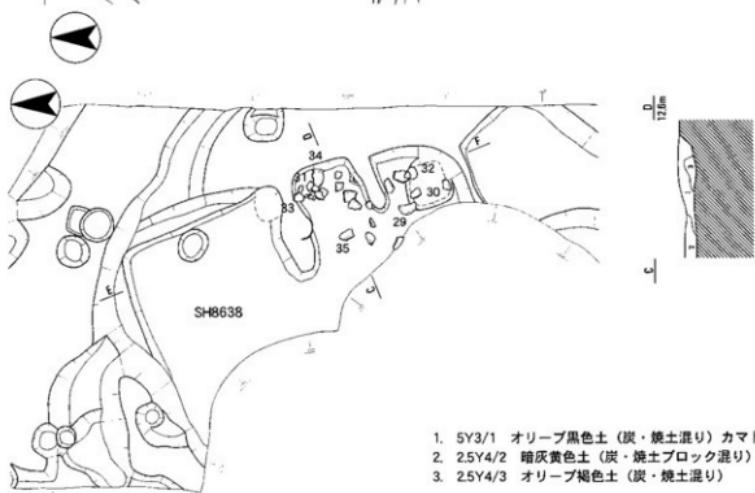
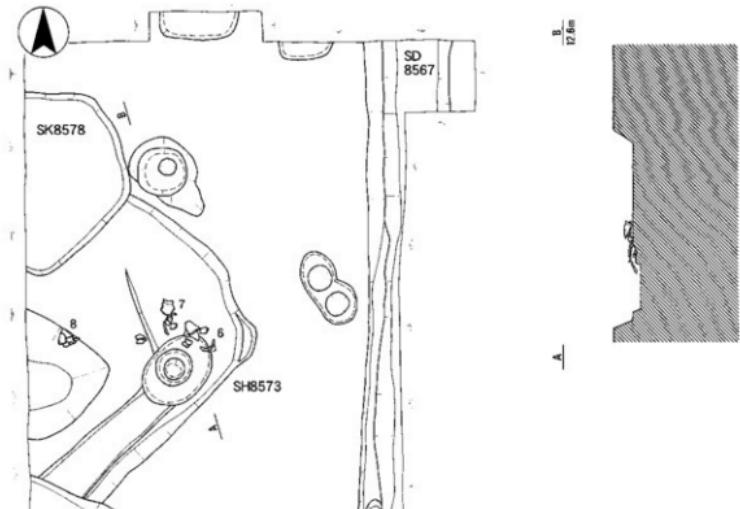
認することができた。

S H8576 埋土は黒褐色土1層であった。SD8567に切られている部分から調査区の南端部分にいたるまで壁周溝は巡っていて、幅17~26cm、深さは床面から1~5cmの規模であった。この部分ならば、一辺が4.0mの隅丸方形の規模が想定できるが、遺構の東側がSD8568に切られていて全容は判然としない。深さは遺構検出面より16~23cmで、建物の方向はN41°Eであった。SD8569に切られている部分以外は、床面が貼り床になっていて硬化している部分を確認した。竈跡を確認することはできなかったが、SD8567と重複する調査区東側に焼土塊がみられたが明確に竈跡とはいえない。埋土からは、斎宮I~2期と考えられる土師器杯・甕を、少量ではあるが確認した。

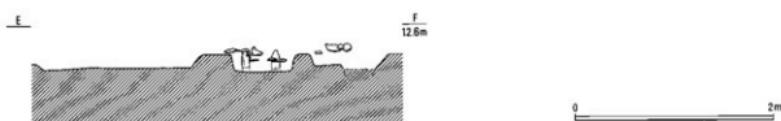
S H8585 SH8581・8586・8588や溝、柱穴が重複し錯綜しているため遺構の形態など判然としない。



第三-12図 第137次調査区 SH8572・8574平面・断面図 (1:50)



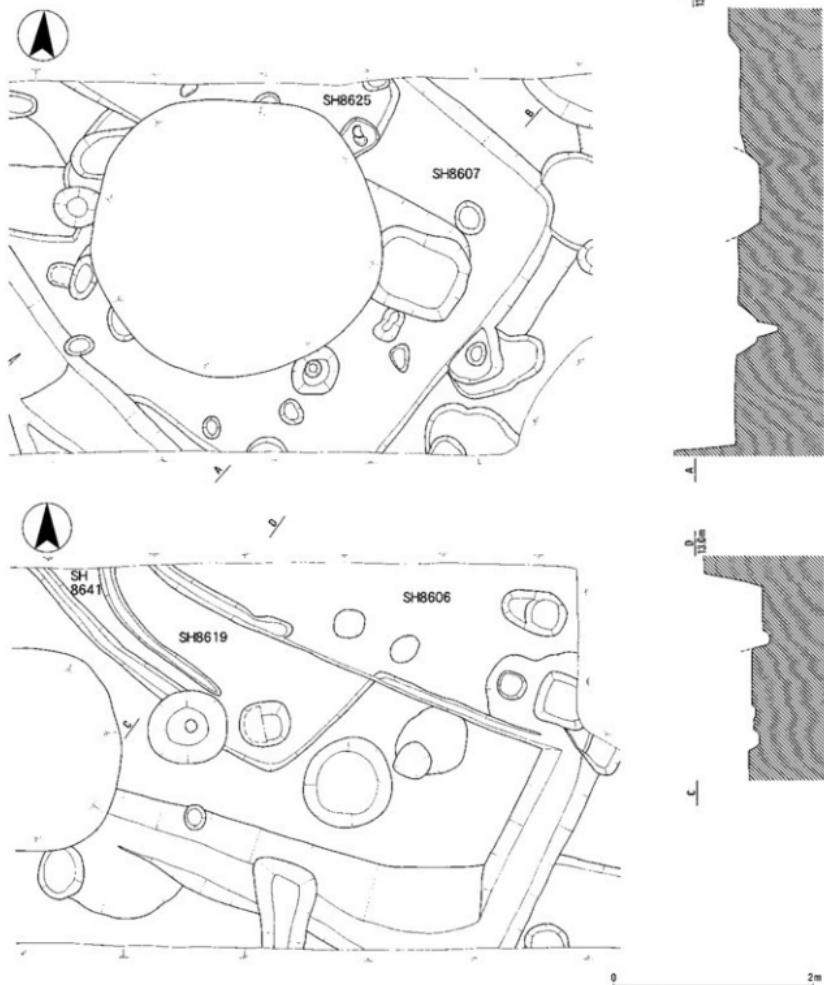
1. SY3/1 オリーブ黒色土(炭・焼土混り)カマド埋土
2. 2SY4/2 暗灰黄色土(炭・焼土ブロック混り)
3. 2SY4/3 オリーブ褐色土(炭・焼土混り)



第三III-13図 第137次調査区 S H8573・8638平面・断面図 (1:50)

切り合い関係からSH8586よりは新しくなるようである。土師器皿・小形甕・瓶などが埋土から出土した。これらは、斎宮I-2~3期のものと考えられる。SH8586 調査区の制約やSH8581・8585・8588との重複のため遺構の全容は判然としない。北東辺に、

東側の基底部の端部は土師器甕片により補強され、ほぼ中央には小形の土師器甕が逆位に据えられていた竈跡を確認することができた。逆位の土師器甕は支柱石と同様の機能であったと考えられる。また、竈跡の前方には幅0.9m、長さ1.5m、深さ床面から



第三-14図 第137次調査区 SH8606・8607・8619・8641平面・断面図 (1:50)

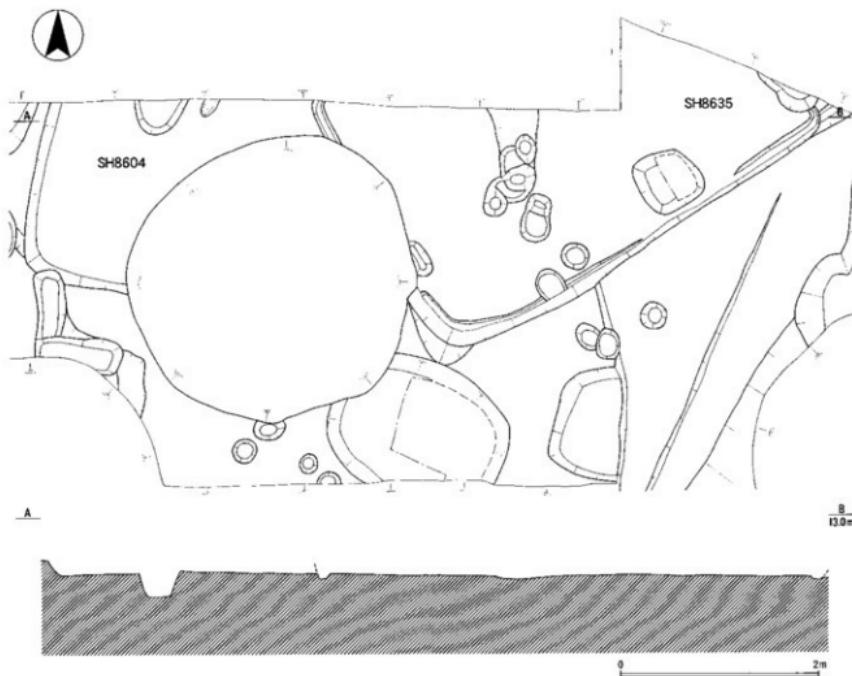
2~3cmの浅い掘り込みを確認した。竈跡の東側で住居跡のコーナーと思われる部分が確認することができたので、隅丸方形の竪穴住居であることが想定できよう。東西3.0m以上、南北3.0m以上、深さは遺構検出面から12~15cmであった。壁周溝は、途中で途切れるものの幅30cm、深さは床面から15~25cmを確認することができた。建物の方向は、N45°Eであった。竈跡周辺に遺物が集中していて、土師器杯・小形甕・高杯が出土した。これらの時期は、斎宮I-1~2期に比定できよう。

S H8588 調査区の制約もあり遺構全体は把握できない。調査区の西端に焼土塊とコーナー部分と壁周溝の一部とみられるものを確認した。焼土塊は竈跡と思われ、調査区西端であったので、掘削は行っていない。調査区内に検出できた部分は、東西0.8m以上、南北3.6m、深さ17cmであった。建物の方向はN11°Wであった。埋土から、斎宮I-2~3期

と考えられる土師器皿・杯・甕・瓶、須恵器杯蓋が出土した。

S H8606 調査区の制約があるため遺構の全容は判然としないものの、隅丸方形の竪穴住居と想定できよう。S D8605に切られ、S H8619・8641と重複している。調査区内で確認できるもっとも長い部分で4.6mを数え、深さは17cmであった。壁周溝は途切れるものの幅13~17cm、深さは床面から4~13cmを確認することができた。建物の方向は、N26°Eであった。埋土からは、斎宮I-2~3期と思われる土師器杯・甕の出土を確認した。S H8619では壁周溝を、S H8641では住居跡のコーナー部分と途切れるものの壁周溝を確認した。ともにS H8606よりも掘り込みが浅くなっている。切り合ひ関係については判然としない。

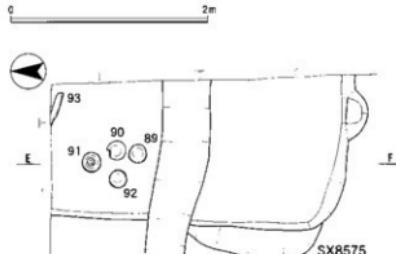
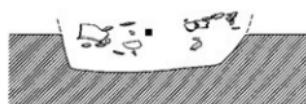
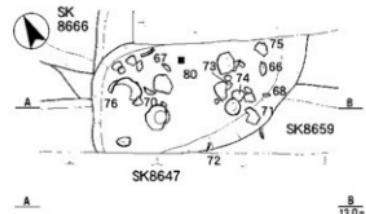
S H8607 調査区の制約があるため遺構の全体を確認することができなかつたが、隅丸方形の竪穴住居



第三-15図 第137次調査区 S H8604・8635平面・断面図 (1:50)

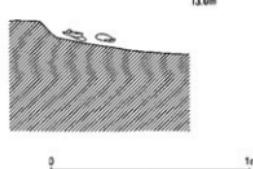
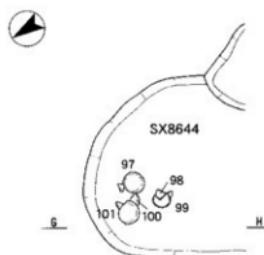
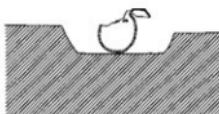
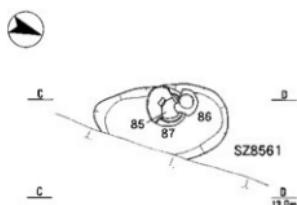
と想定できよう。S D8611に切られ、SK8625と重複している。調査区内で一辺4.3mであることが確認でき、深さは14~24cmであった。建物の方向はN 37° Eであった。壁周溝は確認することができなかつた。埋土から遺物の出土は確認できなかつたが、重複する遺構の出土遺物から判断して時期は斎宮I期のものと思われる。

S H8635 調査区の制約があるため遺構の全体を確認することができなかつたが、隅丸方形の堅穴住居と想定できよう。S H8604と重複している。東西4.4m、南北3.0m以上、深さは36~38cmであった。



途中で途切れではいるものの、幅16~23cm、深さは床面から3~4cmの壁周溝を確認することができた。埋土から遺物の出土は確認できなかつたが、遺構の時期については形状から判断して斎宮I期のものと思われる。

S H8638 調査区の制約もあり遺構の全体は確認できないが、調査区の形状から隅丸方形の堅穴住居と想定できよう。S K8630やS D8634に切られていたようである。東西3.6m、南北2.9m以上、深さ13~23cmの規模であった。西側の基底部の端部は土器片により補強されていて、中央には平行する



III-16図 第137次調査区 SK8647, SX8575・8644, SZ8561平面・断面図 (1:25, 1:50)

ように2ヶ所の支柱石がすえられていた龜跡を確認することができた。南東隅には貯蔵穴と考えられる柱穴がみられる。壁周溝は確認することはできなかつた。埋土からは、斎宮I-3期と考えられる土師器皿・杯・高杯・甕・鍋、須恵器杯蓋・壺小片が出土した。

c 土坑

S K 8564 長辺3.16m、短辺2.78m、深さ8~14cmの不整円形を呈している。S H 8586と重複している。

埋土からは、土師器皿・杯・高杯・甕・鍋、須恵器杯・杯蓋の出土を確認した。これらは、斎宮I-1~3期に属すると考えられる。

S K 8565 S H 8585・8586、S K 8587と重複し錯綜している状況なので、遺構の全容については判然としない。埋土からは、土師器皿・杯・甕・鍋、須恵器杯の出土を確認した。これらは、斎宮I-2期に属すると考えられる。

S K 8584 S H 8585・8586、S K 8587と重複し切り合いで錯綜している状況なので、遺構の全容については判然としない。埋土からは、斎宮I-2期に属すると考えられる土師器杯の出土を確認した。

S K 8621 調査区の制約もあり遺構の全体は確認できなかつた。S H 8631・S D 8620・S B 8570に切られれているようである。長辺3.4m、深さは52~55cmの規模である。埋土からは、斎宮I-2期と考えられる土師器皿・杯・高杯・甕・須恵器杯蓋・壺が出土した。調査区が狭小であるため、土坑としたが、溝となる可能性も否定はできない。

S K 8647 長辺2.5m、短辺1.4m、深さ41~62cmの長楕円形を呈している。埋土からは、斎宮I-2期と考えられる土師器皿・杯・甕・銅付円筒土器、須恵器杯蓋、毛彫馬具が出土した。出土状況としては、土坑底部より遺物が浮いている状況である。投棄行為が行われたと考えられなくもない。南にはS K 8659、北にはS K 8666があり、土層断面の観察からこの2つ遺構より新しい時期のものと考えられる。S K 8659との切り合い付近には焼土がみられた。

S K 8659 S K 8647に切られている。長辺4.33m、短辺0.52m以上、深さは26~33cmの規模があり、遺構の形態から竪穴住居である可能性もある。S K 8647との切り合い付近にある焼土は龜の破壊された

跡とも考えられる。埋土からは、斎宮I-1~2期と考えられる土師器皿・杯・高杯・甕・須恵器甕が出土した。

S K 8666 S K 8647に切られている。長辺1.95m以上、短辺0.92m以上、深さは21~39cmの規模が調査区内であり、埋土からは、斎宮I-1~2期と考えられる土師器片、須恵器片、轡に関連する馬具が出土した。

d 溝

S D 8658 幅1.1m、深さ21~39cmの溝と思われる。S B 8673の建物方向とほぼ同一であることから、区画溝のような機能があったのかもしれない。埋土からは、斎宮I-2期と考えられる土師器皿・杯・甕・須恵器杯・甕が出土した。

S D 8567 上面の幅が1.0m、深さ50cm、断面形が箱状になっている溝である。南北の調査区外に延びていくようである。埋土からの遺物は少なく、山茶碗、土師器類、綠釉陶器小片の出土が確認できた。

e 墓・地鎮遺構

S X 8665 調査区の北壁に土師器長胴甕底部が顔を出した状況で検出した。取り上げてみるともう一個体が口縁部をあわせた形で横位に埋設されていたようであった。合口の土器棺と思われる。調査区外ということもあり完掘することは不可能であった。土器は斎宮I-2期に比定できよう。切り合いからS K 8643より新しい時期と考えられる。

S Z 8561 長辺0.66m、短辺0.38m、深さ10~14cmの楕円形の土坑内に、若干斜位となつた土師器甕の口縁部の内側に正位で土師器皿を入れ込み、その上から土師器椀を逆位に被せたものと考えられる。逆位の土師器椀は口縁部と一部重なるもののずれた状況で出土した。埋まつていく過程でずれてしまったのだろうか。第95次調査S X 6666や第99次調査S X 6900のような地鎮遺構であろうか。地鎮遺構とするならば斎宮跡で最も新しい時期のものといえよう。これらの土器は斎宮III-1期のものと考えられる。

(2) 中世の遺構

S X 8575 長辺1.45m以上、短辺0.78m以上、深さは13~17cmの土壙墓と思われる。隅の丸い長方形になるとを考えられる。調査区が途切れる部分に4個の陶器皿、通称「山皿」が、最も北にある1個が底部

遺跡遺構番号	性格	次数	測量位置名	地図	グリッド	時間	考古学年	遺跡の性格・遺物・その他
SZ 8561	上坑	137	SK8561	H9	x17	平安後～	Ⅲ-3	地磚関連か。
SD 8562	溝	137	SD8562	H9	y11 ~ 12	中世		黒色土器片あり。SD 8563より新しい。
SD 8563	溝	137	SD8563	H9	y11 ~ 12	中世		蓄宮Ⅲ期から宝町までの土器が出土。
SK 8564	土坑	137	SK8564	H9	y8 ~ 9	奈良前～	I - 1 ~ 3	土師器杯・瓶、杯形・甕・鍋、須恵器杯蓋・杯が出土。
SK 8565	土坑	137	SK8565	H9	y9 ~ 10	奈良前～	I - 2	解釈が施された土師器皿。
SD 8566	溝	137	SD8566	H9	x17 ~ 19	平安後～	Ⅲ-2～	内側に巻き込むような口縁端部をもつ土師器皿。
SD 8567	溝	137	SD8567	H9	y19 ~ y21	平安～	Ⅲ	断面両枚。蓄宮Ⅰ・2以降の土器が出土。藤原。
SD 8568	溝	137	SD8568	H9	y20 ~ 21	近世		山葉輪7式以降。
SD 8569	溝	137	SD8569	H9	y21	近世～		遺物なし。SD 8568・8569より新しい。
SD 8570	溝	137	SD8570	H9	x18	不明		土師器片少量。SD 8565 鉢削後検出。
SD 8571	溝	137	SD8571	H9	y14x15	近世		蓄宮Ⅰ期以降の土器が出土。
SK 8575	上塙	137	SK8575	H9	x15	疊合		山葉(藤沢編年5式)。4個並んで出土。刀子も出土。
SK 8577	土坑	137	SK8577	H9	y19	奈良～		遺物なし。SII 8573より新しい。
SK 8578	上坑	137	SK8578	H9	y19	奈良～		遺物なし。SII 8573より新しい。
SD 8579	溝	137	SD8579	H9	y13 ~ 14	近世～		陶器片など。
SD 8580	溝	137	SD8580	H9	y11	奈良	I	土師器、須恵器小片。SH 8588より新しい。
SK 8582	土坑	137	SK8582	H9	y10	奈良	I	土師器片少量。
SK 8583	上坑	137	SH8583	H9	y14	奈良	I	土師器片少量。
SK 8584	上坑	137	SK8584	H9	y9 ~ 10	奈良前	I - 2 ~ 3	遺物なし。SH 8565 鉢削後検出。
SK 8587	土坑	137	SK8587	H9	y9	不明		遺物なし。SH 8565 鉢削後検出。
SD 8589	溝	137	SD 8589	H9	y1 ~ 2	中世後期		南伊勢系土師器皿、羽茎中心。
SD 8590	溝	137	SD8590	H9	y5	中世～		陶器片など。
SD 8591	溝	137	SD8591					矢頭。
SK 8592	上坑	137	SK8592	H9	y5	不明		遺物なし。SD 8593 鉢削後検出。
SD 8593	溝	137	SD8593	H9	y5	不明		遺物なし。
SK 8594	上坑	137	SK8594	H9	y5	中世～		蓄宮Ⅰ期から中世までの遺物が混じる。
SD 8595	溝	137	SD8595	H9	y4	宝町～		山葉陶(藤沢編年7式)出土。吉雄片あり。
SD 8596	溝	137	SD8596	H9	y1 ~ 3	宝町～		土師器皿、南伊勢系土師器皿。
SD 8597	溝	137	SD8597	H9	y5	不明		
SD 8599	溝	137	SD8599	H9	y15	中世～		土師器小片、陶器小片出土。
SK 8600	上坑	137	SK8600	H8	y25	宝町～		蓄宮Ⅰ期から宝町の土師器皿、南伊勢系土師器皿、山葉出土。
SD 8601	溝	137	SD8601	H8	y25	宝町～		手の土師器皿、南伊勢系土師器皿、羽茎、山葉出土。
SD 8602	溝	137	SD8602	H8	y24	不明		遺物なし。
SK 8603	上坑	137	SK8603	H8	x24	不明		土師器小片出土。
SD 8605	溝	137	SD8605	H8	c24	宝町～		南伊勢系土師器皿出土。
SK 8606	上坑	137	SK8606	H8	y24	宝町～		蓄宮Ⅰ期から宝町の土師器皿、南伊勢系七種器皿、山葉出土。
SK 8609	上坑	137	SK8609	H9	y3			
8610	溝	137	SK8610	H8	y24			SII 8635に。
SD 8611	溝	137	SD8611	H8	o24	奈良前～		舟生中期から奈良の土器出土。
SK 8612	上坑	137	SH8612	H8	o24	奈良前～	I - 2 ~ 3	土師器皿・壺、須恵器片出土。舟生土器入る。
SK 8613	上坑	137	SK8613	H8	o24	宝町～		南伊勢系土師器皿出土。ほとんどが土師器片。

第III-1表 第137次調査区遺構一覧(1)

通番追跡番号	性格	次数	調査時遺物名	地区	グリッド	時期	古宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SK 8614	土坑	137	SK8614	H8	p24	奈良前期～	I - 2 ~ 3	土師器杯・甌・甕・壺、須恵器杯・甌が出土。
SK 8615	土坑	137	SK8615	H8	y21	東町～		南伊勢系土師器皿出土。ほとんどが土師器片。
SD 8616	溝	137	SD8616	H8	y20	室町～		南伊勢系土師器皿出土。ほとんどが土師器片。
SD 8617	溝	137	SD8617	H8	r24a24	室町～		南伊勢系土師器皿出土。須恵器片も入る。
SK 8618	土坑	137	SK8618	H9	y1	奈良		土師器甌・須恵器片が出土。
SD 8620	溝	137	SD8620	H8	p24	不明		遺物なし。
SK 8621	土坑	137	SK8621	H8	n24	奈良前期～	I - 2 ~ 3	土師器杯・甌・甕・壺・甕、須恵器杯・甌・壺・甕が出土。溝の可能性あり。
SK 8622	土坑	137	SK8622	H8	y25	東町～		古宮I期から南伊勢系土師器皿、山茶桜出土。
SD 8623	溝	137	SD8623	H8	y24	中世～		海手の土師器皿出土。ほとんどが土師器。
SK 8624	土坑	137	SK8624	H8	o24	奈良～		弥生中期から奈良の土器出土。SK 8600、SD 8601 銅削後検出。
SK 8625	土坑	137	S K 8625	H8	v24	奈良前期	I - 2	土師器甌・甕出土。
SK 8626	土坑	137	SK8626	H8	p24	奈良		土師器甌・甕、須恵器杯出土。
SK 8627	土坑	137	SK8627	H8	v24			遺物なし。
SD 8628	溝	137	SD8628	H8	y16	中世～		南伊勢系土師器皿出土。
SD 8629	溝	137	SD8629	H8	y15	室町～		南伊勢系土師器皿出土。
SK 8630	土坑	137	SK8630	H8	y20	奈良奈良期～	I - 2 ~ 3	弥生後期から古宮I期の土器が出土。
SK 8632	土坑	137	SK8632	H8	y24	不明		弥生土器片あり。SH 8635 銅削後検出。
SD 8633	溝	137	SD8633	H8	s24	中世～		海螺片あり。
SD 8634	溝	137	SD8634	H8	y18	中世～		古宮I期の土器から山茶桜までが出土。従多く入る。
SD 8636	溝	137	SD8636	H8	w24	不明		遺物なし。
SK 8637	土坑	137	SK8637	H8	x24	難倉～		山茶桜、陶器模片が出土。
SK 8639	堅穴住居	137	SH8639	H8		奈良		遺物なし。SH 8638 と重複
8642		137	SH8642	H8	j25	不明		銅削中に崩滅。
SK 8643	土坑	137	SK8643	H8	b24	奈良奈良期	I - 2	S K 8665 より古い。
SX 8644	上塙墓	137	SX8644	H8	j24	東町～		古宮I期から海手の土師器皿が出土。
8645		137	SD8645	H8	y21			亂丸。
SK 8646	土坑	137	SK8646	H8	f23	奈良		土師器甌・甕出土。
SK 8647	土坑	137	SH8647	H8	d22	奈良奈良期	I - 1 ~ 2	S K 8657、8666 より新しい。毛細馬具出土。
SD 8649	溝	137	SD8649	H8	f22 ~ f24	東町～		土師器小皿出土。
SD 8651	溝	137	SD8651	H8	d22	平安？		土師器甌・甕出土。
SD 8652	溝	137	SD8652	H8	d22	不明		土師器甌・甕出土。
SD 8653	溝	137	SD8653	H8	g22 ~ 23			SD 8649 と同じ。
SD 8654	溝	137	SD8654	H8	g23	不明		遺物なし。
SD 8655	溝	137	SD8655	H8	e23	奈良		土師器甌出土。
SD 8656	溝	137	SD8656	H8	d22	不明		土師器片・須恵器甌出土。
SD 8657	溝	137	SD8657	H8	b21	不明		土師器片出土。
SD 8658	汎用溝	137	SK8658	H8	g24	奈良奈良期～	I - 2 ~ 3	土師器杯・甌・甕・壺、須恵器甌出土。
SK 8659	土坑	137	SK8659	H8	e23	奈良前期	I - 1 ~ 2	土師器甌（赤色あり）・甌・甕・壺、須恵器甌出土。
SK 8660	土坑	137	SK8660	H8	g22	奈良前期～	I - 2 ~ 3	土師器杯・甌・壺、須恵器甌・甌出土。
SD 8661	溝	137	SD8661	H8	d21	奈良？		標上は SD8658 と同じ。
SK 8662	土坑	137	SK8662	G8	v 20	奈良？		土師器甌出土。

第三回 第137次調査区遺構一覧(2)

遺物番号	性別	次数	調査時番号	地区	グリット	時期	古宮編年	遺物の性格・遺物・その他	
								奈良?	上野器杯・甕出土。
SK 8663	土坑	137	SK8663	G8	x21	奈良?			
SK 8664	土坑	137	SK8664	G8	x21	奈良?			上野器杯・甕出土。
SX 8665	上野棺墓	137	SX8665	H8	t24	奈良前	I - I ~ 2	合1。SK 8643より新しい。	
SK 8666	土坑	137	SK8666	H8	e + d22	奈良前	I - I ~ 2	上野器杯・甕・甕片・須恵器片・構部分の馬鹿出上。	
SK 8667	土坑	137	上坑1	H8	b + c 22	不明			遺物なし。第97・2次調査で検出し、番号は付いていない。
8676		137							欠番。
8677		137							欠番。
8678		137							欠番。
8679		137							欠番。
8680		137							欠番。

第III-3表 第137次調査区遺構一覧(3)

遺構番号	調査時番号	地区	グリット	幅幅(m)(東西×南北)	唐物方向(N基準)	深さ(m)	柱穴	カマフ	時期	古宮編年	特記事項
SII 8572	SH8572	H9	x15 ~ 16	4.0 × 4.2	N 44° W	0.10 ~ 0.15	-	-	奈良?		遺物なし。
SII 8573	SH8573	H9	y19	3.0 + × 2.6 +	N 45° E	0.20	-	-	奈良前	I - 2	上野器片少少。
SH 8574	SH8574	H9	x16	1.6 + × 2.6 +	N 31° E	0.18 ~ 0.22	-	-	奈良	I	上野器片少少。
SH 8576	SH8576	H9	y20 ~ 21	3.0 + × 1.4 +	N 41° E	0.16 ~ 0.23	-	-	奈良	I	上野器片少少。
SH 8581	SH8581	H9	y10 ~ 11	1.0 + × *	N 1° W	0.11 ~ 0.17	-	-	奈良末	I - 3 ~ 4	上野器片少少。
SH 8585	SH8585	H9	y9 ~ 10	1.2 + × *	N 1° E	0.13 ~ 0.15	-	-	奈良中	I - 2 ~ 3	上野器片少少。SH 8581と重複。
SH 8586	SH8586	H9	y9	3.0 + × 3.0 +	N 45° E	0.12 ~ 0.16	-	-	北東 奈良前	I - I ~ 2	上野器片・組・高杯・甕が出土。
SH 8588	SH8588	H9	y10 ~ 11	0.8 + × 3.6 +	N 11° W	0.17	-	-	東 奈良末	I - 2 ~ 3	上野器片・組・甕・鏡、須恵器片等が出土。SH 8581・8585・8673より新しい。
SH 8598	SH8598	H9	y4 ~ 5	1.2 + × 2.6 +	N 35° E	0.06 ~ 0.10	-	-	奈良	I	上野器片・須恵器片等が出土。
SII 8604	SII 8604	H8	w + x 24	1.0 + × 1.8 +	N 9° E	0.26 ~ 0.32	-	-	奈良		遺物なし。
SH 8606	SH8606	H8	t24	4.4 + × 1.9 +	N 26° E	0.17	-	-	奈良中	I - 2 ~ 3	上野器片・甕出土。
SII 8607	SH8607	H8	v24-w24	4.3 × 4.3	N 37° E	0.14 ~ 0.24	-	-	奈良		遺物なし。
SII 8619	SH8619	HS	t24	1.8 + × *	N 41° E	0.06 ~ 0.07	-	-	奈良		SII 8606に切られている。遺物なし。
SH 8631	SK8631	HS	o24	* × 2.4 +	N 15° E	0.18 ~ 0.25	-	-	奈良		遺物なし。SK 8621より古い。
SH 8635	SH8635	HS	y24	4.4 × 3.0 +	N 23° W	0.32 ~ 0.38	-	-	奈良		SII 8610と同じ。
SH 8638	SK8638	H8	y19	3.6 × 2.6 +	N 18° W	0.13 ~ 0.23	-	-	北東 奈良中	I - 3	上野器片・杯・甕・高杯・甕・鏡、須恵器片等が出土。壇跡に2ヶ所の支柱石。
SH 8641	SH8641	HS	s + t24	3.4 + × 1.4 +	N 45° E	0.05	-	-	奈良		遺物なし。
SH 8648	SH8648	HS	t23	2.6 + × 0.6 +	N 11° E	0.12 ~ 0.30	-	-	奈良	I	上野器片・須恵器片出土。ほとんど調査区外。
SH 8650	SH8650	HS	o21	1.8 + × *	N 39° E	0.12 ~ 0.15	-	-	奈良		遺物なし。一部検出。床面焼化。第97・2次では検出されていない。
SH 8675	SH 8675	H9	y 9 + 10	* × 1.0 +	N 0°	0.02 ~ 0.07	-	-	奈良		遺物なし。SII 8586・8588より古い。

第III-4表 第137次調査区堅穴住居一覧

(規模のデータで「+」の表記は「以上」、「*」は未確認であることを表す。)

を上にして出土した。調査区北端の壁に突き刺さった状態で、刀子が顔を出していた。出土した陶器皿については、藤沢編年5型式に相当しよう。

S X8644 長辺1.7m以上、短辺1.6m、深さは14～17cmの土壙墓と思われる。長楕円形か隅丸の長方形になるものと考えられる。遺構の北東端で4～5個体の土師器皿が集中して、底部より少し浮いた状態で出土している。埋土からは、先述の13世紀代と考えられる土師器皿や斎宮I期のものと考えられる皿・甕も出土した。

S K8600 調査区に制約があるため土坑としているが溝である可能性も否定できない。長辺4.4m、短辺2.8m、深さ25～39cmであった。埋土からは、斎宮I期の土師器高杯・甕・須恵器杯・甕、山茶椀・南伊勢系土師器鍋など中世後期の遺物も出土した。

S D8568 幅0.41～0.76m、深さ26～38cmを調査区内で確認した。溝と考えられる。調査区西端から東南方向へ延び、調査区中央で、緩やかに90度近く南西方向に曲がり調査区外へ伸びていく。西側部分が深くなっていた。埋土からは、藤沢編年7型式に相当する通称「山茶椀」や陶器甕が出土を確認した。

4 遺物

第137次調査区からの出土遺物は整理箱で50箱程度である。内訳は、ほとんどが土器類である。金属製品が若干出土した程度である。ここでは、主だったものを紹介する。なお、遺物の観察については、

後掲の遺物観察表（第III-6～9表）に譲りたいと思う。参考されたい。

遺物の所属時期については、古代の土器の関する分類・編年は、斎宮分類・編年⁽¹⁾及び平城・長岡京における編年⁽²⁾を参照した。

（1）古代の遺物

S B8674出土遺物（1） 1は土師器杯A。土器外面の調整については磨耗など判然としないが、かすかにヘラミガキであることがわかる。斎宮I-1期に相当しよう。

S H8586出土遺物（2～5） 2は底部から口縁部に向かい内窓気味に立ち上がる土師器杯G。3は口縁端部に面取りがみられ、丸底を呈する底部外面には直線状のヘラガキが1条施されている土師器甕Aである。4は口縁部が外反し底部が若干の丸底になる土師器鍋Aである。5は杯Aを杯部に、中実の脚部に、裾部が水平に延びる土師器高杯である。1～4は斎宮I-1期に比定できよう。5は斎宮I-2期の範疇であろう。

S H8573出土遺物（6～8） 6は口縁端部が面取りされ凹み、球形の器形の土師器甕Aである。7は口縁部が大きく外反し体部が丸く張り出す丸底の土師器甕Aである。6より細長い器形のものである。

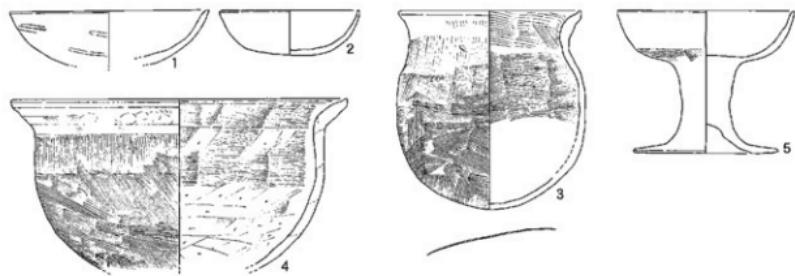
8は口縁部が外反し、底部が平らになる土師器鍋と思われる。これらは、斎宮I-2期に相当するものであろう。

S H8576出土遺物（9・10） 9は土師器杯A。土

遺物番号	発現時遺跡名	地 区	グリット	ピット番号	ピット遺物の時間	出土時間	周囲(東)(m) × 南北(北)(m)	周囲(東)(m) × 南北(南)(m)	主軸	方位 (N基準)	備 考
SB8668	SB8555	H9	x17	p9	Iの範疇	I	2+(4.4) × 2(4.4)	2.2 - 2.2	東西	N3° W	
			x18	p3・4							
			y19	p9							
SB8669	SB8556	H8	f22	p1	Iの範疇	I	1+(2.0) × *	2.0 - *	東西	N0°	
			x20	p2							
			x21	p4							
SB8670	SB8557	G8	y21	p5	Iの範疇	I	2+(5.4) × *	2.7 - *	東西	N29° E	
			x20	p1							
			y21	p3							
SB8671	SB8558	G8	x20	p1	Iの範疇	I	2(6.0) × *	2.4 - 3.6 -	東西	N20° E	
SB8672	SB8559	G8	y21	p9	Iの範疇	I	3+(6.0) × 1+(2.0)	2.0 - 2.0	東西	N37° E	
			97・2 次 R8	p2・3							
SB8673	SB8560	H8	G8	y21	p1・2	Iの範疇	6(12.0) × 2+(4.0)	2.0 - 2.0	東西	N20° E	
			H8	c22	p1						
			R8	p1・4・5	p1; I - 2						
			R9	p1・SK9	SK9; I - 2						
			S9	SK6							SB8713は蓋付遺物にならない。
SB8674	SB8570	H8	G24	p3・5	I - 1	I - 1 以降	2+(4.8) × *	2.4 - *	東西	N36° E	

第III-5表 第137次調査区掘立柱建物一覧

（規模のデータで「+」の表記は「以上」、「*」は未確認であることを表す。）



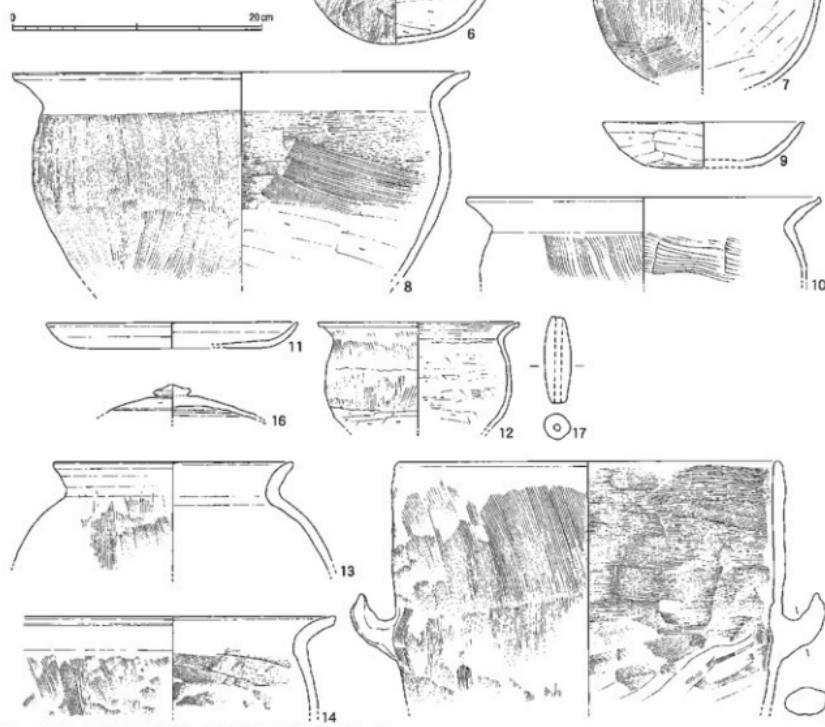
1 : SH8674

2~5 : SH8586

6~8 : SH8573

9~10 : SH8576

11~17 : SH8585



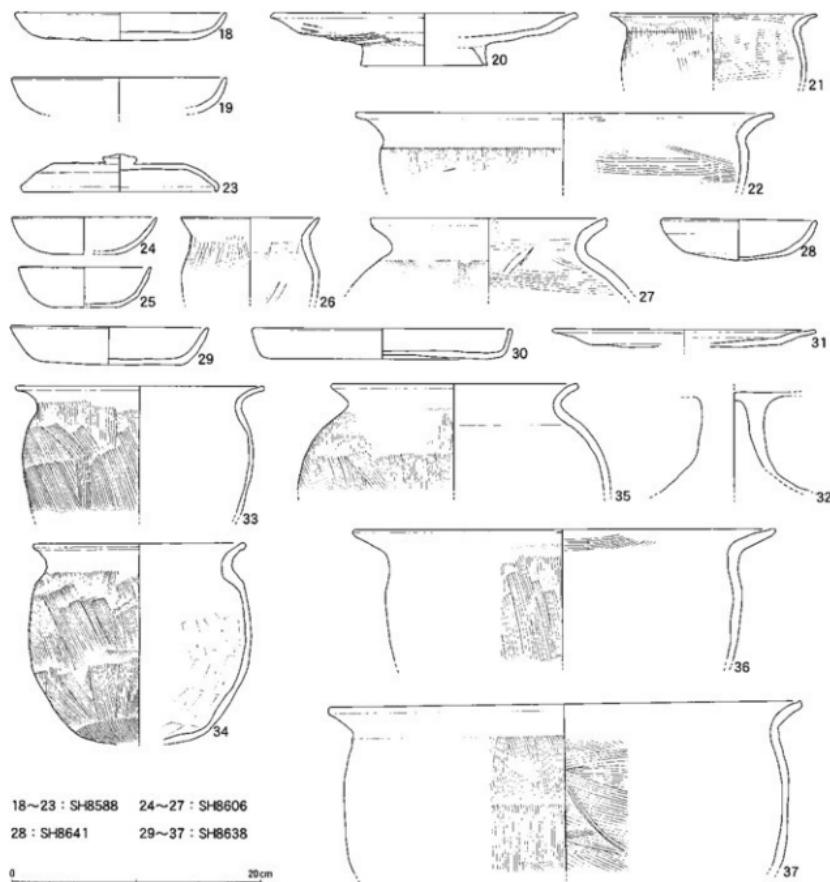
第三III-17圖 第137次調査区 出土遺物実測図(1) (1:4)

器外面はヘラケズリが施される。10は口縁端部がつまみ上げられている土師器甕Aである。斎宮I-3期に比定できよう。

S H8585出土遺物 (11~17) 11は口縁部が外傾気味の土師器皿Aか。高杯形部の可能性も否定はできない。12は小形の土師器甕A。13は口縁部が大きく外反し体部が丸く張り出す丸底の土師器甕Aである。14は口縁端部に面取りがみられる土師器鍋であろうか。15は土師器甕。把手部分が2ヶ所残存している。16は須恵器蓋。宝珠つまみは残存しているもの口

縁部が残存しておらず口縁部形態は不明である。これらは、斎宮I-2期に相当しよう。17は土製土錐である。

S H8588出土遺物 (18~23) 18・19は口縁部が外傾気味の土師器皿A。20は大きく外傾した口縁部をもつ土師器皿Bである。21は口縁部が大きく外反する小形の土師器甕A。22は口縁部が大きく外反し、頸部から体部にかけて段状になるほどのヨコナデがみられる土師器鍋である。23は須恵器蓋。扁平な宝珠つまみをもつ天井部とカエリがない口縁部が残存



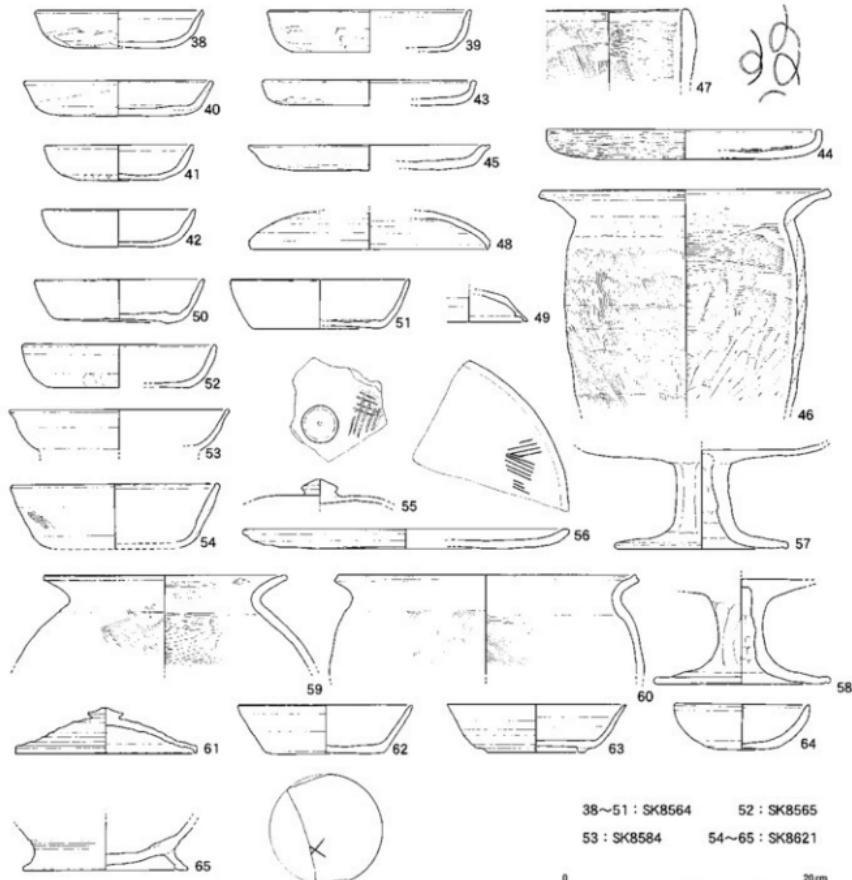
第III-18図 第137次調査区 出土遺物実測図(2) (1:4)

する。18~20・23は斎宮I-2期に比定できよう。
21・22は斎宮I-3期に相当するものか。

S H8606出土遺物 (24~27) 24・25は底部から口
縁部が内湾気味にたちあがる土師器杯G。26は小形
の土師器甕A。口縁部の屈曲はそれほど強くない。
27は大型の土師器甕Aである。これらは、斎宮I-
2~3期に相当しよう。

S H8641出土遺物 (28) 28は底部から口縁部が内
湾気味にたちあがる土師器杯G。斎宮I-2期に比
定できよう。

S H8638出土遺物 (29~37) 29は口縁部が外傾す
る土師器皿Aである。30は口縁端部が巻き込むよう
に肥厚している土師器皿Aである。31は高杯杯部で
ある。口縁部が大きく外反するもので、内面には漆
状のものの付着がみられる。32は土師器高杯脚部で
ある。脚内は中空で、裾部は水平に延びるようであ
る。33・34は口縁部が大きく外反し、体部が球形の
小形の土師器甕Aである。35は球形に近い器形の大
形の土師器甕A。36・37は口縁端部に面取りがみら
れる土師器鍋Aである。これらは、斎宮I-3期に



第III-19図 第137次調査区 出土遺物実測図(3) (1:4)

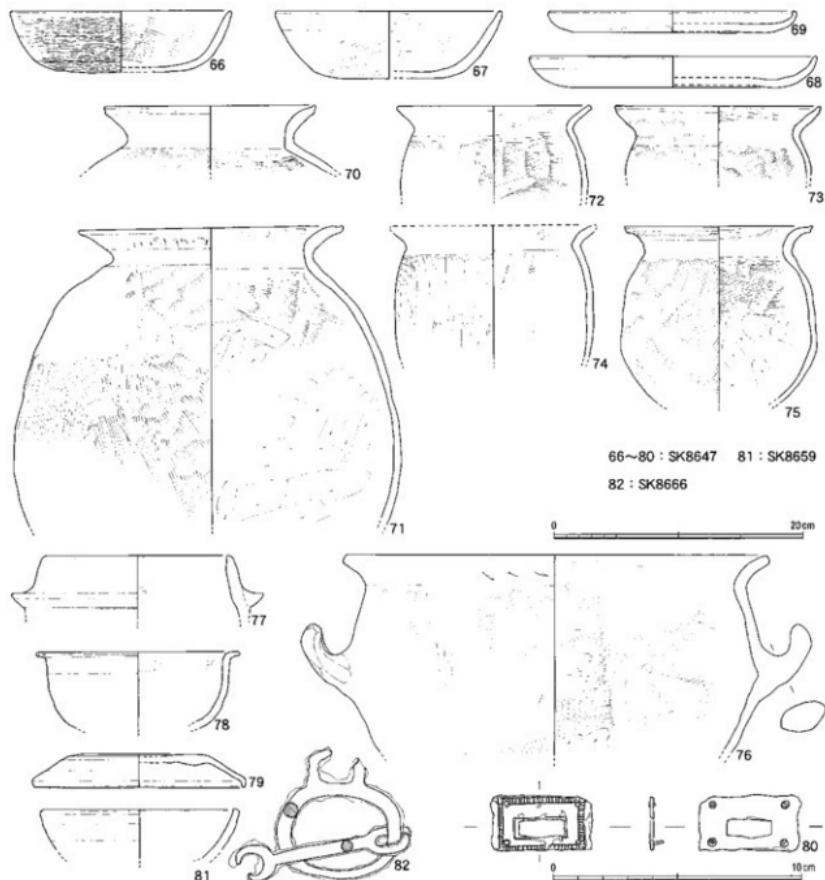
比定できよう。

S K 8564出土遺物 (38~51) 38~42は土師器杯A。38は外傾する口縁部の端部に面取りがみられる。43・44は口縁端部が内側に巻き込むように肥厚している土師器皿Aである。44は土器外面にはヘラミガキ、内面には二重に螺旋状暗文が施されている。45は口縁端部が水平に延びる土師器高杯の杯部と考えられる。46は口縁部が大きく外反し、端部には面取りがみられる土師器甕Cである。47は土師器甑の口縁部小片であろう。48は天井部が残存していない須恵器小片であろう。49は天井部が残存していない須恵器

杯B蓋であろう。49は口縁部にカエリがみられる須恵器杯Aであろう。50・51は底部から直線的に口縁部が延びる須恵器杯である。49は斎宮I-1期に、44・46~48・50・51は斎宮I-2期、38~43・45は斎宮I-3期に比定できるものと考えられる。

S K 8565出土遺物 (52) 52は口縁部が外傾気味の土師器杯Aである。これらは斎宮I-2期に相当しよう。

S K 8584出土遺物 (53) 53は口縁部が外傾気味の須恵器盤である。これらは、斎宮I-2期に相当す



第三-20図 第137次調査区 出土遺物実測図(4) (1:4 ※80・82は1:2)

るものと思われる。

S K 8621出土遺物 (54~65) 54は口縁部が外傾気味の土師器椀A。55はつまみをもつ天井部分だけ残存している土師器蓋である。56は深さがあまりない土師器高杯部。57・58は面取りされた脚部をもつ土師器高杯Aである。59は大形の土師器甕A。60は土師器甕Cと考えられる。61は天井部には宝珠ツマミ、口縁部にはカエリがみられない須恵器杯B蓋である。62は須恵器杯A。底部から直線的に口縁部が延びる。また、底部外面には「×」のヘラガキがみられる。63は62と同器形のもので高台が付く須恵器杯Bである。64は口縁部が少し内弯気味の須恵器杯Aであろう。65は須恵器壺の底部高台部分である。これらは、斎宮I-2期に比定できよう。

S K 8647出土遺物 (66~80) 66・67は土師器杯A。ともに土器外面にはヘラミガキ、内面には暗文が施されている。68は口縁部が外傾する土師器皿Aである。69は口縁端部が内側に巻き込むように肥厚している土師器皿Bである。高台部分が剥離したものなのだろう。70・71は、口縁端部が面取りされ上方につまみあげられたような形状、外反する口縁をもつ大形の土師器甕Aである。72~75は、口縁端部が面取りされ、外反する口縁、丸底になる小形の土師器甕A。76は体部が最も張り出す部分に把手を2ヶ所もつ土師器鍋Bである。77は鰐付円筒形土器である。78は口縁部が水平に延び、鍋のように底部に向かい曲線を描くものである。土師器鉢であろうか。79は口縁部にカエリがない須恵器杯B蓋である。天井部分は残存していない。これらは、斎宮I-2期に比定できよう。80は毛彫馬具。帶飾金具と考えられる。面懸、胸懸、あるいは尻懸の革帯に装着されていたものであろう。帯に留めるための鉢部分4ヶ所や鍍金部分が残る。材質や製作技法については、自然科学分析編に詳細に述べられているのでそちらに譲ることとする。

S K 8659出土遺物 (81) 81は土師器椀A。外傾する口縁部の端部に面取りがみられる。外面には赤色顔料が一部残存している。斎宮I-1期に比定できよう。

S K 8666出土遺物 (82) 82は面懸の轡部分に関連する馬具である。軒の一部分か手綱と繋がる部分と

考えられる。

S X 8665出土遺物 (83・84) 83・84は、口縁端部が面取りされ上方につまみあげられたような形状、外反する口縁をもつ土師器甕Cである。土器棺として使用されていたと考えられる。これらは、斎宮I-2期に比定できよう。

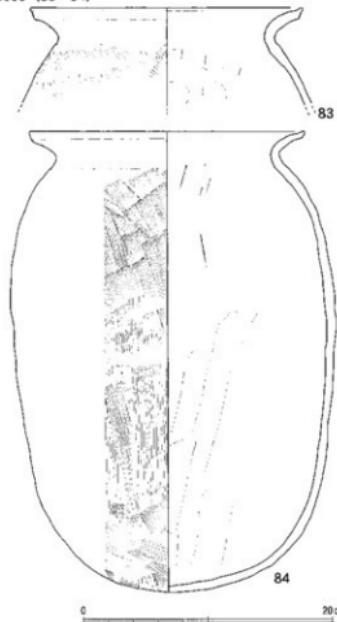
S Z 8561出土遺物 (85~87) 85・86はロクロ土師器皿である。底部から口縁部にかけて直線的に延びている。87は口縁端部が内側に巻き込むように肥厚している土師器甕である。これらは、斎宮III-1期に相当しよう。

S D 8567出土遺物 (88) 88は口縁端部が少し外反する縁釉陶器椀である。

(2) 中世の遺物

S X 8575 (89~93) 89~92は底部から口縁部にかけて直線的に外反する通称「山皿」といわれている

SX8665 (83・84)



第III-21図 第137次調査区 出土遺物実測図(5) (1:4)

陶器小皿である。89の底部外面には「上」と墨書きされている。これらは、藤沢編年5型式^⑨に相当しよう。93は刀子の切先部分である。木質のものが一部に付着しており、鞘の一部と考えられる。

S K 8600 (94~96) 94・95は底部から口縁部にかけて内窵している土師器皿である。器壁が非常に薄いものである。96は、粗製の土師器小皿。これらは、伊藤編年Ⅲa期^⑩に相当しよう。

S X 8644 (97~101) 97は底部から口縁部にかけて内窵している土師器皿である。器壁が非常に薄いものである。98~101は、粗製の土師器小皿。伊藤編年Ⅱb期に相当しよう。

S D 8568 (102・103) 102は底部から口縁部にかけて直線的に外反する通称「山茶椀」といわれている陶器椀である。藤沢編年7型式に相当しよう。

103は陶器大甕の底部片である。

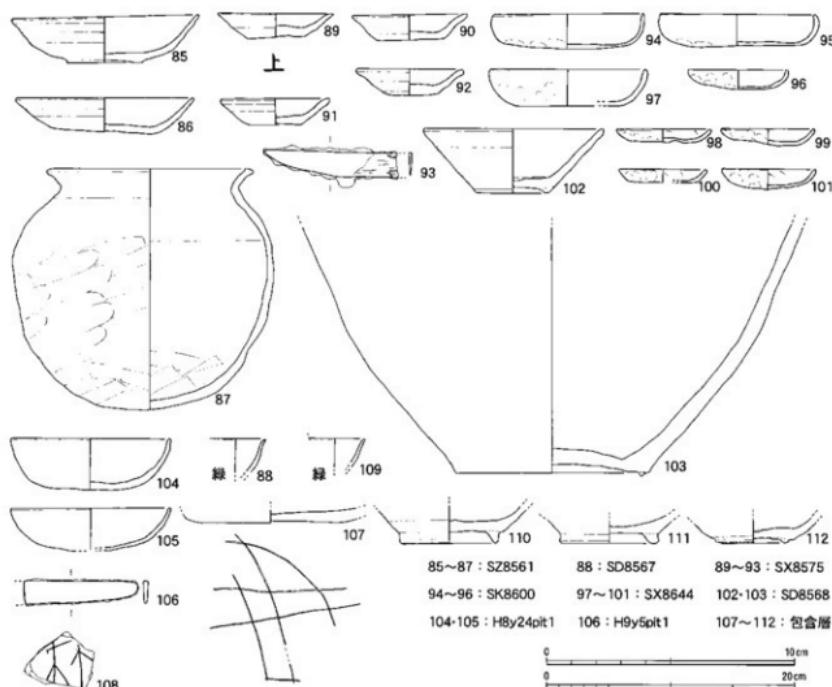
柱穴出土遺物 (104~106) 104・105は底部から口

縁部が内窵気味にたちあがる土師器杯G。これらは、斎宮I-2~3期に相当しよう。106は小刀の茎である。中世のものと考えられる。

包含層出土の遺物 (107~112) 107は底部外面に「ドーマン」とも考えられる^⑪ヘラガキが施されたものである。108は底部外面に「林」と考えられるヘラガキが施されたものである。土師器皿か杯と考えられる。土師器皿か杯と思われる。109は口縁端部が少し外反する縁釉陶器椀である。これらは古代の遺物と考えられる。II-3~4期のものか。110~112は通称「山茶椀」といわれている陶器椀の底部片である。111については底部内面に赤色顔料の付着がみられる。これらは中世前半のものであろう。

5まとめと検討

ここでは、遺構・遺物について列記し、まとめとしたい。



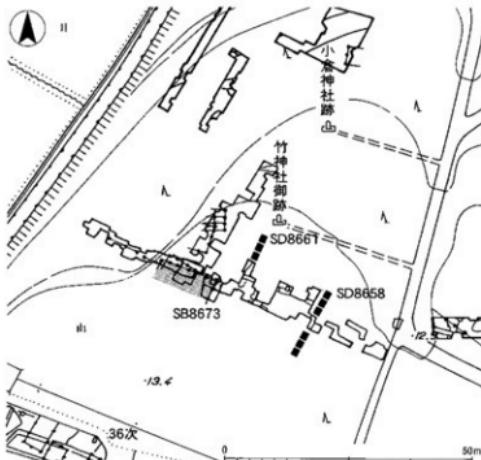
第III-22図 第137次調査区 出土遺物実測図(6) (1:4 ※93・106は1:2)

(1) 造構の検出状況

第137次調査では、掘立柱建物7棟、竪穴住居20棟、土坑40基、溝39条、土壙墓3基、土器棺墓1基、地鎮闡連造構1基を確認することができた。

a 堀立柱建物

堀立柱建物については、出土遺物から斎宮I期前半の属すると考えられ、堀立柱建物は、現在の旧竹神社の部分に集中しているようである。確認した建物群のなかでは、SB8673が注目できる。今回の調査と第97-2次調査の成果から、南北2間以上、東西6間の、東西棟の建物であることが想定できる。柱間は2.0mの等間であった。柱穴から出土の遺物から、斎宮I期前半の建物と考えられる。規模からみれば、斎宮跡の当該期の堀立柱建物としては最大級の規模のものと考えられる。また、今回の調査で検出したSD8658・8661は、SB8673の建物方向とはほぼ平行で、埋土からの出土遺物もほぼ同時期である。2つの溝が区画溝的な性格を持つとすれば、第137調査区を含む一帯に一つの区画があった可能性が指摘できよう。斎宮に関連するものか、あるいは、それ以外例えば郡衙のような官衙に関連するものなのか、今後様々な可能性を探っていくべきものと考える。第137次調査区と第36次調査区の間に存在する未調査の部分が注目に値しよう。今後の調査の進捗に期待したいと思う。



第三-23図 SB8673と周辺の造構(1:1,000)

b 竪穴住居

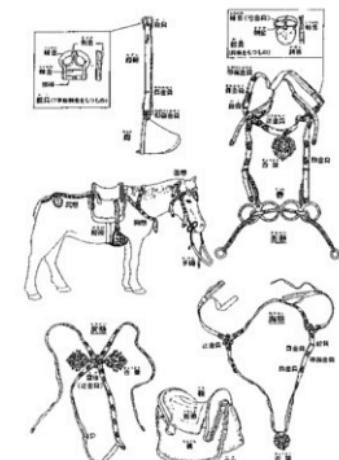
調査区全体で偏ることなく分布している。これらのなかでも、調査区の北側部分で検出したSH8638が注目できよう。竪は北東辺のほぼ中央に築造されていて、内部には支柱石が2ヶ所あった。このような竪の形態は、支柱石が1ヶ所のものについては斎宮跡でも多くみられるが、あまり類例はないようである。第137次調査においても、竪内の施設が違っている状況がある。このことから、仮にではあるが、斎宮を营造するにあたり、微用されてきた人々の出身地域の違いが出ているのかもしれない。今後の検討課題としたい。

(2) 遺物の出土傾向

遺物全体の出土をみてみると、土師器類がほとんどで、須恵器類が若干、縁白陶器はごく少数、金属製品が少量という状況であった。時期については、斎宮I期から中世までのものを確認している。中世遺物は、南伊勢系¹⁰⁾のものを中心に出土した。

a 毛彫馬具

SK8647から毛彫馬具が出土した。毛彫馬具は、表面に毛彫りが施された金銅製馬具の総称である。毛彫馬具の中でも、帶飾金具と考えられる。面懸、胸懸、あるいは尻懸の革帯に装着されていたものと考えられる。6世紀前葉あたりが初現といわれていて、使用年代の下限は、平城京八条一坊十三・十四



第三-24図 馬具の部分名称(※註7の文献から転載)

坪において出土が確認されているので、奈良時代中頃には使用されなくなつたと考えられている。¹⁷ 今回の調査で出土した毛彫馬具も、共伴する土器群が斎宮I-2期であったので、先述の使用的下限とも一致している。

時期は9世紀に下がるが、『続日本後紀』承和九年五月乙未条には、五位以上の官人に鞍と馬飾に金銀を用いるのを許したとある。¹⁸ また、隣接するSK8666では轡部分の馬具が出土しているし、SB8674の建物方向とほぼ平行のSD8658らに囲まれたと考えられる部分にある土坑からの出土でもあるので、その他の馬具や掘立柱建物との関連についても興味深いものがある。

(3) 第5次調査出土の馬具

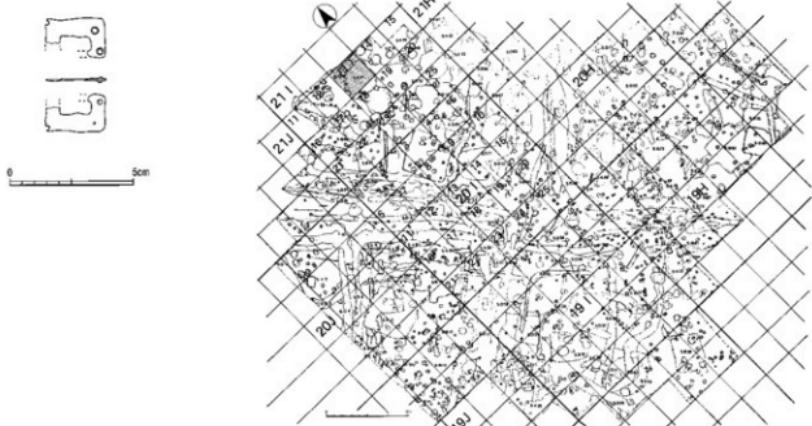
第137次調査時には、斎宮跡において飾金具の馬具の出土は初例と考えられていた。整理の過程で、第5次調査(古里D地区)においても出土していたことが判明したので改めて紹介する。¹⁹ ラベルには、「8FFS-D 21113 73.11.22」とあり、包含層出土と考えられる(第III-25図参照)。第137次調査出土資料と同様の形態を示している。全体の形としては長方形で、長方形の窓を作っている。窓の下部分が欠失していた。窓の外側に2ヶ所に鉢がみられ、1ヶ所は鉢自体が欠失している。本来は4ヶ所あったものと思われる。残存していた部分は、長辺

3.5cm、短辺2.2cm、厚さ0.05cm程度であった。

(小濱 学)

<註>

- (1)駒田利治・泉 雄二・倉田直純「斎宮跡の土器」(『斎宮跡発掘調査報告』I 斎宮歴史博物館、2001年)を参照した。
- (2)『平城宮発掘調査報告』XIV (奈良国立文化財研究所、1993年)や『古代の土器 I 都城の土器集成』(古代の土器研究会、1992年)に詳しい。
- (3)藤沢良祐「山茶碗と中世集落」「尾呂」(瀬戸市教育委員会、1990年)、「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター、1994年)を参照した。
- (4)伊藤裕偉「VI 調査のまとめと検討」(『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター、1996年)を参照した。
- (5)平川 南「墨書き土器とその字形」(『国立歴史民俗博物館研究報告』国立歴史民俗博物館、1991年)に詳しい。
- (6)伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海をみる」(『鍋と甕—そのデザイン』東海考古学フォーラム、1996年)を参照した。
- (7)富永里菜「馬具の革金具」(『鎧袋をめぐる諸問題』奈良文化財研究所、2002年)に詳しい。
- (8)「五月甲午朔乙未 勅。五月五日供節。四衛府六位官人已下裝束。除二甲胄飾一之外。不。得。用二金銀及薄泥一。五位已上走馬之鞍并馬飾。不。論。二新舊雖。用金銀一。但薄泥不。在。二號限一。」とある。
- (9)県下では、伊勢市塙山古墳群においてまとまった出土例がみられる。岩中淳之『鳴門道跡発掘調査報告』(伊勢市教育委員会、1987年)



第III-25図 第5次調査出土馬具の出土地点(1:600、網点部分)と遺物実測図(1:2)

No.	出土道場	器種	法寸 (cm)	調査・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	参考	登録No.
1	H8-v24 P15 SH8674	上部器 底A	口縁	16.0 内:ナメ	男:ヨコナデオサエ・ナデ・高ヘラミリキ 内:ナメ	やや青 良	焼5YR6/6	1/2		002-04
2	H9-v9 SH8586	土師器 底G	口縁	11.2	外:内:ヨコナデカマ厚減薄しい	やや青 良	焼5YR6/6	ほぼ完形		018-02
3	H9-v9 SH8586	上部器 底A	口縁	14.0	外:ハケヌ・ヨコナデハケヌ 内:ハケヌ	青 良	浅黄焼10YR8/4	ほぼ完形		018-05
4	H9-v9 SH8586	土師器 底A	口縁	26.0	外:ヨコナデオサエ・ナデ・ハケヌ 内:ハケヌ・ケズリ	やや青 不良	外:焼5YR7/6 内:焼5YR6/8	口3/12		036-03
5	H9-v9 SH8586	上部器 底G	口縁 底K	14.2 11.6	外:ヨコナデオサエ・ナデ・ハケヌ 内:ナデ・オサエ	やや青 良	焼5YR6/2	杯底1/4 脚部1/2 完存		018-04
6	H9-v9 SH8573	上部器 底A	口縁 底K	16.1	外:ヨコナデハケヌ 内:ハケヌ・ケズリ	やや青 良	浅黄焼10YR8/4	口5/6		029-02
7	H9-v19 SH8573	上部器 底A	口縁	17.2	外:ヨコナデハケヌ 内:ハケヌ・ケズリ	やや青 良	浅黄焼7.5YR8/4	口3/4		029-01
8	H9-v19 SH8573	上部器 底G	口縁	30.6 16.4	外:ヨコナデハケヌ 内:ヨコナデハケヌ・ケズリ	やや青 良	浅黄2.5YR7/3	口完存		046-01
9	H9-v20 SH8576	上部器 底A	口縁	16.0	外:ヨコナデハケズリ 内:マニス・マニス	青 良	外:焼2.5YR6/8 内:焼2.5YR6/8	口1/8		002-02
10	H9-v20 SH8576	上部器 底A	口縁	28.0	外:ヨコナデハケヌ 内:ハケヌ	青 良	明黄焼7.5YR7/6	1/4		005-02
11	H9-v10 SH8585	上部器 底A	口縁	20.0 2.1	外:ヨコナデミガキ 内:ナデ	青 良	焼5YR6/8	口3/12		032-01
12	H9-v10 SH8585	上部器 底A	口縁	16.0	外:ヨコナデハケヌ・ケズリ 内:ヨコナデハケヌ・ケズリ	青 良	外:焼2.5YR7/4 内:浅黄焼7.5YR8/4	口3/12		033-02
13	H9-v10 SH8585	上部器 底A	口縁	19.0	外:ヨコナデハケヌ 内:ナデ	やや青 良	浅黄焼10YR8/3	口4/12		032-02
14	H9-v10 SH8585	上部器 底G	口縁	16.0	外:ヨコナデハケヌ・ナデ 内:ハケヌ・ナデ	青 良	外:焼7.5YR7/6 内:焼5YR7/6			033-01
15	H9-v10 SH8585	上部器 底A	口縁	30.0	外:ヨコナデハケヌ 内:ハケヌ・ケズリ	青 良	焼7.5YR7/6	口3/12		035-01
16	H9-v10 SH8585	上部器 底G	口縁	19.0	外:回転ナデハケズリ 内:回転ナデ	青 良	外:反黄2.5YR6/2 内:風化2.5YR7/1	大坪選光 存		003-02
17	H9-v10 SH8585	上部器 底K	重量	28.41 K	外:ナデ	やや青 不良	内:灰白焼7.5YR7/4			026-04
18	H9-v11 SH8588	上部器 底A	口縁	17.0 内:ナデ	外:ヨコナデハケズリ 内:ナデ	青 良	焼2.5YR6/6	1/6		019-02
19	H9-v10 SH8588	上部器 底A	口縁	17.2	外:ヨコナデナデ 内:ナデ	青 良	焼5YR6/6	口1/8		019-03
20	H9-v10 SH8588	上部器 底B	口縁	24.8	外:ヨコナデミガキ 内:ヨコナデ	青 良	焼2.5YR6/6	1/6		019-04
21	H9-v11 SH8588	上部器 底A	口縁	16.5	外:ヨコナデハケヌ 内:ハケヌ	やや青 良	内:灰白焼7.5YR7/4	口1/4		019-05
22	H9-v10 SH8588	上部器 底G	口縁	33.8	外:ヨコナデハケヌ 内:ハケヌ	やや青 良	内:灰白焼7.5YR7/4			019-07
23	H9-v11 SH8588	裏器 蓋	口縁 底K	15.9 3.0	外:回転ナデナメケズリ 内:ナデ	青 良	灰白7.5YR7/1	ほぼ完形		019-01
24	H8-v24 SH8606	上部器 底G	口縁	11.8	外:ヨコナデナデ 内:ナデ	青 良	焼2.5YR6/8	1/2		021-02
25	H8-v24 SH8606	上部器 底G	口縁 底K	10.6 3.2	外:ヨコナデナデ 内:ナデ	青 良	内:灰白7.5YR7/4	1/6		021-01
26	H8-v24 SH8606	上部器 底A	口縁	11.0	外:ヨコナデナデ 内:ナデ	青 良	内:灰白7.5YR7/4	1/2		021-03
27	H8-v24 SH8606	上部器 底A	口縁	19.0	外:ヨコナデハケヌ 内:ハケヌ	青 良	内:灰白7.5YR7/4	口1/6		021-04
28	H8-v23 SH8641	上部器 底G	口縁 底K	12.2 3.2	外:ヨコナデナデ 内:ナデ	青 良	焼2.5YR6/8	3/8		039-03
29	H8-v19 SH8638	上部器 底A	口縁 底K	16.0 3.0	外:ヨコナデナデ 内:ナデ	やや青 良	焼5YR7/6	1/2		014-02
30	H8-v19 SH8638	上部器 底G	口縁 底K	21.0 2.45	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	青 良	焼5YR7/6	2/3		014-01
31	H8-v19 SH8638	上部器 底G	口縁	21.0	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	青 良	焼5YR7/6	口1/4	内面に落付有	014-03

第III-6表 第137次調査区出土遺物観察表(1)

No.	出土遺構	層種	法量 (cm)	測量・核法の特徴	筆土	焼成	色 滋	残存度	備考	登録No.
32	H8-y16 SI8638	上部層 高砂	脚部 12.0	外: ケズリ 内: ナデ	密	良	緑 5Y7/6	脚 9/10		014-04
33	H8-y19 SI8638	上部層 壁 A	口縁 20.0	外: ヨコナデーハケメ 内: ナデ	やや粗	良	にぶい黄緑 10YR7/3	1/10		014-05
34	H8-y19 SI8638	上部層 壁 A	口縁 17.0	外: ヨコナデーハケメ 内: ナデーケズリ	やや粗	良	にぶい黄緑 10YR7/3	外: 壁		016-01
35	H8-y19 SI8638	上部層 壁 A	口縁 20.0	外: ヨコナデーハケメ 内: ナデ	やや密	良	にぶい黄緑 10YR7/3	1/10		015-01
36	H8-y19 SI8638	上部層 壁 A	口縁 34.0	外: ヨコナデーハケメ 内: ナデ	やや密	良	緑 5Y7/6	1/10		015-02
37	H8-y19 SI8638	上部層 壁 A	口縁 38.0	外: ヨコナデーハケメ 内: ハケメ	密	良	にぶい黄緑 10YR7/4	口 1/12	外: 壁	017-01
38	H9+y9 SK8564	上部層 杯 A	口縁 落高 13.6 3.0	外: ヨコナデーハケズリ 内: ナデ	密	良	緑 10YR7/6	1/6		020-05
39	H9+y8 SK8564	上部層 杯 A	口縁 落高 3.3	外: ヨコナデーハケズリ 内: ナデ	密	良	緑 5YR6/6	口 1/12		020-07
40	H9+y8 SK8564	上部層 杯 A	口縁 落高 28.5	外: ヨコナデーオサエ・ナデ 内: オサエ・ナデ	やや密	良	緑 5YR6/6			036-01
41	H9+y8 SK8564	上部層 杯 A	口縁 落高 11.8 2.8	外: ヨコナデーオサエ・ナデ 内: ナデ	やや粗	不良	褐色 10YR8/2	2/12		036-02
42	H9+y8 SK8564	上部層 杯 A	口縁 落高 2.9	外: ヨコナデーナデ・オサエ 内: ナデ	やや密	良	浅黄緑 10YR8/3	1/3		020-04
43	H9+y8 SK8564	上部層 重 A	口縁 落高 17.2 2.0	外: ヨコナデ 内: ナデ	密	良	緑 7.5YR7/6	口 1/12		020-06
44	H9+y9 SK8564	上部層 重 A	口縁 落高 21.4 2.4	外: ヨコナデーナデ・ヘラミガキ 内: ナデ	密	良	赤褐色 2.5YR5/6	口 2/12		036-04
45	H9+y8 SK8564	上部層 高砂	口縁 19.4	外: ヨコナデーハケズリ、内: ナデ	密	良	緑 7.5YR7/6	口 1/5		020-08
46	H9+y8 SK8564	上部層 壁 C	口縁 22.6	外: ヨコナデーハケメ 内: ハケメ・ヨコナデーハケズリーナデ	やや粗	不良	浅黄緑 10YR8/3	頻 3/12		037-01
47	H9+y8 SK8564	上部層 壁		外: ヨコナデーハケメ 内: ハケメ	やや密	不良	にぶい緑 7.5YR7/4	口縁小片		037-02
48	H9+y9 SK8564	道面層 杯 A	口縁 落高 18.4	外: 回転ナデー回転ケズリ 内: 回転ナデ	密	良	灰 10Y5/1	口 1/6		020-01
49	H9+y8 SK8564	道面層 杯 A		外: 回転ナデー回転ケズリ 内: 回転ナデ	密	良	灰 10Y6/1	口縁小片		020-09
50	H9+y8 SK8564	道面層 杯	口縁 落高 13.6 3.5	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	良	灰 10Y6/1	2/3		020-02
51	H9+y8 SK8564	道面層 杯	口縁 落高 14.4 3.9	外: 回転ナデーケズリ 内: 回転ナデ	密	良	灰 10Y6/1	1/4		020-03
52	H8+y10 SK8565	上部層 住人 A	口縁 落高 15.3 3.45	外: ヨコナデーナデ・オサエ 内: ヨコナデ	やや粗	不良	褐色 10YR8/2	口 2/12		026-02
53	H9+y8 SK8584	道面層 壁 A	口縁 17.4	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	密	良	灰 N5/0	2/12		026-01
54	H8+y24 SK8621	上部層 高砂 A	口縁 落高 16.4 5.2	外: ヨコナデーヘラミガキ・ナデ 内: ヨコナデ	やや密	不良	緑 5YR6/8	口 8/12		025-02
55	H8+y24 SK8621	上部層 蓋		外: ナデー橋子・納文→ハケメ 内: ナデ	やや密	不良	緑 5YR6/6	頭頂部のみ		025-01
56	H8+y24 SK8621	上部層 高砂	口縁 落高 25.5 1.6	外: ヨコナデーハケズリ・ナデ 内: ヨコナデ	密	不良	緑 5YR6/8	口 5/12		025-04
57	H8+y24 SK8621	上部層 高砂 A	脚部 13.8	外: ナデー・ヨコナデ 内: ナデ	密	良	外: 緑 2.5YR6/8 内: 緑 5YR7/6	底 7/8		034-01
58	H8+N24 SK8621	上部層 高砂 A	脚部 14.0	外: ナデー・ヨコナデ 内: ナデ	密	やや 良	外: 緑 5YR7/8 内: 緑 5YR7/6	履面ぼか 光沢		034-02
59	H8+y24 SK8621	上部層 壁 A	口縁 19.2	外: ヨコナデーハケメ 内: ハケメ	やや密	良	浅黄緑 10YR8/3	口 1/8		031-01
60	H8+y24 SK8621	上部層 壁 C	口縁 23.7	外: ヨコナデーハケメ 内: ハケメ	やや粗	良	にぶい黄緑 10YR7/4	口 1/8		031-02
61	H8+y24 SK8621	道面層 杯 B 盆	口縁 落高 14.6 3.7	外: 回転ナデーヘラケズリ 内: 回転ナデ	密 石	良	灰 10Y6/1	口 1/3		005-01
62	H8+y24 SK8621	道面層 杯 A	口縁 14.0	外: 回転ナデーヘラ切り 内: 回転ナデ	1 mm 3 mm 12 mm	良	灰 10Y6/1 内: 赤 4.5Y7/2	口 1/2	底外: ヘラ記号	002-03

第三回 第137次調査区出土遺物観察表(2)

No.	出土遺物	器種	法 尺 (cm)	調査・核査の特徴	施上	焼成	色 調	残存度	備 考	登録No.
63	H8-c24 SK8621	馬鹿器 H-B	口縁	14.8 外：回転ナデ 内：回転ナデ	外：0.5~2.5 mm右 内：0.5~2.5 mm左	良	外：灰白 6/11Rac5B 内：結晶 6/11Rac5G	II 1/10		001-01
64	H8-c24 SK8621	上部器 H-A	口縁 器底	10.6 外：ヨコナデ→オサエ+ナデ 内：ヨコナデ		やや密 不良	外：灰白 10YR6/4 内：灰白 5YR7/4	3/12		025-03
65	H8-c24 SK8621	上部器 H-B	高底	13.0	外：回転ナデ→名切型・貼り付け後ナデ、 内：ヨコナデ	やや密 不良	灰白 6/0	高台 3/8		031-03
66	H8-c23 SK8647	上部器 H-A	口縁	17.6	外：ミガキ 内：ハケヌメナデ	やや密 良	橙 5YR6/6	1/4		039-02
67	H8-c23 SK8647	上部器 H-A	口縁	11.4	外：ヨコナデ→ヘラミガキ 内：ハケヌメナデ	やや密 良	橙 2.5YR6/8			030-02
68	H8-c23 SK8647	上部器 H-B	口縁	11.4	外：ヨコナデ→ナデ 内：ナデ	やや密 良	橙 2.5YR7/8	II 1/8		039-04
69	H9-c23 SK8647	上部器 H-B	口縁	19.8	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ナデ	密 良	橙 2.5YR6/8	II 1/8		039-05
70	H8-c24 SK8647	上部器 H-B	口縁	16.3	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ナデ	やや密 良	浅黄緑 10YR8/3	II 小片		030-01
71	H8-c23 SK8647	上部器 H-B	口縁	21.2	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ハケヌメケズリ	密 良	浅黄緑 10YR8/3 - 8/4	II 1/7		027-01
72	H8-c23 SK8647	上部器 H-B	口縁	15.4	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ハケヌメケズリ	やや密 良	橙 2.5YR7/6	II 1/10		038-01
73	H8-c23 SK8647	上部器 H-A	口縁	16.4	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ハケヌメ	密 良	に赤い斑 7.5YR7/4	II 1/4		038-04
74	H8-c23 SK8647	上部器 H-A	底部	14.2	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ナデ	密 良	に赤い斑 7.5YR7/4	底部 1/4		038-03
75	H8-c23 SK8647	上部器 H-B	口縁	15.6	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ハケヌメケズリ	密 良	浅黄緑 7.5YR8/3	II 1/2		038-02
76	H9-c23 SK8647	上部器 H-B	口縁	33.0	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ハケヌメケズリ	粗 良	浅黄緑 10YR8/3	II 1/2		028-01
77	H9-c23 SK8647	上部器 H-B	口縁	14.0	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ハケヌメナデ	やや密 良	浅黄 2.5YR8/3	II 1/4		039-01
78	H8-c23 SK8647	上部器	口縁	16.6	外：ヨコナデ→ナデ 内：ハケヌメナデ	密 良	浅黄緑 10YR8/3	II 1/6	舞付円筒形土器	038-05
79	H8-c23 SK8647	馬鹿器 H-B	口縁	17.0	外：回転ナデ 内：回転ナデ	粗 良	灰白 5Y7/1	口 1/8		039-06
80	H9-c23 SK8647	馬鹿器							金網、鍍金、飾り 金具	007-01
81	H8-c23 SK8659	上部器 H-A	口縁	15.3	外：ヨコナデ→ヘラミガキ 内：ミガキ	密 不良	橙 2.5YR6/8	II 1/12	内・外面：赤茶	026-03
82	H8-c22 SK8656	馬糞							曹部分	011-01
83	H8-c24 SK8647	上部器 H-C	口縁	21.3	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ナデ+オサエ	密 良	黄緑 7.5YR7/8	II 1/3		028-02
84	H8-b24 SK8647	上部器 H-C	口縁 器底	22.0 37.3	外：ヨコナデ→ハケヌメ 内：ヨコナデ+ケズリ	密 良	に赤い斑駆 10YR7/4	ほぼ完形		024-01
85	H9-c17 SK8561	99上部器 器底	口縁 器底	15.0 3.8	外：ロクロナデ→名切型 内：ロクロナデ+ヨコナデ	やや密 良	黄緑 7.5YR8/6	口 1/3		003-03
86	H9-c17 SK8561	99上部器 器底	口縁 器底	14.4 2.9	外：ロクロナデ→名切型 内：ロクロナデ+ヨコナデ	やや密 良	浅黄緑 10YR8/4	II 1/2		004-02
87	H9-c17 SK8561	上部器 器底	口縁	16.6 19.4	外：ヨコナデ→オサエ 内：ナデ+ケズリ	一 密 良	に赤い斑 7.5YR7/4	口 1/2		001-03
88	H9-a19 SK8567	輪相陶器 便				密 良	陶豆绿 836	II 縦 小片		023-02
89	H9-c15 SX8575	陶器皿	口縁	9.4	外：ロクロナデ→貼りつけ高台→名切型 内：ロクロナデ	密 良	に赤い斑 2.5Y6/3	完形	山形 底外面に墨書き「上」	002-01
90	H9-c15 SX8575	陶器皿	口縁	9.4 1.9	外：ロクロナデ→貼りつけ高台→名切型 内：ロクロナデ	やや密 良	陶白 2.5Y7/1	II 3/4	山形	004-03
91	H9-c15 SX8575	陶器皿	口縁	8.8 2.1	外：ロクロナデ→貼りつけ高台→名切型 内：ロクロナデ	やや密 良	陶白 2.5Y7/1	完形	山形	004-01
92	H9-c15 SX8575	陶器皿	口縁	8.6 2.1	外：ロクロナデ→貼りつけ高台→名切型 内：ロクロナデ	やや密 良	外：灰黄 2.5Y7/2 内：浅黄 2.5Y7/3	完形	山形	003-01
93	H9-c15 SX8575	刀子							器の本質部分が付 る。	009-01

第III-8表 第137次調査区出土遺物観察表(3)

No.	出土遺物	器種	法寸 (cm)	測量・技法の特徴	出土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
93	H8-y25 SK8600	上部器 皿	口縁 底高 2.5	外：ヨコナデー・オサエ・ナデ 内：ナデ	密	良	浅黄褐 10YR8/4	L1 定存	伊藤編年Ⅱa	040-01
95	H8-y25 SK8600	上部器 皿	口縁 底高 2.6	12.3 奥：ヨコナデー・オサエ・ナデ 2.6 内：ナデ	やや密	良	浅黄褐 10YR8/4	L1 5/8	*	040-02
96	H8-y25 SK8600	上部器 皿	口縁 底高 2.6	7.8 奥：ヨコナデー・オサエ・ナデ 1.6 内：ナデ	やや密	良	にぶい青褐 10YR7/3	L1 1/2	*	040-05
97	H8-y24 SX8644	上部器 皿	口縁 底高 2.5	12.4 奥：ヨコナデー・オサエ・ナデ 2.5 内：ナデ	やや密	良	灰白 10YR8/2	L1 1/1	伊藤編年Ⅱb	040-03
98	H8-y24 SX8644	上部器 皿	口縁 底高 2.5	7.4 奥：オサエ・ナデ 1.1 内：ナデ	やや粗	良	淡黄 2.5YR8/3	L1 5/8	*	040-08
99	H8-y24 SX8644	上部器 皿	口縁 底高 2.5	7.4 奥：オサエ・ナデ 1.1 内：ナデ	やや密	良	浅黄褐 10YR8/3	L1 定存	*	040-09
100	H8-y24 SX8644	上部器 皿	口縁 底高 2.5	6.7 奥：オサエ・ナデ 1.1 内：ナデ	やや密	良	淡黄 10YR8/3	L1 1/5	*	040-07
101	H8-y24 SX8644	上部器 皿	口縁 底高 2.5	7.9 奥：オサエ・ナデ 1.7 内：ナデ	やや密	良	淡黄 2.5YR8/3	L1 3/4	*	040-06
102	H9-y21 SD8558	陶器 碗	口縁 14.6	外：クロロナデー貼りつけ高台→糸切引痕 内：クロロナデ	0.5 ~ 1.5 mm 小石	良	灰白 7/Hue25 Y 内：灰白 7/Hue5Y	L1 1/5	山茶輪 糠澤編年 7 型式	001-02
103	H9-y20 SD8558	陶器 碗	口縁 15.6	外：四輪ナデ 内：四輪ナデ	密	良	暗赤 7.5R4/3	底 1/8	底部石付 堅舟?	022-01
104	H8-y24 P11	上部器 杯 G	口縁 12.8	外：ヨコナデー・ナデ 内：ナデ	密	良	にぶい青褐 10YR7/4	ほぼ完形		018-03
105	H9-y5 P11	上部器 杯	口縁 12.8	外：ヨコナデー・ナデ 内：ナデ	やや密	良	暗 7.5YR7/6	2/3		018-01
106	H9-y5 P11	小刀							基部部分	010-01
107	H8-g22 包含層	上部器 皿		外：ケズリ、内：ナデ	密	良	にぶい乾 5YR7/4	底部のみ	底部施釉「ドーマン」の一種か。	023-01
108	H9-y9 包 含層	上部器 皿		外：ケズリ、内：ナデ	密	良	暗 2.5YR6/8	小片	ヘラ描き「林」?	023-05
109	H8-g22 包含層	縦縫陶器 瓶			密	良	苔 837	口縁 小片		023-03
110	H8-g25 包含層	陶器 瓶		外：クロロナデー貼りつけ高台→糸切痕 ナデ、内：クロロナデ	密	良	灰黄 2.5 Y 7/2	底 9/12	山茶輪	026-06
111	H8-y24 包含層	陶器 瓶		外：クロロナデー貼りつけ高台→糸切痕 ナデ、内：クロロナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	底部のみ	山茶輪、全面に 赤色斑点、局部に 褐色斑点。	023-04
112	H8-y24 包含層	陶器 瓶		外：クロロナデー貼りつけ高台→糸切痕 ナデ、内：クロロナデ	やや粗	不良	灰黄 2.5 Y 6/2	底 10/12	山茶輪、稍過加厚。	020-05

第三III-9表 第137次調査区出土遺物観察表(4)

次 数	地区	グリット	遺構・層名	縦縫破片数	備 考
137	I 9	A 19	SD 8567	1	
137	H 8	G 22	包含層	1	

第三III-10表 第137次調査区縦縫陶器出土地点・破片数一覧



調査区南部分（南から）



調査区中央部分（東から）



調査区北部分（南から）



調査区西部分（西から）



調査区中央部分南（南から）



SB8672・8673（西から）



SB8668（西から）



SB8674・SH8631（西から）



SH8572・8574（南西から）



SH8585・8586・8588（北から）



SH8586竪（北西から）



SH8573・8576（南東から）



SH8635 (北東から)



SH8638 (北西から)



SH8638窟（西から）



SH8607（北東から）



SK8647 (北西から、串部分は毛庇馬具出土地点)



SK8621 (南から)



SK8643、SX8665（北西から）



SZ8561（西から）



SX8575 (西から)



SX8644 (西から)



2



4



3



5



3底部



6



7



8



11



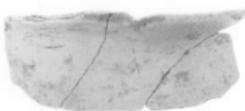
16



12



15



14



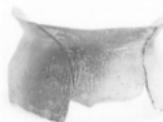
24



23



28



26



30



32



35



34



37



39



42



48



57



58



61



62



65



63



66



67



72



75



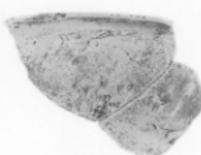
76



71



77



78



82



80表



80裏



83



85



87



84



86



89



90



92



94



93



96



99



95



98



101



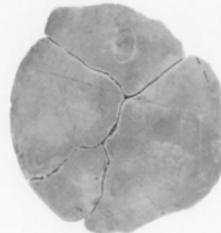
102



106



104



107



105 第5次調査出土馬具



111



表



裏

IV 第139次調査

(6AJ9・L9 塚山・広頭・東裏地区)

1 調査の経緯と経過

第139次調査区は、斎宮歴史博物館の南東部にある、通称「奈良古道」沿いに設定された調査区である。この調査は、「奈良古道」の幅員およびその時期的な変遷を見るために設定されたものである。

「奈良古道」は、これまでにも数回の調査で確認されている。杉谷政樹氏によってまとめられた成果¹¹⁾から、道路方向は概ねE15° S (N75° W)を示し、史跡地内を横断して史跡地外東部にまで及ぶと推測されている。西側は、足利健亮氏の研究で飯高駅家まで直線道となることが指摘されている¹²⁾。これは飯野郡条里方向に合致した方向である。

この道路は、史跡地内東部に方格地割が成立する8世紀第4四半期までは伊勢神宮へと至る官道として機能し続けており、方格地割成立後に改変されると考えられている。しかし、道路南側側溝に比べて

北側側溝が不明瞭なこと、あるいは、方格地割成立以後も現在に至るまで、農道として機能し続いていることなどから、成立期の幅員やその後の変遷を追うこと、などが課題として残されていた。

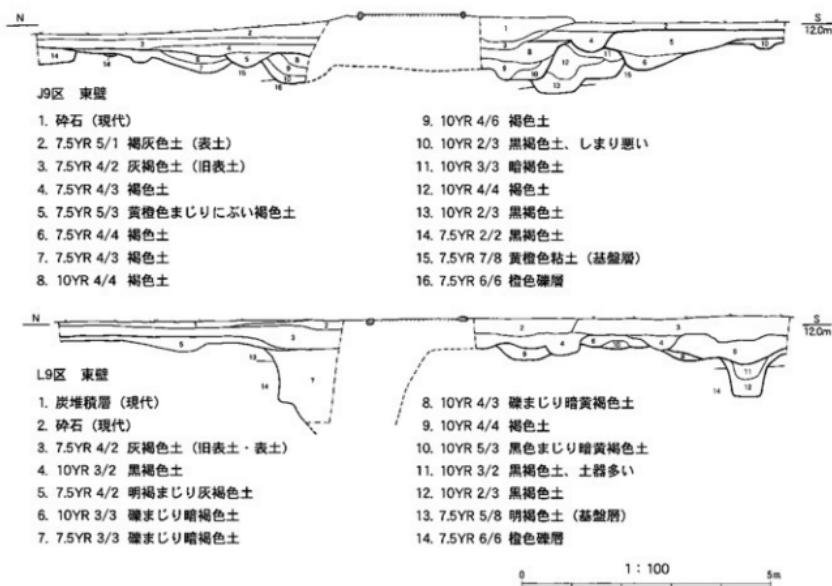
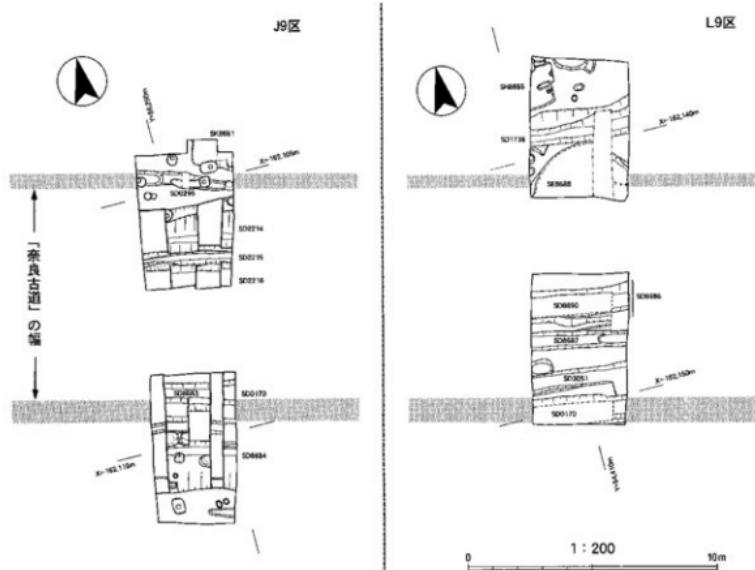
調査地は、古道想定地を挟む形で2箇所に調査区を設定して実施した。西調査区はJ9地区にあたり、調査区北部が斎宮字塚山3,310番地、南部が竹川字東裏314番地にあたる。東調査区はL9地区にあたり、調査区北部が斎宮字塚山3,326番地、南部が斎宮字広頭3,370番地に相当する。調査は2003年2月4日から開始し、同年2月12日に埋め戻しが完了した。最終調査面積は約92m²であった。

2 調査区の層位

調査区の現況は畠地である。現状での標高は、西部・東部調査区いずれも約12.0mである。全体的な地形としては南高北低である。



第IV-1図 第139次・第7次調査区 位置図 (1:2,000)



第IV-2図 第139次調査区 平面・土層断面図

西調査区（J 9 区） ここでは表土下に暗褐色～灰褐色系土が見られ、近世以降の造構面および造構埋土を形成している。調査区南北端では標高11.5m程度で橙～黄橙色系土の基盤層（地山）に達する。現道を挟んだ調査区の中央部分は、古代～近世の道路側溝に相当すると考えられる溝が錯綜している。

東調査区（L 9 区） ここでは表土・盛土下に、旧表土と考えられる灰褐色系土が見られる。その直下が近世の造構面に相当する。標高約11.5mで明褐色土の基盤層（地山）にあたり、この面で古代～中世の造構が確認される。基盤層以下は、標高約11.2mで段丘疊層にあたっていた。

3 遺構

今回の調査区では、古代～近世の造構を確認している。ここでは主立った造構を探り上げるので、それ以外の造構については第IV-1表に示した造構一覧を参照されたい。

(1) 西調査区（J 9 区）の遺構

S D 0295 m・n 2グリット付近で検出した。幅約50cm、深さ約10cm程度の浅い溝である。第8-11次調査区で検出されているS D 0295と同一造構と判断した。3基ほどのピットが溝埋没後に掘削されている。後述のS K 8681と埋土の状況が近似しており、関連造構と見ることもできる。

後述の溝S D 0170と平行関係にあり、「奈良古道」に関係した造構と考えられる。S D 0170との間は、溝の心々で約10mである。

出土遺物は微量である。II-1期頃の土師器甕口縁部片があるが、これは重複するピットを正確に検出する前に出土したものであるため、ピットに伴っていたものなのかも知れない。いずれにしても、II-1期以前に埋没した造構と見てよい。

S D 0170 L・m 4グリット付近で検出した造構である。S D 0170の続きはL 9区でも検出している。

J 9区では、中近世の溝が重複しており、造構の上端はそれによって搅乱されている。溝の幅は約1.9mで、北部がやや深くなっている。本来は2条の溝かも知れないが、明確にはできなかった。深い部分の幅は約1.1mである。造構の深さは、深い部分で30cmであるが、後世の削平を考慮すると、本来

は深い部分で約1m、浅い部分でも約70cmはあったものと考えられる。造構埋土は黒褐色系土である。

出土遺物は多くないが、概ねI期の範疇である。S D 2216・8683 S D 2216はm・n 3グリット付近で、S D 8683はL・m 4グリットでそれぞれ検出した造構である。「奈良古道」に沿う溝で、道路側溝に相当すると考えられる。S D 2216が北側溝、S D 8683が南側溝にあたる。この2造構を同一時期の道路側溝と考えたのは、造構の形状と埋土の状況が類似することによる。

S D 2216は北側の肩部を検出したのみで、規模は不明。検出面からの深さは約60cmで、断面逆台形を呈すると考えられる。最下層埋土には礫を含む。S D 8683は幅約1.2m、検出面からの深さ約70cmの断面逆台形を呈するものである。北肩部は南肩よりも50cmほど低く、S D 2216間の路床面が周囲よりも低くなっていることを示すのである。S D 2216とS D 8683が同じ規模とすれば、路床面の幅は約3.4m、溝心々間で約4.6mである。

出土遺物は少ない。S D 2216からは鎌倉後半～室町期の土師器皿が出土した。S D 8683からは、土師質土器（ロクロ土師器）のほか、鎌倉後半頃の土師器皿が出土している。このことから、当該造構は鎌倉～室町時代頃の造構と考えられる。

S D 2214・8684 S D 2214はm・n 2グリット付近で、S D 8684はL・m 4～5グリットでそれぞれ検出した造構である。前述造構と同様、「奈良古道」に沿っている。この2造構を同一時期の道路側溝と考えたのは、前記S D 2216・8683と同様、造構形状と埋土の類似による。

S D 2214・8684は推定幅約1.6～2.0m、深さ約50～60cmである。いずれも路面側の法面が急で、反対側は緩い。S D 2214とS D 8684間は、溝心々間で約8.8mとなる。この間を道路と考えることもできるが、造構埋土は旧耕作土と考えられる褐色系土であり、道路に隣接する土地の区画を主目的に掘削された溝と考えられる。

いずれの造構からも、埋土内から近世の遺物が出土しており、その頃のものと考えられる。S D 2214はこれまで室町期とされていたが、ここで訂正する。

S D 2215・8682 S D 2215はm・n 2グリット付近で、S D 8682はL・m 4グリットでそれぞれ検出した。前述遺構と同様、「奈良古道」に沿っている。この2遺構を同一時期の道路側溝と考えたのは、前記と同様、遺構形状と埋土の類似による。

S D 2215・8682は幅約1.0m、深さ約30~40cmである。S D 2215は西側で細く深い部分を持つ。S D 2215とS D 8682間は、溝心々間で約7mとなる。この間を道路と考えることもできるが、S D 2214とS D 8684の関係と同様、道路に隣接する土地の区画を主目的に掘削された溝と考えられる。

S D 2215は、重複関係からS D 2214よりも新しい遺構である。したがって、近世以降の遺構と考えられる。S D 2215はこれまで鎌倉期の遺構とされていたが、ここで訂正する。

S K 8681(第IV-4図) m・n 2グリット付近で検出した。遺構の一部を確認したのみで全体形は不明であるが、東西2m以上、南北1m以上で、平面形は隅丸方形を呈している。埋土は、全体が黄色ブロックを含む黒褐色土で、意図的に埋め戻されていると考えられる。その埋土中から、ほぼ完形の土師器長胴壺や、土師器壺・須恵器台付大形甕が出土している。

出土土器から、I-2期に相当する遺構と考えられる。

ピット群 調査区が狭いために掘立柱建物としてまとまらないが、明らかに掘立柱建物の柱穴と考えられるピットが調査区北側・南側にある。これらのピット群は、北側ではS D 0295やS K 8681の廃絶後に穿たれている。南側では、S D 0170の南肩部に重複して見られる。状況から見て、S D 0170・0295よりも新しいことは確実である。m 2-p i t 2からはII-1~2期と考えられる灰釉陶器瓶が出土していることから、斎宮II期が中心と考えられる。

(2) 東調査区(L 9区)の遺構

S D 0170 L 9区では、b・c 12グリット付近で確認した。ここでは、溝南肩が検出されたのは東端部分のみで、西側では調査区外に及んでいる。遺構は、検出面での幅約1.2m、深さ約80cmで、遺構の重複による削平を考慮すれば、本来の深さは1m以上と考えられる。断面逆台形で、埋土は黒褐色系土

である。

L 9区では、埋土下層部分からI-3期相当の土器類が多く出土している。埋土上層部分には11世紀後半代と考えられる瓦器碗が見られるので、下層埋土形成後、かなりの長期にわたって窪み状の場所として存続していたものと考えられる。

S D 8690・3051 S D 8690はc・d 11グリット付近で、S D 3051はc 12グリット付近で検出した遺構である。S D 3051は第50次調査区で検出したS D 3051の延長部分と考えられる。この2条間が道路面になるとを考えられる。この2遺構を同一時期の道路側溝と考えたのは、遺構形状と埋土の類似のほか、ほぼ同じ時期の井戸S E 8688が、ちょうどS D 8690の北にあたることも挙げうる。

S D 8690は幅約1m、深さ約40cmで、断面U字形を呈する。上部は近世の溝S D 8686によって搅乱されている。S D 3051は幅約80cm、深さ約20cmで、断面逆台形を呈する。両溝間は、溝心々で3.2m、路床面幅は2.2mである。いずれの遺構埋土中からも、平安後期~鎌倉期の遺物が出土している。

S D 8687 c・d 11グリット付近で確認した。S D 3051とS D 8686の間にある。埋土には黒色系のブロックが入る。溝状を呈しているが浅い落ち込み状である。S D 3051とS D 8690間の路床の一部である可能性がある。

出土遺物は少なく、遺構の時期を特定できないが、上述のことから、S D 3051と同じ頃の遺構と考えておく。

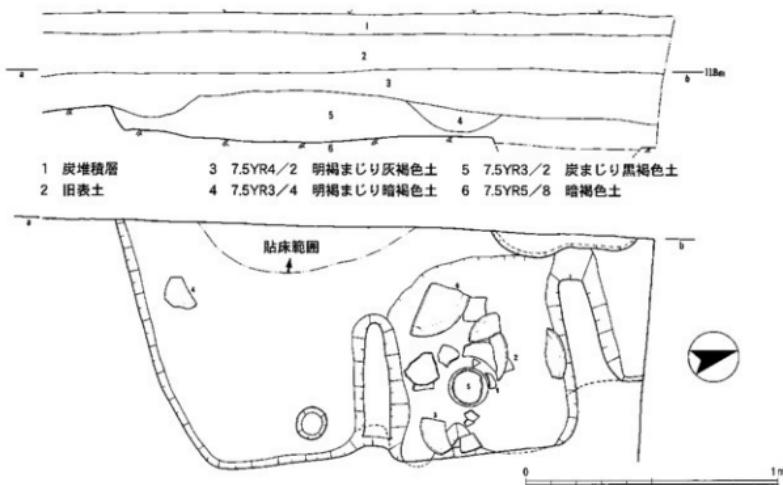
S D 1736 c・d 9グリットで検出した。第32次調査区からの一連の溝と考えた。灰褐色系の埋土である。法面は、北側が緩く、南側がやや急なもので、先述のS D 2214・8684と同様の形態である。

埋土中からの出土遺物は、近世のものを含んでおり、その頃に埋没したものであろう。

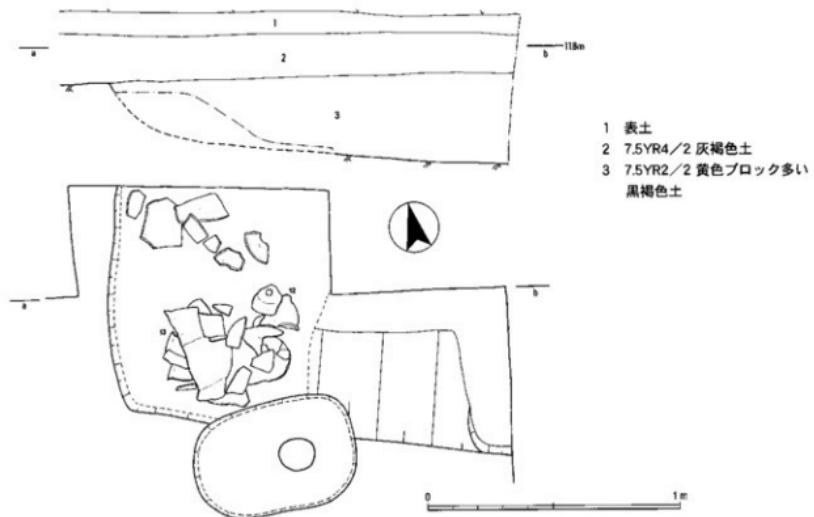
S D 8686 c・d 11・12グリットで検出した溝で、表土直下で確認できた遺構である。埋土中からは近世~近代の遺物が出土した。

S H 8685(第IV-3図) L 9区 c 9グリット付近で検出した。方形の竪穴住居跡で、その南東辺の一部が確認された。

東辺のやや南寄りと思われる位置にカマドがある。



第IV-3図 第139次調査区 S H8685平面・断面図 (1:20)



第IV-4図 第139次調査区 S K8681平面・断面図 (1:20)

カマドは、燃焼部分を壁面から若干掘り込み、袖部の壁際は基盤層がそのまま残っていた。このことから、住居設計段階でこの位置にカマドを作成することがあらかじめ決められていたものと考えられる。カマドの中央には、小形の土師器甕が倒立して置いてあり、中には焼けた土が充満していた。支脚として用いられたと考えられる。なお、カマドに向かつて右手には貯蔵穴のある場合が多いが、この竪穴住居にはそれが見られない。

カマド近隣から、床面に接するような状態で、須恵器・土師器類がまとまって出土した。これらの土器類から、I-2期には廃絶した住居と考えられる。

S E 8688 c・d 10グリット付近で確認した遺構である。円形掘形の一部を確認した。掘形の推定直径はおよそ4mである。調査区東壁際のみ、遺構面下約1.6mまで掘削した。掘形北側には、この高さでテラスがある。

掘形内から中世I期に相当する土師器小皿が出土しているので、時期的にはおよそ12世紀後半頃のものと考えられる。

4 出土遺物

第139次調査区からの出土遺物は、整理箱に換算して約6箱である。内訳は大部分が土器類で、少量の金属製品がある。

ここでは主立った遺物について記述する。古代の土器に関する分類・編年については、斎宮分類・編年⁽⁹⁾および平城・長岡・平安京における編年（以下、「都城編年」と呼称）⁽¹⁰⁾を参照し、部分的に今回観察した所見を交えて追加・変更している。

S H 8685出土土器（1～6） 竪穴住居のカマドおよびその周辺からまとめて出土したもので、廃棄時の同時性は、カマド支柱であった甕（5）以外は高い。土師器（1～5）・須恵器（6）がある。

1は杯G。2は脚台の付く皿で、通常の皿Bよりも外反が強く、高杯の杯部との折衷的な形態である。3・4は皿Aで、いずれも底部にヘラケズリを施す。3の内面には螺旋状の暗文が見られる。6は須恵器皿で、都城分類では皿A1に相当する。極めて丁寧な整形で、美濃須衛産と考えられる。

これらの土器類は、斎宮ではSK5102併行でI-2期にあたり、都城編年では平城Ⅲに併行する一群

と考えられる。

S D 0170出土土器（7～11） 「奈良古道」の南側溝にあたる。図示したものはいずれもL9区から出土した。7は上層、8～11は下層にあたる。

7は瓦器椀。内面に斜放射状暗文が見られる。大和型に相当し、川越俊一氏による編年⁽¹¹⁾のI段階C型式に相当する。

8は土師器で台付皿。都城分類で皿Bとされる典型的なものとは形態が異なる。内面には斜放射状暗文が見られる。外面には粗雑なヘラミガキがある。9・10は土師器甕。口縁部が外反しながら開き、端部は外側に面をなす。11は須恵器で短頸壺。都城分類の壺Aに相当する。肩部に環状の四耳を持つ。

下層の一群は、斎宮ではI-2期を中心に、I-3期までの間に相当するものであろう。

S K 8681出土土器（12・13） 遺構内からまとめて出土した。2点のみであるが、両者の廃棄時における同時性は明確である。他に、竈形土器の破片がある。

12は須恵器甕。筒状の頸部から大きく開く口縁部で、高台を有している。口縁部内面には、淡緑色の綺麗な自然釉が掛かる。13は土師器長胴甕。口縁部中ほどの器壁が厚くなり、口縁端部は外側に面をなすものである。

これらは、斎宮ではI-2～3期に相当する時期のものと考えられる。

S D 3051出土土器（14） 回転成形による土師質土器（ロクロ土師器）を1点図示した。高い輪高台の小皿と考えられる。この形態は斎宮跡を含めた南伊勢地域の遺跡ではあまり見られず、北伊勢地域で稀に見られるものである⁽¹²⁾。時期的には斎宮Ⅲ-2期頃に相当する。

S E 8688出土土器（15） 土師器小皿を1点図示した。口縁端部の外側に面をなすものである。斎宮Ⅲ-3期以降、中世I期⁽¹³⁾のものと考えられる。

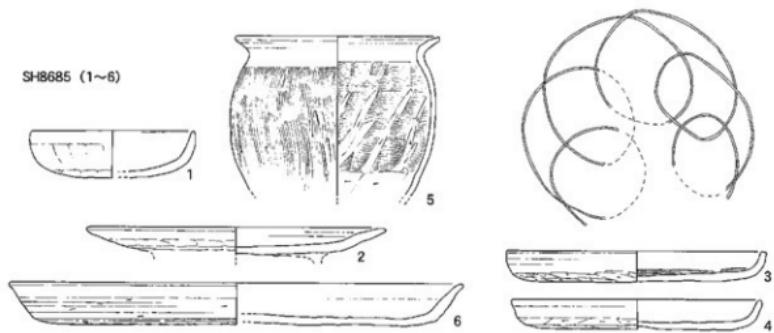
5まとめと検討

～「奈良古道」とその周辺～

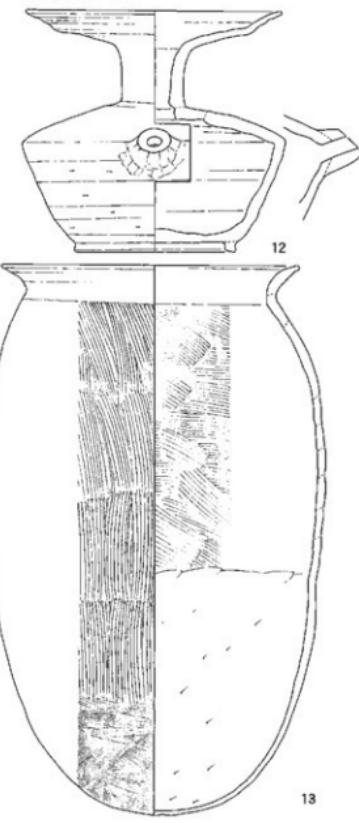
a 「奈良古道」の幅員

「奈良古道」は、SD0170とSD0295を側溝とした範囲と考えられる。両溝の心々間距離は約9.0mである。

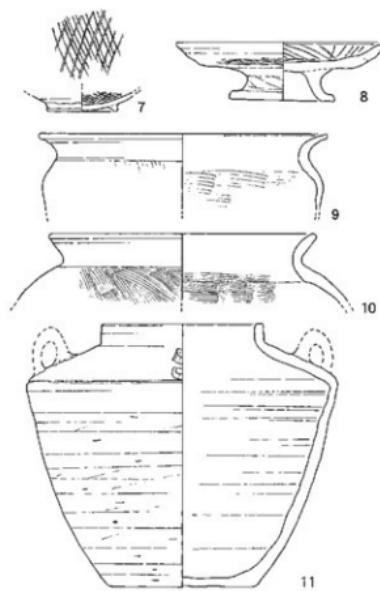
SH8685 (1~6)



SK8681 (12・13)



SD0170 (7~11)



SD3051 (14)



SE8688 (15)



0 20 cm

第IV-5図 第139次調査区 出土遺物実測図 (1:4)

「奈良古道」の南側溝は、これまでにも確認されている SD0170と考えられる。今回の調査区での SD0170は、検出面での上端幅約1m、深さ約1mである。周辺の豊穴住居跡などの遺存状況から推定される奈良時代の地表面は、ほぼ現地表面に近いと推測されることからすると、SD0170の地表面からの掘削深度は1.4mほどとなり、かなり大規模なものであるといえる。ただし、東側のL9区では1条の溝であるが、西側のJ9区では2条の重複か、あるいは南側にテラスを有したような状態となっている。これは、この溝がJ9区以西で大きく北側に屈曲することと関連を持ち、そのために数回の掘削が伴っている可能性も考えられるが、今のところ明確にはできない。

北側溝は、これまででも明確ではなかったが、今回の調査では、SD0295をそれと判断した。SD0295は、遺構埋土が締まった黒褐色系土で、SD0170の類似しているが、幅約50cm、深さ約10cmと小規模で直線形状を呈しているため、SD0170と対になる溝と断定することに若干の躊躇はある。しかし、先述した掘削当時の地表面（＝現地表面高）から見れば開削深度は40cmほどはあったと考えられる。このため、SD0295を北側溝と判断した。

なお、SD0295が確認できたのはJ9調査区のみで、L9調査区では後世の遺構によって破壊されており、確認できていない。

b 側溝規模の差

南側溝が深く、北側溝が貧弱な点については、当地の地形との関係と、道路設計基準を見ること、の2点から考える必要があろう。当地の地形は、南西から北東にかけて順次下降している。当調査地から南北それぞれ100m離れた地点の標高を見ると、北側で12.9m、南側で11.5mと、その差約1.4mある。水流は南から北に向かって流れることになるため、南側溝を深く保つことによって、道路以北への浸水を防ぐ機能を与えたものと考えることができる。

なお、今回調査を行った東西2箇所の調査区は、直線距離で約170m離れているが、溝底のレベルは東調査区の方が約5cm低い程度で、その差はほとんど無い。したがって、水の排出はあまり考慮されていないようである。東西いずれの調査区でも溝底は

段丘疊層に達しており、SD0170に入った水は、溝内部で漸次吸収されていったものと考えられる。

c 埋没時期の問題

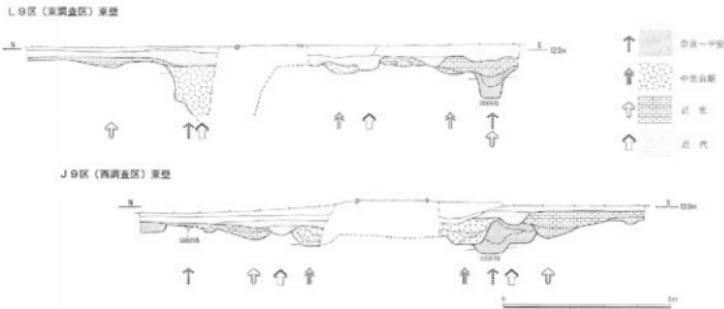
SD0170からは、斎宮I～3期、都城編年では平城Ⅲ併行期以降の土器類が出土する。出土する土器は、第7次調査区（古里E地区）のSD8736（SD0170の延長と考えられる、第V章参照）でも、完形品を含むかなりまとまった出土が見られる。また、平安期（斎宮II期）に属するであろうピットの存在からは、この時期に「道路」内へ浸食した建物の建築が見られることになる。

以上をまとめると、「8世紀の中頃にこの道は廃絶し、土器が遺棄され、建物も旧道路敷に及んだ」という表現になる。開削・機能時期は、斎宮I～3期以前の、おおよそ奈良時代前半以前と考えられる。しかし「奈良古道」は、時期によって幅員の変化はあるものの、現在まで連続と「道」として機能してきた。つまり、SD0170の埋没が道路の終焉を意味していないことは明らかである。一見矛盾するように見えるこの状況をどう解釈するのかは難しいが、SD0170は、土器などが投棄されて本来の機能が停止した後も、地割の基準ないしは側溝の無い道路として用いられ続け、それが中世前期に至り、改めて側溝が開削された、と考えておく。

なお、これまであまり重視されていないが、「奈良古道」の方向（E15°S）が飯野郡条里型地割の東西軸に一致するという点は注意するべきであろう。条里型地割の付設時期については各種の議論があり、未だ定見は無いのかも知れないが、「奈良古道」の場合は条里型地割と密接な関係を有している。一方、斎宮は多気郡にある。したがって、「奈良古道」と斎宮が関係するのであれば、「奈良古道」と多気郡条里型地割、あるいは多気郡条里型地割と斎宮とが有機的な関係を持つ可能性が高いといえる。今後の課題として提示しておきたい⁽⁹⁾。

d 「奈良古道」その後

調査区からは、「奈良古道」以後に継続する道の遺構も確認されている。第IV～6図には、遺構埋土理土から見た変遷を模式的に表現した。これを見ると、奈良・平安時代頃の幅員約9mの後、中世前期には3～4m程度にまで細くなるが、近世には再



第IV-6図 第139次調査区 時期別道路造構の変遷 (1:150) SD0170を基準とする。

度9mほどの広さとなり、近代にはまた狭くなり、現代に至っていることがわかる。つまり、古代と近世に、道路の規模が大きくなることが指摘できる。道路の維持管理は一般に為政者の関与が強い。「奈良古道」がその後の時期にどれほど重視された道であったのかは残念ながら不明であるが、国家権力が安定する古代・近世といった時期に幅員の広い道路が存在していることは注目できる。

(伊藤裕偉)

<註>

- (1) 杉谷政樹「古代官道と斎宮跡について」(『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター 1997年)
- (2) 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」(『探訪古代の道』第1巻 法藏館 1988年)
- (3) 斎宮歴史博物館『斎宮の土器・みやこの土器』(国史跡斎宮跡発掘30周年記念特別展「器は語る700年」記念シンポジウム資料 2000年) および講演記録(『斎宮歴史博物館研究紀要』10 2001年)
- (4) 都城編年については、奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』XIV (1993年) のほか、古代の土器研究会編『古代の土器I 都城の土器集成』(1992年) を参照した。
- (5) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年)
- (6) 例えば、員弁郡北勢町の上惣作遺跡や塙原遺跡がある。角正芳浩『上惣作遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 2001年)、濱邊一機『塙原遺跡』(北勢町教育委員会 2002年)

- (7) 中世の区分については、伊藤裕偉『近畿自動車道(勢和~伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊 楠ノ木遺跡(三重県埋蔵文化財センター 1991年)
- (8) このことに関しては、拙稿「斎宮寮・伊勢道・条里」(『斎宮歴史博物館研究紀要』13 2004年) も参照されたい。

遺構番号	遺構の性格	次数	遺物名	地区	グリット	時間	古宮編年	遺構の性格・道物・その他
SD 0170	道路側溝	139	SD0170	J9 L9	I・m4 c・d12	奈良 奈良～	I-3- E I-3- E	上則は 11世紀代
SD 0295	溝	139	SD0295	J9	m・n2	奈良	~ II -	遺物は小片のみ
SD 1736	溝	139	SD1736	L9	c・d10	近世以降		
SD 2214	溝	139	SD2214	J9	m・n2	近世		
SD 2215	溝	139	SD2215	J9	m・n2	近世以降		SD2214より新
SD 2216	道路側溝	139	SD2216	J9	m・n3	難倉～宝町	II - 2以降	屋下下縁に甕を含む
SD 3051	道路側溝	139	SD3051	L9	c12	中世 I	II - 2-	上縁質上層(ロクロ上脚器)、山茶碗 4型式
SK 8681	土坑	139	土坑 1	J9	m・n2	奈良	I - 2	土器良好
SD 8682	溝	139	溝 2	J9	I・m4	近世以降		
SD 8683	道路無調	139	溝 3	J9	I・m4	中世?		山茶碗 4型式～
SD 8684	溝	139	溝 4	J9	I・m4・5	近世?		SD8682より古 南伊勢系鍋 4b 合む
SH 8685	聖穴住居	139	聖穴住居 5	L9	c9	奈良	I - 4	カマド東面 上部良好
SD 8686	溝	139	溝 6	L9	c・d11	近世		遺物の発見率高めあり
SD 8687	溝	139	溝 7	L9	c・d11	奈良・平安		空堀ブロック混入
SE 8688	井戸	139	井戸 8	L9	c・d10	平安末闇	(中世 I)	平安末～鎌倉初 山茶碗 5型式
SD 8689	溝	139	溝 9	J9	m5	奈良～平安		
SD 8690	溝	139	溝 10	L9 12	c・d11・ d12	近世～		

第IV-1表 第139次調査区遺構一覧

No.	出土遺物	部位	法量(cm)	調整・技法の特徴	施主	棟成	色調	残存度	備考	登録番	
1	L9-c9 SI8685	上縁質 桿 G	11縁 縫合	13.2 内:オサエ・ナデ=ヨコナヂ 外:ナデ=ヨコナヂ	電	良	橙 7.5YR7/6	口縁 1/12		003-01	
2	L9-c9 SI8685	土壁部 高基盤 柱 B	11縁	23.8 外:オサエ・ナデ=高台貼付・ヨコナヂ 内:ナデ=ヨコナヂ(附) (ナボン)	電	良	橙 5YR6/6 - 5YR7/6	II縁 11/12	積文不鮮明脚部は低いと思定	004-02	
3	L9-c9 SI8685	上縁質 桿 A	17.4	17.4 外:オサエ・ナデ=ケヌリ・ヨコナヂ 内:ナデ=ヨコナヂ(附)	電	良	橙 5YR6/8	口縁 9/12	磁板後に様の付く焼片あり	004-03	
4	L9-c9 SI8685	上縁質 桿 A 桿 B	13.6 2.7	外:オサエ・ナデ=ケヌリ・ヨコナヂ 内:ナデ=ヨコナヂ	電	良	橙 7.5YR7/6 - 65YR6/8	口縁 2/12	剥離・摩滅強著	003-03	
5	L9-c9 SI8685	上縁質 桿 A	11縁	16.4 外:ハケメ=ヨコナヂ 内:ハケメ=ケヌリ・ヨコナヂ	電	良	浅黄褐色 10YR8/3	II縁 12/12	外縁のハケメは下方が新カマド支柱に使用	003-02	
6	L9-c9 SI8685	頭部 頭 C	36.3 3.3	外:回転ナード=回転ケヅリ(丁寧) 内:回転ナード	電	堅継	灰白 NR/0	II縁 3/12	美濃須彌	003-04	
7	L9-c12 SD0170 上則	瓦器 高台	5.7	内:ナデ=ヨコナヂ、高台貼付 外:ナデ=ヨコナヂ(附)	電	良	界面:灰 N5/0 裏面:灰 NR/0	高台 12/12	大和(伊賀)	002-04	
8	L9-c12 SD0170	上縁質 藍 B 器皿	16.8 4.6	外:オサエ・ナデ=ヨコナヂ=ミガキ 内:ナデ=ヨコナヂ=回転ナード=模範文	電	良	橙 5YR6/8	II縁 4/12 高台 9/12	内面の模範文はかすかに見えるのみ	002-01	
9	L9-c12 SD0170	上縁質 黒 A	23.0	外:ハケメ=ヨコナヂ 内:ハケメ=ヨコナヂ	電	良	橙 7.5YR6/6	II縁 2/12	外縁に模付着	002-02	
10	L9-c12 SD0170	上縁質 費 A	21.3	外:ハケメ=ヨコナヂ 内:ハケメ=ヨコナヂ	電	良	黄橙 10YR8/6	II縁 3/12		002-03	
11	L9-c12 SD0170	頭部 頭 A	11縁	外:利根ナード=回転ケヅリ・耳刃4方向 内:利根ナード	電	堅継	灰 NR/0	II縁 3/12 底 12/12	内縁部分に自然輪廻し(底をした状態で焼成)	001-01	
12	J9-m2 SK8681	頭部 頭 C	20.3 19.3 12.8	外:利根ナード=回転ケヅリ・注口付 内:利根ナード	電	堅継	灰白 2.5Y7/1	II縁 2/12 頭部 12/12 底 12/12	注口部は利根(即ち)と見て草木灰焼成(即ち)と見らる それに合わせて頭部を用意する	005-01	
13	J9-m2 SK8681	上部器 蓋 C	11縁 縫合	12.9 44.0 内:ハケメ=ヨコナヂ 内:ナデ=ヨコナヂ	粗 粗	小 多	灰 灰	2.5Y8/3 7/12	外縁に縫合部 既述のハケメは F 内縁にナデ=ヨコナヂは D 内面にナデ=ヨコナヂは E 内縁にナデ=ヨコナヂは F	006-01	
14	L9-c12 SD3051	上部器 竹筒小器	高台	8.3	外:回転ナード 内:回転ナード	電	良	橙 7.5YR7/6	高台 11/12		002-06
15	L9-c12 SE8688	土器器 小瓶	11縁 縫合	9.4 1.6 内:ハケメ=ヨコナヂ 内:ナデ=ヨコナヂ	粗	良	灰 灰	灰白 10YR7/3 6/12		002-05	

第IV-2表 第139次調査区出土遺物観察表



西調査区 (J9区) (北から)



西調査区 (J9区) (南から)



東調査区（L9区）（北から）



東調査区（L9区）（南から）



SH8685 (南から)



SH8685竈・支柱 (土師器裏) (南から)



東調査区SD8687付近（西から）



東調査区北部（南西から）



SK8681 (南西から)



裏側

2



3



5



7



6



8



12



11



13



14

V 第7次調査

(古里E地区)

1 報告の経緯

第7次調査は、1974年に「古里遺跡E地区」として調査された。調査面積は1,000m²である。周知のように、斎宮跡解明の端緒となったのが、1970年代に実施された古里地区における一連の調査で、E地区はその一部である。

第7次の調査成果については昭和49年度に小冊子で公表されている^①が、遺構図や出土遺物が公表されていなかった。平成14年度には、第137次調査で古里地区近隣を、第139次調査で「奈良古道」関連の調査を実施している。そのため、これらと関連の深い第7次調査区の概要をここで報告することとした。

2 調査方法と層位・遺構の状況

a 調査の方法

第7次調査は、4m×4mを1グリットとして調査されているため、遺構に伴わない遺物でも、グリット単位での把握ができる。ただし、第7次調査のグリット表示方法は、現行とは異なるため、遺物の照合には注意が必要である（第V-1図）。

遺構図は、調査段階では国土座標を用いた測量がされていないが、平成3年に実施した第91次調査は、第7次調査区の一部と重複する状況で調査区を設定している。今回の遺構平面図は、それを援用して座標を合わせた。ただし、第91次調査区と第7次調査区の重なりは少なく、その突き合わせについては、感覚に頼らざるを得なかった。そのため、第V-2図に示した座標表示は、近年の調査区平面図よりも精度がかなり落ちるものとして扱う必要があることを明記する。

b 遺構

(1)概略

第7次調査区で確認された遺構には、奈良期の竪穴住居・溝・井戸、平安期の溝・掘立柱建物、中世前期の溝・掘立柱建物、中世後期の溝・掘立柱建物・

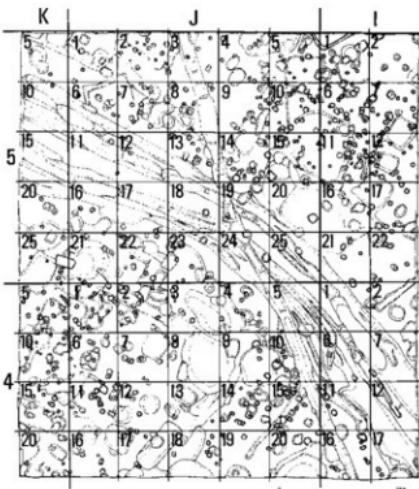
井戸・土壙墓・墓地などがある。調査区が斎宮字中垣内と古里との字塚にあたり、そこには中世の道路遺構が見られる。また、その前身と考えられる奈良～平安期の溝（SD8736）は、奈良期に設定された伊勢道（通称「奈良古道」）の南部側溝と考えられるものである。

ここでは、30年近く前の記録を基に示すこととなる。そのため、あまり推測を交えてしまうと却って混乱を招く恐れがある。そのため、主立った遺構以外は遺構一覧表でのみ示すに止めた。

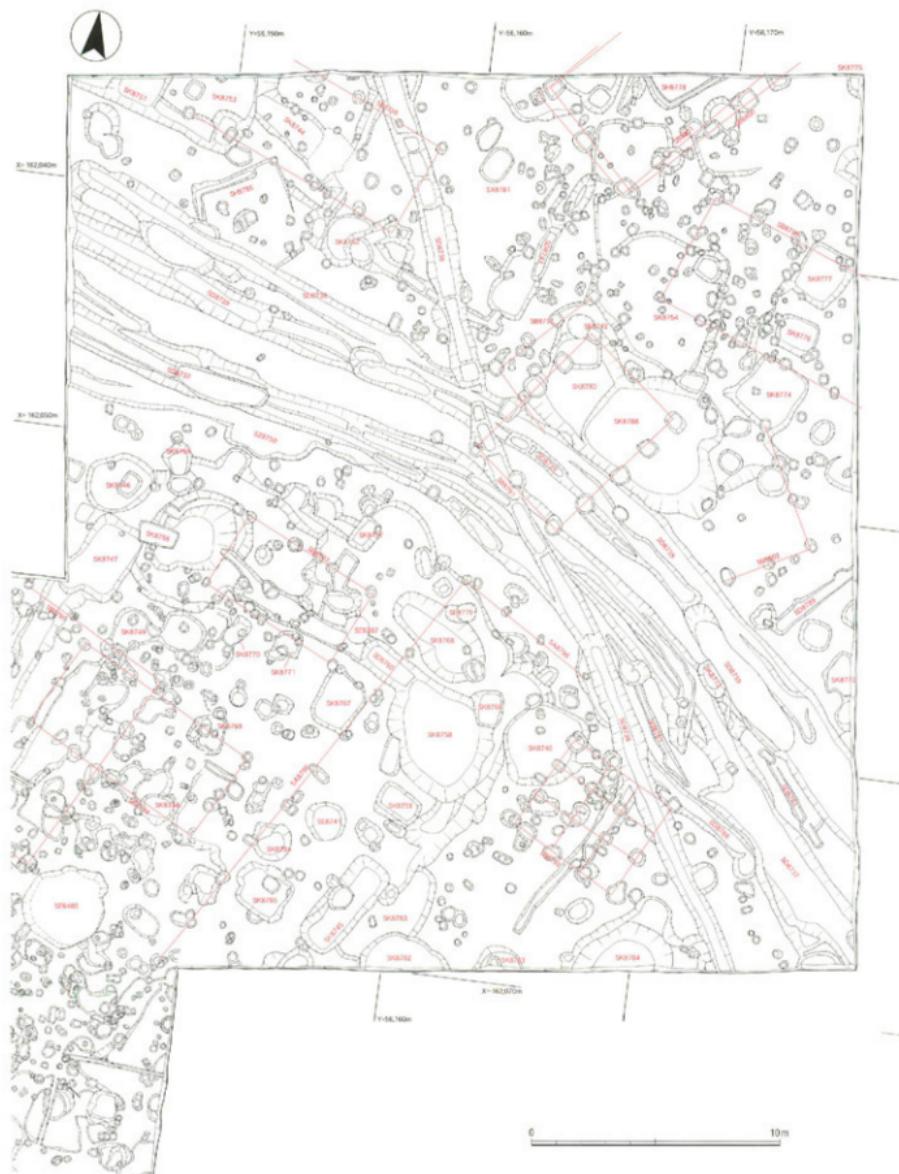
遺構として取り上げたものは、基本的には出土遺物が存在する遺構である。そのため、比較的大規模な遺構であっても、伴出する遺物が明確でない場合は遺構名を付加しなかった。

(2)建物跡

建物跡としては、竪穴住居2棟、掘立柱建物11棟、柱列1条がある。竪穴住居は、遺構の形態からそれと判断したが、出土遺物はほとんど無い。



第V-1図 第7次調査区 地区割り図 (1:400)



第V-2図 第7次調査区 平面図 (1:200) ※座標は日本測地系(旧国土座標第VI系)による

掘立柱建物は、それと判断するためには現地調査時点での観察が極めて重要であるが、今回の場合はそれを望むことができない。したがって、おおよそ次のような状況を満たす場合、柱列や掘立柱建物と認識した。

- ① 規模のほぼ等しいピットが4基（3間）以上等間隔に並ぶ場合、柱列と認識する。
- ② ①の状況が長方形ないしは正方形を形成する場合、掘立柱建物と認識する。
- ③ ①・②の要件には満たないが、同一規模のピットで列・直角を形成しているなど、それに準じると見られるもの。

なお、掘立柱建物や柱列の方位は、比較を容易にするために、東西棟の場合は 90° 分を加減し、座標北の近似値で示した。

S B 8791 調査区中央部で確認した遺構である。東西2間、南北4間の南北棟側柱建物で、建物方位はN 43° Eである。溝S D 8736よりも新しい遺構である。柱穴から出土した土器から、斎宮I-4期以降の建物と考えられる。

S B 8792 調査区南東部で確認した遺構である。東西3間、南北3間の東西棟総柱建物で、建物方位はN 29° Eである。溝S D 8736と重複するが、両者の先後関係は不明。柱穴から出土した土器には斎宮II-3期のものがあるが、周囲には多くのピットが見られるので、それ以前の建物と重複している可能性もある。

S B 8793 調査区中央西部で確認した遺構である。南北側柱列と考えられる3間分が揃っており、東西棟の側柱建物と判断した。建物方位はN 25° Eである。梁間が明確ではないが、おそらくは2間で、後世の遺構により削平されたと考えられる。ピット内からは中世後期の遺物が出土しているが、重複していたものを認識できずに掘削した可能性もある。

S A 8796 調査区中央南部で確認した柱列である。南北方向に10間分、東側に3間分がある。図上での判断になるが、柱間が一定であること、南北柱筋はそれとほぼ直交する方向に抜き取り痕跡の拡がりが見えること、などから柱列とした。南北柱筋の方位はN 32° Eである。ピット内には中世後期の土器を含むものもあるが、4J 10グリッドのピット6から

は斎宮II-2期に相当する良好な土師器杯が出土していることから、2時期の重複があると考えられる。S B 8800・8801 調査区北端部で確認した遺構である。2棟が重なっていると考えられ、S B 8800と8801に分割したが、先後関係は分からぬ。いずれも南北棟の側柱建物と考えられ、建物方位は、S B 8800がN 45° E、S B 8801がN 43° Eである。いずれの建物も、そのピット内から斎宮I期頃の土器が出土している。

(3) 井戸

第7次調査区からは5基の井戸が確認されている。このうち、S E 6480は奈良時代後半のもので、第91次調査の概要報告段階で概ね報告されている。それ以外の4基はいずれも中世後期と考えられるものである。

(4) 墓地・土壙墓

墓関係では、土壙墓が1基確認されている。また、調査区内からは一石五輪塔が出土しているので、中世後期にはこの付近に墓地が形成されていた可能性が高い。

S X 8781 調査区北部で確認した遺構である。長さ約1.5m、幅約1.1mの隅丸長方形の土坑内から、和鏡（亀甲地双雀鏡）や土師器鍋・小皿などが出土している。調査時には木製横櫛の断片と鉄釘が伴っていた。出土土器から、概ね13世紀中葉頃の土壙墓ないしは木棺墓と考えられる。

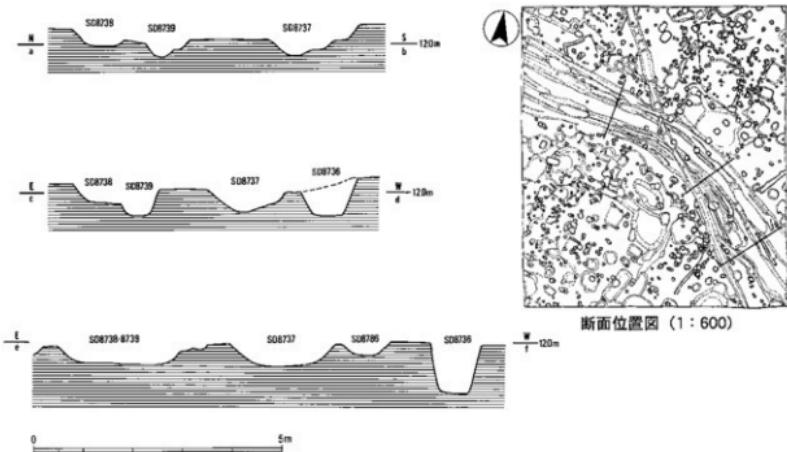
(5) 土坑など

調査区内には数多くの土坑が見られる。この多くは中世後期の遺構と考えられる。

(6) 道路側溝・道路遺構

S D 8736 調査区を南北に縦断する幅1m前後の溝である。調査区中央部でやや湾曲するものの、調査範囲内では概ね直線的である。遺構検出面からの深さは、南部で80~100cm、北部で60cm前後で、北ほど浅くなっている。溝底の標高も、南部では10.9~11.2m、北端では11.8mほどである。溝底は部分的に深く掘られている。埋土中からは、奈良~平安前期の遺物が出土している。

S D 8737~8739 調査区南東から北西にかけて湾曲しながら延びる溝である。大字竹川字中垣内と大字斎宮字古里の字塙にあたる。遺構は、溝間が周囲よ



第V-3図 第7次調査区 道路遺構断面図 (1:100)

よりも20cmほど低くなってしまっており、ここが路面に相当し、外側の溝が道路側溝に相当すると考えられる(第V-3図)。路面には砂礫が厚く堆積していたようである。道路側溝埋土中からの出土遺物は、SD8738は鎌倉期、SD8737・8739は室町・戦国期の土器類が出土している。したがって、この道路側溝は中世前期から後期にかけて断続的に掘削されたものと考えられる。道路面そのものは近代でも使用されているため、上記の土器類が示す時期とは、側溝が機能していた時期や、この道路周辺に集落が存在していた時期を示していると考えられる。

3 出土遺物

第7次調査区からの出土遺物は、整理箱に換算して約76箱である。内訳は大部分が土器類で、五輪塔・石臼・砥石などの石製品、少量の金属製品がある。

遺物実測図は1974~1975年頃に多くが作成されていた。今回の再整理にあたり、いくつかの図面を追加するとともに、既成図面の手直しを行った。なお、SE6480出土土器は平成3年度に調査した第91次調査で報告している^⑩ので、今回は除外する。

a 古代の土器類

古代の土器に関する分類と年代観については、斎宮分類・編年^⑪を基礎に、平城・長岡・平安京にお

ける編年(以下、「都城編年」と呼称)^⑫を参照し、部分的に観察所見を交えて追加・変更している^⑬。

SD8736下層出土土器(1~9) 調査段階で、「下層」あるいは「最下層」と記載されていた物を、ここではSD8736下層遺物として報告する。土師器・須恵器がある。実測図掲載遺物以外にも土師器類が多く、この遺構出土土器の特徴といえる。

1は土師器杯で、都城分類杯Cに相当する。体部外面全体がヘラケズリで調整を終えている(外面C手法)。形態的には平城VIすなわち長岡京期のものに近い。ただし、1以外の土器との年代差が大きいので、この土器は後述の上層が一部掘り残されていた中に含まれていた可能性も考慮しなければならない。2・3は須恵器で、2は杯B蓋、3は杯Aである。4~7は土師器甕。4は小形のもので、口縁中央部の器壁が肉厚となるもの。6・7は大形の丸底甕である。4・6・7はいずれも体部内面下半をヘラケズリ、体部外面下半をハケメとするもので、斎宮ではI~2~3段階によく見られる手法である。5は長胴甕であるが、体部が直胴で頸部のあまり締まらない形態となっている。斎宮跡では珍しい形態といえるが、調整手法は通常のものと基本的に共通する。8・9は甕で、同一個体の可能性が高い。内外面とともに体部上半をハケメ、下半をヘラケズリし

ている。9の底部は一文字にケズリ残す。これらの土器類は、1を除き、斎宮編年では概ねI-2ないしは3(古)に相当する。1は都城編年の長岡京期でよく見られる手法である。

S D 8736上層出土土器(10~34) 調査段階で、「上層」と記載されていた物を、ここではS D 8736上層遺物として報告する。土師器・須恵器があり、とくに土師器杯・皿類の出土が多い。

10~17は土師器杯Gであるが、古墳時代以来の系統にあるもの(杯G I ; 10~12)と、律令期の杯Aないしは杯Cの形態的影響をやや受けたと考えられるもの(杯G II 1 ; 13~15)がある。いずれも、外面底部をオサエ・ナデ、口縁部にヨコナデを施すものである。16・17は、手法的には杯G 2に拠るもので、形態的には杯Aの影響を強く受けたものと考えられる(杯G II 2)。18~21は杯Cないしは杯Aと融合した杯Cである。20・21は外面調整C手法で、ヨコナデ後にヘラケズリが施されている。

22~24は土師器杯A。平安期のものである。外反する口縁部で、口縁端部は断面方頭状ないしは内側に若干突出する形態である。25・26は土師器杯B。いずれも剥落が著しいが、26は外面にヘラミガキが遺存する。27~30は土師器皿A。30は内面に3単位の渦巻状暗文を三角形状に配置している。31は土師器で高杯脚部。外面をヘラケズリにより面取りする。32・33は須恵器杯B蓋と杯B。34は土師器平底鉢で、平安期のものである。35は土師器盤A。口縁部内面には素地接合部にヨコナデを施すことにより発生した凹線状の段がある。36は須恵器長頸壺の体部。37は須恵器壺である。

上層土器群は、比較的の時期幅が広い。10~21・25~30・35の遺物は、都城編年の長岡京期ないしはその直前に比定でき、斎宮II-3~4にあたる。22~24・34は、斎宮編年ではII-2~3に相当する。

S D 8736出土土器(10~34) 調査段階で、「上層・下層」の記載がされていない物をここにまとめた。

38~40は土師器杯G Iで、41は杯G II 2。38の口縁部には油煙痕が見られる。42~45は土師器杯Cないしはその影響を受けたもの。42は外面C手法、内面には螺旋状暗文を上下3段に施す。46は杯A。47も杯Aで、これは平安期のもの。48~51は土師器皿

Aで、51は平安期のものである。52・53は土師器高杯の脚部である。54は土師質で、土師器の形態をなす須恵器と考えられる。

55~60は土師器甕。口縁端部の外側に面を持つものを中心とする。60は口縁端部が内傾し、他よりも新しい要素を持つ。59は体部が開かず、底が平底となるもので、鉢に近い。61は土師器鍋、62は土師器把手付鍋である。63は須恵器壺で、口縁部には明確に開かない面とヨコナデによる凹線がめぐる。

これらの土器群は、概ね長岡宮期以前の特徴を備えているが、47・51・60などは、斎宮II-2に相当するものである。

S K 8740出土土器(64~78) 64は杯G I。口縁部がやや肥厚し、丸く納められる。65~68は杯A 1。いずれもヨコナデにより口縁部が外反し、口縁端部を摘み上げるもので、手法的にも共通する。69・70も杯A 1だが、杯底部が丸く、65~67よりも新しい要素を持つ。71は杯A 2。72は皿A。73は高杯の杯部と考えられる。74は皿A 1。75~77は土師器甕。口縁部がわずかに内窓し、口縁端部に内傾する面をもつ。75の体部外面下半には、横方向の帯状ヘラケズリが見られる。77は長胴形をなすもの。78は須恵器皿Aで、美濃須衛産と考えられる。

これらの土器は、概ね斎宮II-1(新)に相当するが、69~71はII-2に相当する可能性が高い。なお、65・72・73には同一のヘラ記号が見られる。

S K 8782出土土器(79~87) 79~84は土師器。79は杯G II 1。底面以上にヨコナデがある。80・81は杯A、82はやや大形の杯Aである。83は杯Cで、外面にヘラミガキが見られる。84は皿A。

85~87は須恵器。85は杯B蓋、86は皿B、87は深手の杯Bで、いずれも美濃須衛産と考えられる。

これらの土器は、概ね斎宮II-1に相当する。なお、79・80・82~84には、S K 8740と同様のヘラ記号が見られる。

S K 8783出土土器(88~90) 図示したのは、いずれも土師器である。88は杯G II。79は高杯と考えられる。90は甕。88には、S K 8740・8782と同様のヘラ記号が見られる。時期的には斎宮II-1に相当すると考えられる。

S K 8758出土土器(91・92) 91は土師器杯G I、

92は須恵器杯Aである。斎宮II-1前後であろう。

S K8775出土土器(93) 土師器杯G II 1を図示した。

斎宮I後半～II前半頃のものであろう。

S K8777出土土器(94) 須恵器長頸壺である。斎宮I後半頃のものであろう。

S K8768出土土器(95) 土師器杯Aである。斎宮II-4頃のものであろう。

S A8796出土土器(96) 96は、4 J 10グリットのピット6から出土した。土師器杯A 1である。口縁部が外反するもので、斎宮II-2頃のものであろう。S B8792出土土器(97) 97は、4 J 14グリットのピット1から出土した。土師器で、杯Bの高台が欠如したような形態である。斎宮分類では「椀A」としているが、系譜上は杯A 2にあると考えられるので、ここでは杯A 2とする。内面に粗雑な斜放射暗文を持つ。斎宮II-3頃のものであろう。

その他のピット出土土器(98～101) 建物としてはまとまらなかったピット出土の土器である。98は4 J 10グリットp i t 2出土の器皿G IIで、斎宮I期のものと考えられる。99は4 J 7グリットp i t 3出土の土師器杯A 2で、斎宮II-3頃のものであろう。100は4 J 3グリットp i t 1出土の土師器皿Aで、外面にはヘラケズギが見られる。斎宮I-3頃のものであろう。101は4 J 13グリットp i t 2出土の縁釉陶器椀で、洛北産と考えられるものである。

遺構外出土土器(102～136) 遺構に伴わない遺物をここに集めた。102～117は土師器の椀・杯・皿類で、斎宮I-3～II-2頃までのものが見られる。111は大形の杯Aで、斎宮跡では出土例が少ない。形態的には飛鳥III頃にまで遡るものかも知れない。120～122は須恵器の蓋で、斎宮ではI-1、都城では、飛鳥IV～平城I頃に併行するものであろう。

124は縁釉陶器で、猿投産と考えられる。125は陶器椀で、斎宮III-2に相当するもの。第133次調査のS E8391から多くの出土がある。126は土師器の香炉ないしは風炉と考えられるもの。2箇所の方形透かし孔が穿たれている。

b 中世の土器類

ここで言う中世とは、斎宮III-2期より後の段階に相当する。中世の時期区分にあたっては、これま

で試案を示している4期区分¹⁰とする。

S D8738出土土器(137～140) 137は土師器皿。口縁部外側に面を持つもの。138～140は東海系無釉陶器の椀(以下、「山茶椀」を「陶器椀」、「山皿」を「陶器小皿」と呼称)。138・139は渥美産、140は知多・猿投産のものである。藤澤良祐氏による山茶椀編年(以下、「藤澤山茶椀編年」と呼称)¹¹の第4～6型式にあたる。

以上の土器類は、中世I b～II a期に相当する。

S D8739出土土器(141～153) 141～143は土師器皿類。南伊勢系¹²のものである。144は常滑産陶器壺で、肩部にヘラ記号がある。145は知多半島産と考えられる陶器練鉢で、これは混入の可能性が高い。

146～153は南伊勢系の煮沸具。146は茶釜形。内傾する口縁部で、底部は平底をなす。147は鍋部の短い羽釜(以下、「短鰐羽釜」と呼称)。口縁部が方頭状になる。148～152は鍋で、148～150は小形の鍋A、151は中形で鍋B 1、152は大形で鍋B 2である。南伊勢系の鍋としては、第3段階a～bのものが見られる。153は大形の羽釜である。

これらは、概ね中世III a期を中心としている。

S D8737出土土器(154～163) 154は渥美産の陶器椀。「上」らしき墨書きが底部に見られる。他の土器類との関係から、この個体は混入と考えられる。155は土師器でミニチュア鍋と考えられる。中世II～III期に稀に見られる。156・157は瀬戸產陶器で、縁釉小皿。156は褐色の釉、157は淡緑色の釉が口縁部付近に施される。いずれも古瀬戸後IV期新¹³に相当すると考えられる。158は灰釉陶器の瓶で、猿投産と考えられる。斎宮III期ないしは中世I期に相当するもので、混入と考えられる。

159は土師器の椀。外面にハケメを持つ粗製の椀で、南伊勢系とは別系統の土器。旧多気郡域で集中的に見られるが、どの遺跡からも出土量はそれほど多くないものである。160は南伊勢系の椀と考えられるもの。鍋では第4段階併行期のものと考えられるが、類例が無い。161～163は南伊勢系の煮沸具。161・162はいずれも鍋B 1で、161は第3段階a、162は第4段階bにあたる。163は羽釜で、中世III期に相当する。

以上の土器群は、概ね中世III b～IV a期に相当す

るものである。

S D 8737南部一括出土土器(164～173) S D 8737の調査区南部から出土したもので、「4 I 11一括」と注記されている一群である。

164・165は南伊勢系の土師器皿で、C系統の小皿である。166～173は同じく南伊勢系の煮沸具。166は茶釜。167は体部がやや膨らむ鍋で、この時期のものとしては珍しい。雲出島貢遺跡(津市)に類例がある⁽²⁰⁾。168～172は、体部が半球形を呈する鍋C。168は体部中央屈曲部付近にまでヘラケズリの及ぶもの。172は口縁部径が大きいもので、鍋Cとしては珍しい。173は鍋B 2で、第4段階dに相当するが、焙烙形に近くなっている。

これらは、中世IV c期に相当する一群である。

S K 8745出土土器(174) 174は灰釉陶器楕で、斎宮Ⅲ-2～中世I a期頃のもの。出土遺物には中世IV期のものが多く、この資料は混入と考えられる。

S K 8757出土土器(175) 染付椀を1点図示した。中国明代のもので、内面見込みに菊花文?、体部外面には草の文様が見える。高台疊付部はのみ無釉で、他は前面に施釉されている。染付は暗緑色を呈する。

S K 8758出土土器(176) 南伊勢系の短鉄羽釜である。口縁部は内面にわずかに折り返す。素地粘土の状況から、南伊勢系鍋第3段階b(中世Ⅲ b期)に併行するものと考えられる。

S K 8770出土土器(177) 常滑産練鉢である。赤羽一郎・中野晴久氏による常滑焼編年⁽²¹⁾の10型式に相当し、伊勢では中世IV a期によく見られる。

S K 8780出土土器(178・179) 178は土師器で茶釜の蓋。南伊勢系のものである。179は青磁皿。内面には菊花文?がスタンプ押印で表現されている。中世IV c期頃のものであろう。

S K 8767出土土器(180・181) 180は瀬戸美濃産陶器で擂鉢の口縁部。大窯2後半頃⁽²²⁾のもので、中世IV c期頃にあたる。181は古瀬戸後IV期古に相当する尊式花瓶。

S X 8781出土土器(182) 南伊勢系A系統の土師器小皿である。中世II b期のもの。

S E 8779出土土器(183) 南伊勢系の土師器椀。中世IV b～c期頃に見られるものである。

S K 8777出土土器(184～186) 184は南伊勢系B系統の土師器小皿⁽²³⁾。185は瀬戸美濃産陶器の稜皿で、大窯2後半のもの。全面に褐色の施釉が見られる。186は南伊勢系の土師器茶釜である。全体として、中世IV c期に相当する。

S K 8776出土土器(187) 瀬戸美濃産陶器の壺である。大窯1～2期頃のものであろう。

S K 8784出土土器(188) 瀬戸美濃産陶器の擂鉢で、大窯2前半期のものである。

S E 8741出土土器(189・190) 189は土師器の羽釜。小片のため、口径および傾きに不安が残るが、概ねこの状態と考えた。鉄部が短く、尾張地域で言われる「鉄付鍋」に類似した。素地の状況は南伊勢系と見てよい。類例が今のところ無い。190は南伊勢系の鍋で、第4段階dに相当する。概ね中世IV b期と考えられる。

ピット出土土器(191～196) それぞれ別のピットから出土したもの。191は知多・猿投産の陶器楕で、藤澤山茶碗編年の第6型式にあたる。192は南伊勢系B系統の土師器小皿で、中世IV b～c期にあたる。193は南伊勢系の把手付丸鍋で、把手と垂直の位置関係となる口縁部に片口が付く。中世IV b期頃のものである。194は瀬戸美濃産陶器の天目茶碗で、大窯2後半～3前半のもの。195も瀬戸美濃産陶器の丸碗で、外面には青磁碗模倣の蓮弁が表現されている。大窯1期のもの。196は南伊勢系の鍋Cで、中世IV a期のものであろう。

遺構外出土土器(197～221) 遺構外から出土したもののうち、主立ったものをここに図示した。

197～202は陶器椀類。藤澤山茶碗編年の第5・6型式が中心である。この他に、第7型式になるものも若干存在する。203は南伊勢系の土師器鍋で、第1段階aにあたる。なお、図示していないが、南伊勢系の鍋は第2段階のものも少なからず認められる。

204は磁器小皿で染付。中国明代のもので、高台部分はいわゆる基筒底である。高台疊付部分の釉は搔き取られている。内面には羯磨文、外面には牡丹唐草文が見られる。概ね15世紀後半以降に位置づけられる。205～207は瀬戸美濃産陶器。205は稜皿で、大窯2前半に相当する。206は水滴で、大窯1期前後か。207は天目茶碗で、大窯1後半頃のものである。

ろう。

208～221は南伊勢系の土師器類。中世IV b期を中心としたものである。208はC系統小皿。209は小形の椀で、内面にはハケメが残る。210～213は茶釜の蓋、214は茶釜である。215は把手丸鍋で、口縁部が内側に強く折り返されている。このような形態は類例がない。216は器種不明で、内側に焼成前の円孔を数個穿っているようなので、蒸器の底板のようにして使うものかも知れない。217～219は鍋で、217は小形（鍋A）、218は鍋C、219は鍋B 1にあたる。220は短鈎羽釜で、素地の状況から、鍋第4段階に併行するものと考えられる。221は壺で、生産地と目される旧有爾郷近隣で集中的に見られるものである。

c その他の遺物

埴輪 (222～224) 遺構に伴わないが、埴輪が数点出土している。222・223は円筒埴輪。222は、タテハケの後に、継続するB種ヨコハケを施す。細片のため、どの程度の工具幅で突帯間を充填しているのかは不明である。223は基底部で、外面はタテハケのみ、内面はナデ上げで調整している。

224は家形埴輪の隔壁と考えられる破片。床相当部分に突帯を巡らせている。なわ、形象埴輪は、ここに図示したもの以外にも、家形埴輪かと思われる破片が見られる。

これらの埴輪は、近隣に存在する塚山古墳群に用いられていたものと考えられるが、具体的にどの古墳に相当するのかまでは分からない。

砥石 (225) SD 8736から出土した泥岩製の仕上砥である。木口部分に原材（母岩）からの切り出し痕が残る。研磨面は、木口を除く4面である。

石臼 (226) 直径約28cmの、粉挽き臼の上臼である。白面は六分画で、「切線主溝型」にあたる¹¹⁰。芯棒孔が貫通しているのは、上臼の厚みが通常よりも薄いことから、かなり使い込まれたため、芯棒孔も貫通させざるを得なかつたものと考えられる。原材は、緑色の火成岩である。

五輪塔 (227・228) 調査区内北部を中心に、五輪塔が数点確認されている。第7次調査区での出土部位とその個数を第V-1表にまとめた。

図示した2点を含め、確認出来たのは、全て一石

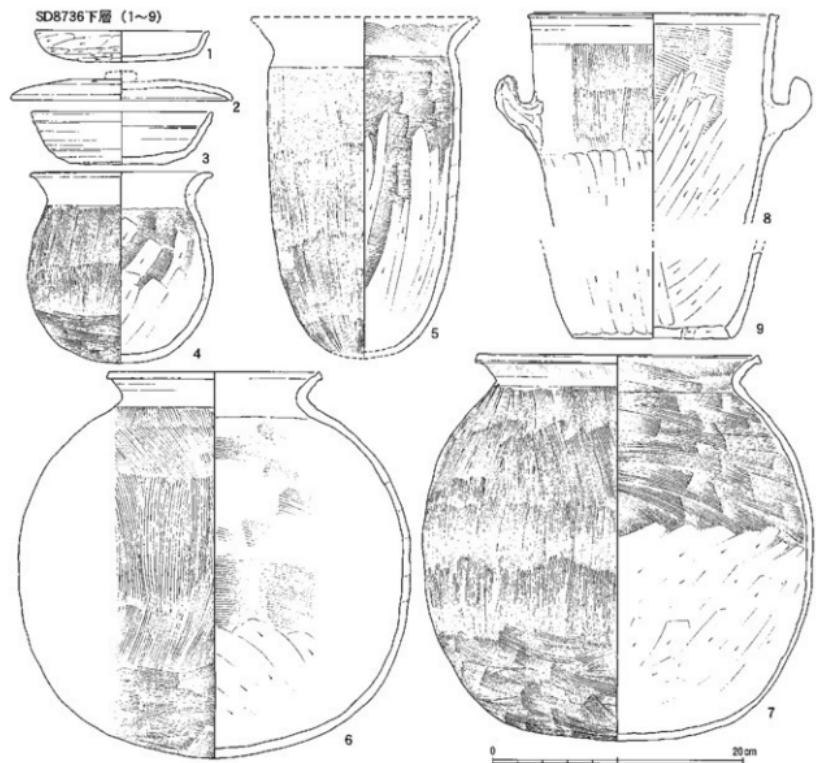
五輪塔である。227は空風輪の残欠で、比較的本来の姿を止めている。228はほぼ完全な一石五輪塔であるが、空風輪が異様に大きさと比べて火輪が小さく、かなり抽象的で省略化された感じである。228の火輪下面が少し反り気味であることから、15世紀末～16世紀前半頃のものと考えられる。

五輪塔は、図示したものを含め、全て脆弱な砂岩製である。原材の質は、近隣では一志郡一志町井関で産出する井関石に近い。ただし、このような脆弱な砂岩は、地質的には中央構造線の北部一帯で産出されるとされており、生産地の限定は難しい。

和鏡 (229) 土壙墓S X8781から出土した。直径11.1cmの亀甲地双雀鏡である。縁は直角式の中縁で、高さ0.75cmである。外縁の中央がやや膨らむ。界縁は中線単圈であるが、界縁を挟んだ内外に細い圓線がめぐり、その間は界縁に直交する細かな直線で埋めている。紐座は菊座の中隆紐である。亀甲文をあしらった地模様で、紐座の下方や右寄りに二羽の雀が表現されている。鎌倉時代頃のものと考えられ、共伴する土器（第V-10図182）も中世II b期に相当するため、時期的にも一致する¹¹¹。

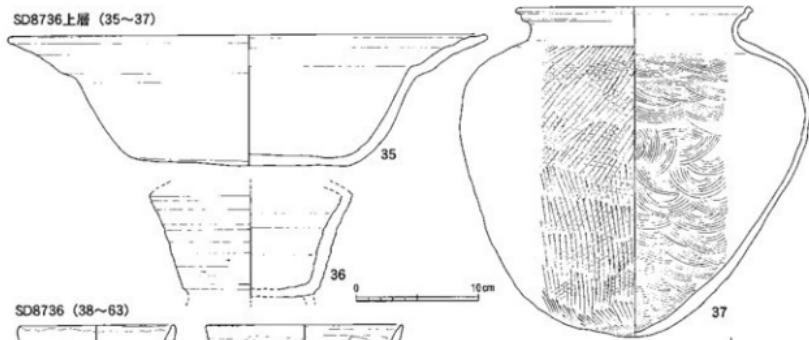
部位	個数	備考
空	7	
空風	4	第V-11図 227
風	3	
火	4	
火水	6	
水	1	
水地	1	
火水地	3	
空風火水地	1	第V-11図 228
残片	46	
点数	76	

第V-1表 第7次調査区出土五輪塔一覧

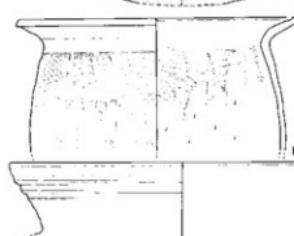
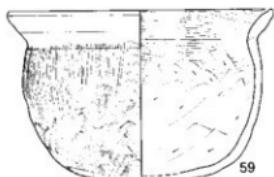
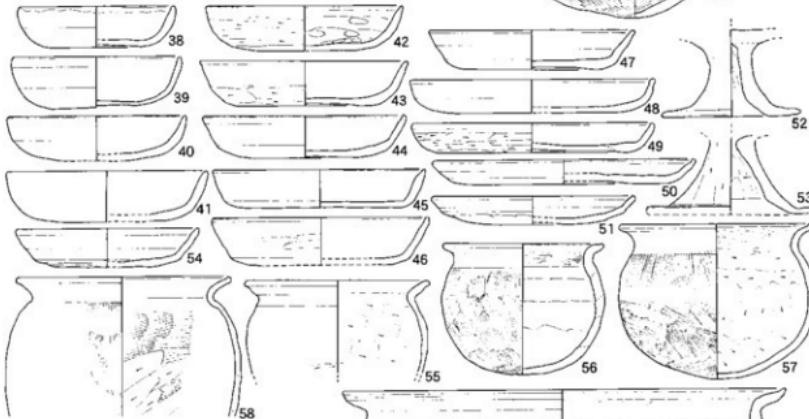


第V-4図 第7次調査区 出土遺物実測図(1) (1:4)

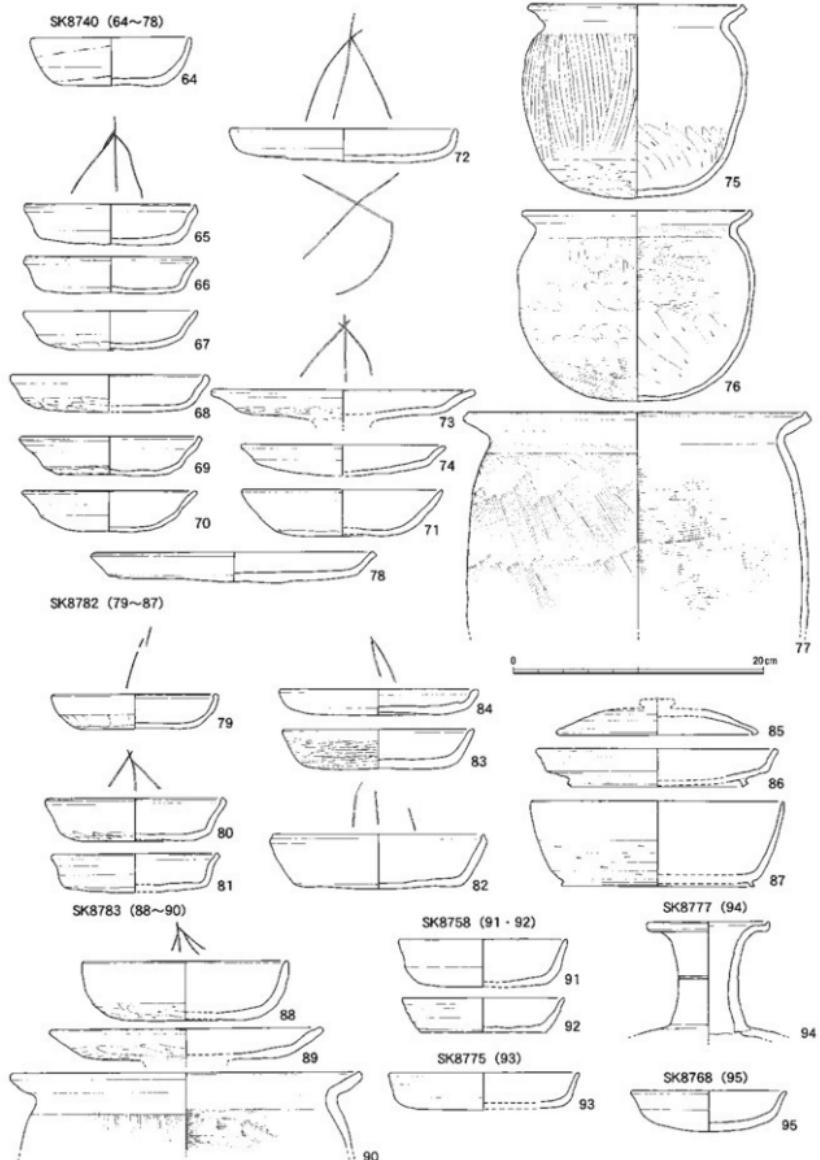
SD8736上層(35~37)



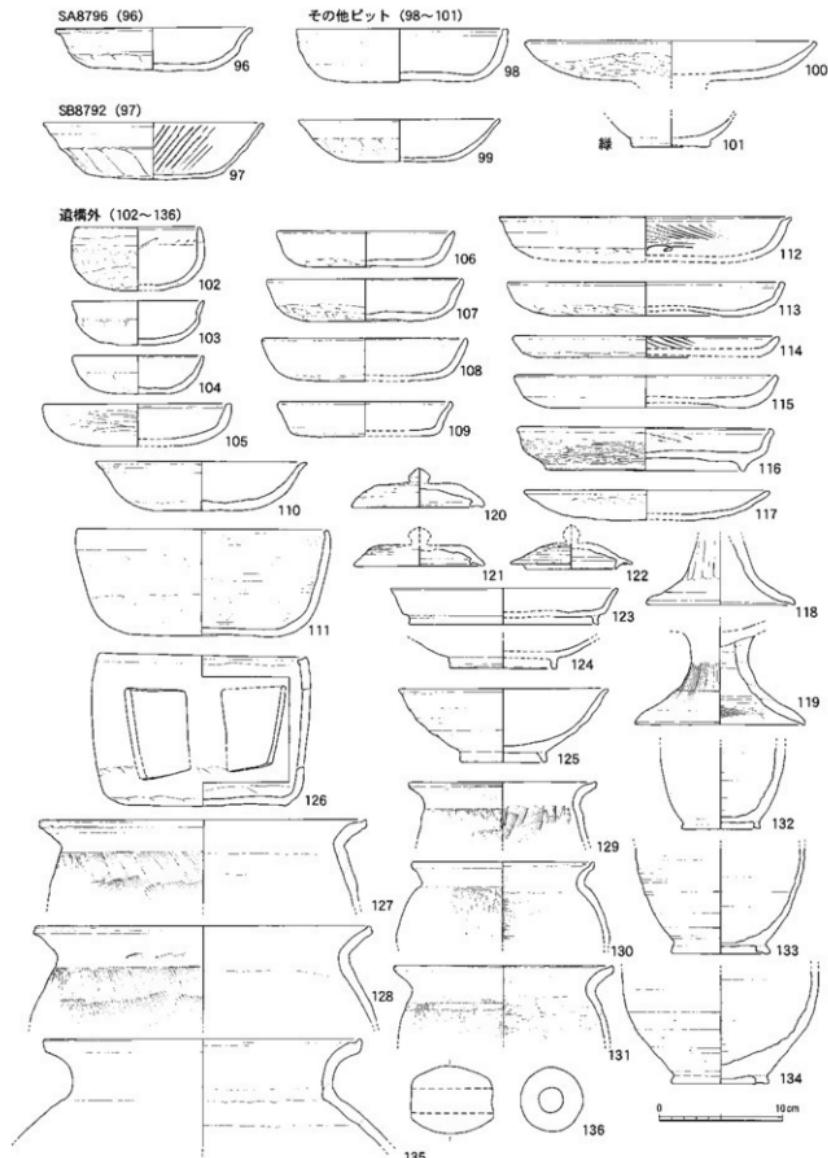
SD8736 (38~63)



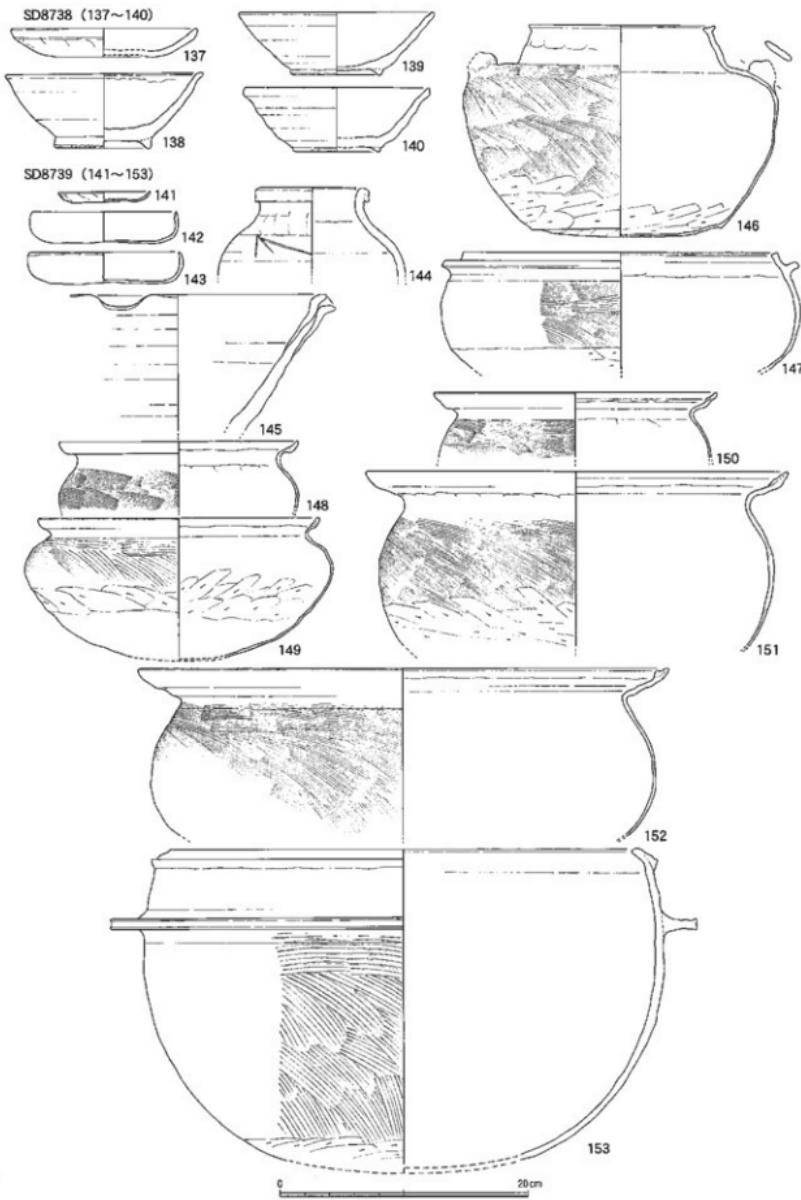
第V-5図 第7次調査区 出土遺物実測図(2) (1:4)



第V-6図 第7次調査区 出土遺物実測図(3) (1:4)

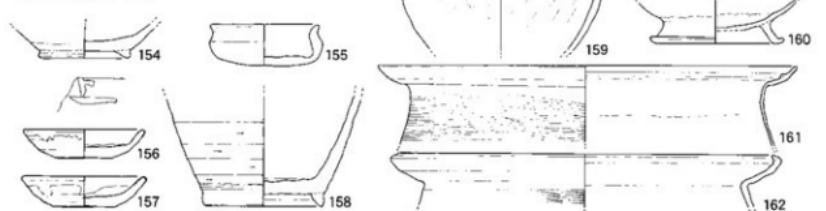


第V-7図 第7次調査区 出土遺物実測図(4) (1:4)

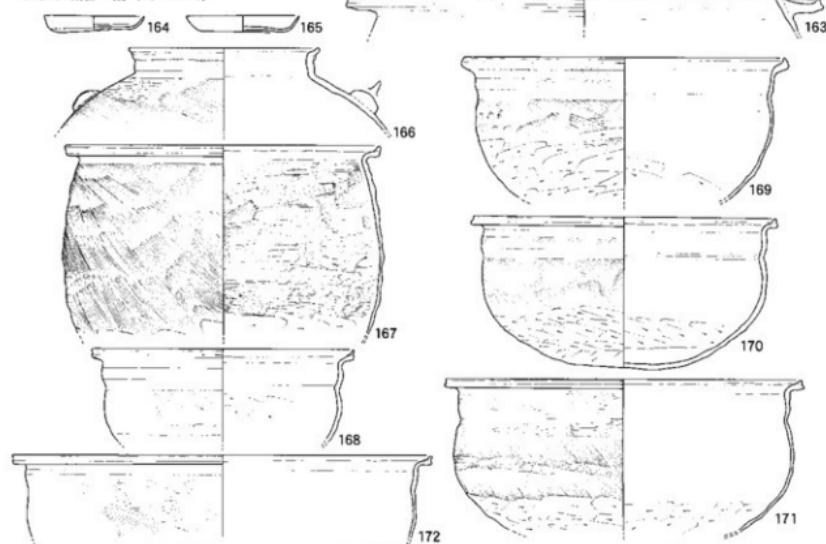


第V-8図 第7次調査区 出土遺物実測図(5) (1:4)

SD8737 (154~163)



SD8737南部一括 (164~173)



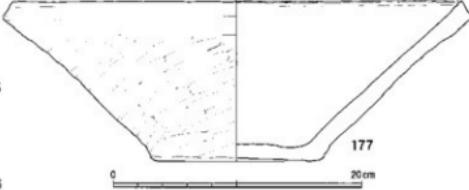
SK8745 (174)



SK8757 (175)



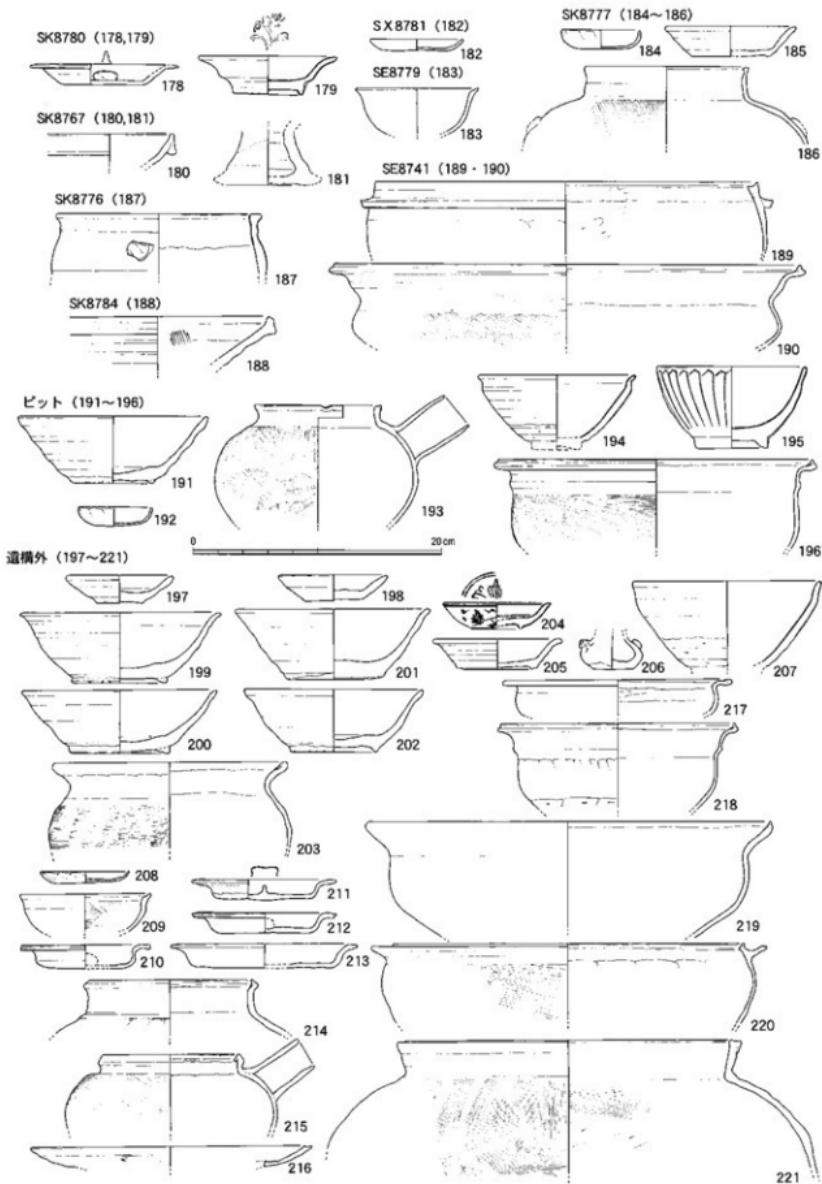
SK8770 (177)



SK8758 (176)

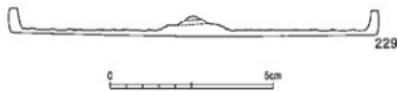
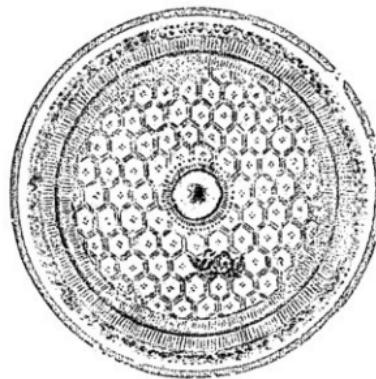
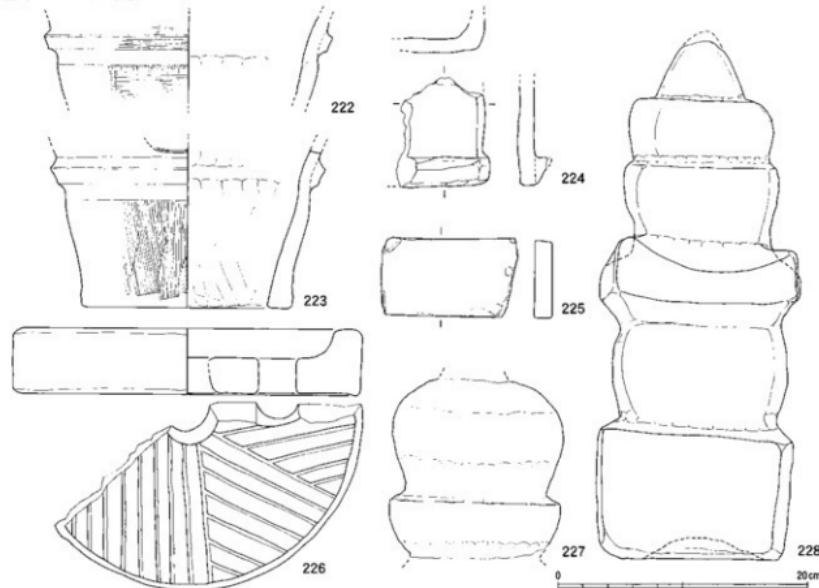


第V-9図 第7次調査区 出土遺物実測図(6) (1:4)



第V-10図 第7次調査区 出土遺物実測図(7) (1:4)

埴輪(222~224)、石製品(225~228)、鏡(229)



第V-11図 第7次調査区 出土遺物実測図(8) (229は2:3、他は1:4)

4 まとめと検討

ここでは、第7次調査区の整理作業を進めるなかで明らかになったことや、改めて見出された検討課題を触れ、まとめとする。

a SD8736と「奈良古道」の問題

「奈良古道」側溝 調査区を斜めに横切るSD8736は、本書でも概要を記した第139次調査区からつながる、通称「奈良古道」の南側溝と考えられる。SD8736については、第91次調査の時点で「奈良古道」の側溝とされたが、SD8737～8739といった中世の道路遺構（以下、「中世古道」と呼称）をそれとする見解もある。そのため、SD8736の特徴を改めて見ておく。

- ① SD8736は、幅約1m、深さ1m前後の逆台形を呈している。この形態は、第139次調査などで確認した溝SD0170の形態とほぼ符合する。
- ② SD8736からの出土遺物は、古いものは斎宮I～2期～3期頃のものを中心としている。この状況も、SD0170と類似する。
- ③ 第3次調査区（古里B地区）の溝と一連となり、同じく道路遺構とされる溝に接続している。

以上から、SD8736はSD0170と連続する遺構と見るのが妥当であり、中世古道を奈良時代まで遡らせる必要はないと考えられる。

出土土器の問題 出土遺物の章で見たように、SD8736からは奈良～平安時代の土器類が出土している。編年上は、都城編年では平城Ⅲ～長岡宮併行期、斎宮編年ではI～II～II～2期に相当するものが見られた。出土位置や層位的な問題が現状では明確にできないが、出土土器の状況からは、この溝は8世紀中葉以前に掘削されたが、その後から土器の投棄が開始され、9世紀中葉頃にはほぼ埋没すると想定できる。

なお、第7次調査区と、前章第139次の調査成果を比較すると、同じ「奈良古道」側溝であっても、出土土器が示す時期幅が調査地点ごとで微妙に異なる。これは、「奈良古道」側溝の機能時期がまちまちなのではなく、廃棄された溝状遺構が完全に埋没する時期に微妙な差があることを示していると考える。いずれにしても、都城編年の平城Ⅲ併行期、斎

宮編年のI～2期以降に土器が投棄されていることは、この溝設置時点に目された機能が、短期間で途絶していることを意味する。

b 中世集落としての古里地区

中世古道 第7次調査区からは、第V～3図で示したように中世の古道が確認されている。中世古道の位置は、巨視的に見れば「奈良古道」に沿っているが、第7次調査区では、「奈良古道」ほど大きく北へ迂回することなく接続している。つまり中世古道は、古代に設定された地割を概ね踏襲するものの、その段階における利用状況に応じた改変を行ったものといえる。

中世古道は、当地の区画が改変される1970年頃まで道として機能し続けている。出土遺物を見る限り、13世紀前半頃と16世紀初頭頃の2時期に側溝の掘削を伴った改修を行うものの、現代も含めたそれ以外の時期では、大幅な改良事業の無いまま存続していると考えられる。道路側溝が掘削される時期では、その路面は2m前後に保たれており、概ね1間幅（約1.8m）を目指したものと想定される。路面は、遺構検出面を見ても周囲より30cm以上ほど低い。当時の地表面は現在の状況とそれほど変わらないと想定すれば、周囲よりも60cmほどは低くなっていたものと考えられる。これは、道路自身が「溝」状を呈していることを示しており、道路面が全体として排水溝としての機能を果たしていたと考えられる。なお、側溝の改修が無い時期にも、以上のような機能は想定できる。

集落 掘立柱建物がまとまらないものの、井戸・廃棄土坑の存在から見て、中世古道の両側に集落が形成されていたものと考えられる。出土遺物は12世紀後半頃から16世紀中葉頃までのものが見られるが、より濃く見られる時期は13世紀前半と15世紀後葉～16世紀前半にかけてである。これは、先述の中世古道の道路側溝が掘削される時期とも符合する。つまり、道路側溝は集落の存在と密接な関係があるといえる。

中世墓 SX8781からは和鏡が出土しており、13世紀中葉頃の土壙墓（木棺墓か？）と考えられる。また、調査区の北部を中心に五輪塔が出土している。五輪塔は出土状況が分からず、あまり明確にはし難

いが、この近隣に中世後期の墓地があったと想定できる。中世前期の土塙墓は、今回報告の第137次調査区のように、古里地区近隣でもいくつか確認されているが、これらは散在している。それに対し石塔を持つ墓地は、おそらくは群として存在していると考えられる。今のところ中世後期の墓地とその範囲を明確にできないものの、中世前期から後期に至る墓域の変遷をたどるうえでも、古里地区は興味深い資料を内包していると考えられる。

出土土器類 土師器類は、南伊勢系のものではほぼ占められているが、いくつか特徴的なものも存在する。147・220は、鉢の短い羽釜（以下、「短鉢羽釜」と呼称）で、素地の状況や調整手法からは南伊勢系の範疇で把握できるが、南伊勢地域ではこれまであまり出土例が無い。南伊勢系土師器生産の中心は有爾郷（現在の明和町有尔中・本郷付近）と考えられ、斎宮近隣はその主要な供給地である。今回の整理で当該土器が2個体以上確認できたことは、当該土器が南伊勢系土師器に含まれることを示す明確な材料といえる⁽¹⁰⁾。

貿易陶磁器類では、175・204の明代染付皿（青花）が注目できる。いずれも15世紀後半以降のものである。それほどの優品ではないが、史跡斎宮跡地内としては初めての報告例となる。

中世斎宮の解明 斎宮跡では、調査の中心が古代であったため、中世以降の遺構・遺物には、これまであまり関心を払ってこなかった。しかし、中世前期については、まぎりなりにも魔王制度は残存するのであり、その存在は軽視できない。古代における斎宮の位置づけを相対化するためにも、今後は中世以降の遺構・遺物にも注目していく必要があろう。

（伊藤裕偉）

＜註＞

- (1) 三重県教育委員会『多気郡明和町古里遺跡・斎宮跡』（1975年）
- (2) 大川勝宏「第91次調査」（『史跡斎宮跡平成3年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 1992年）
- (3) 斎宮歴史博物館『斎宮の土器・みやこの土器』（国史跡斎宮跡発掘30周年記念特別展「器は語る700年」記念シンポジウム資料 2000年）および講演記録（『斎宮歴史博物館研究紀要』10 2001年）、駒田利治・泉雄二・倉田直純「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調

査報告』I 斎宮歴史博物館 2001年）

- (4) 都城編年については、奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告』XIV（1993年）のほか、古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』（1992年）を参照した。
- (5) 前掲註(3)の斎宮土器編年には、土器の形式分類や実年代比定に問題が大きい。とくに斎宮第1期第3段階の資料的位置づけには、土器編年としても大きな問題を持っている。当報告では前掲註(3)での実年代観と土器編年とを切り離す目的で、「第Ⅰ期第〇段階」を「□-○段階」と表現していく。
- (6) 伊藤裕偉『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊 楠ノ木遺跡（三重県埋蔵文化財センター 1991年）
- (7) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年）
- (8) 南伊勢系鍋の分類と編年については、伊藤裕偉『伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る』（『鍋と妻そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年）
- (9) 古瀬戸編年は、藤澤良祐「中世瀬戸窯の動態」（『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集（財）瀬戸市埋蔵文化財センター 1996年）に拠る。
- (10) 伊藤裕偉・川崎志乃『鳴抜』第1次調査（三重県埋蔵文化財センター 1998年）
- (11) 永原慶二編『常滑焼と中世社会』（小学館 1995年）に所収。
- (12) 瀬戸大窯跡の編年は、藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 2002年）に拠る。
- (13) 南伊勢系の土師器皿類分類については、伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1993年）
- (14) 石臼の名称と分類については、三輪茂雄『臼』（ものと人間の文化史25 法政大学出版局 1978年）、桐山秀穂「日本における茶臼の研究」（『古代學研究所研究紀要』第6輯 1996年）を参照した。
- (15) 和鏡については、広瀬都異『和鏡の研究』（角川書店 1974年）、中野政樹編『日本の美術』42 和鏡（至文堂 1969年）を参照した。
- (16) 伊藤裕偉「戦国期の煮沸用土器から見た地域構造」（『戦国時代の考古学』高志書院 2003年）

遺構名	遺構の性格	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時期	古宮編年	遺構の性格・遺物・その他
SD 8736	E(南北) (直角網状)	7	東溝上斜	41	16	奈良・平安	~Ⅲ-1~	西宮東-1塙の土跡貫上基脚あり
			新溝	42	10	奈良	I-3-	
			南北溝	5J	3	奈良~	I-3	奈良古道網
			南北溝	5J	8	奈良~	I-3~	
			南北溝	5J	13	奈良~平安	I-3~II-1	
			南北溝	5J	19	中世IV		銅4c (SD4の刷り残し)
			溝	5J	24		I-3	
SD 8737	道路側溝	7	一筋	41	11	中世IV		銅4b-d 4c 多量
			鍵溝東	41	12	中世IV		銅・培塿形4d-
			鍵溝	41	17	中世IV		銅4b 多い
			鍵溝	41	5	中世II~		常滑 15世紀後半あり
			溝	5J	16	中世Ⅳ		銅3a-b, 3aが中心
			溝	5J	17	中世Ⅲ・IV		銅3b-4b
			溝下斜	5J	18	中世II		銅2c
			溝	5J	18	中世II・IV		山茶梅4・5型式 銅4b
			溝	5J	24・25			西宮北-2 並行 陶器質形あり
			溝	5K	15	中世Ⅲ~		銅3b
SD 8738	道路側溝	7	鍵溝	41	1	中世I		
			溝	5J	6	中世IV		銅4d
			溝2	5J	25			山茶梅4型式
			溝(北)	5J	25	中世II・IV		銅1b・4b
			溝	5K	10	中世IV		銅4c
SD 8739	道路側溝	7	鍵溝下斜	41	1	中世II・III		銅2c-3a 2c多い
			鍵溝下斜	41	1	中世II・III		銅2c-3a
			鍵溝上斜東	41	6	中世II		銅3b
			鍵溝	41	7	中世III		銅3b
			鍵溝下斜東	41	6・7	中世III		銅3b-4b
			溝2	5J	11	中世II・III		銅2b-3a
			溝	5J	12	中世II		銅2b
			溝	5J	19	中世II・IV		銅4b, 山茶梅4・5型式 アワビの貝冠
			溝	5J	20	中世II		銅2c
			溝	5J	25	中世II・IV		銅2c・4b

第V-2表 第7次調査区遺構一覧(1)

番号	遺構名	遺構の性状	次数	測定時遺構名	地区	グリット	時期	古文年	遺構の性状・遺物・その他
SK 8740	土坑	7	黒色土	4J	9		I - 1		
			上坑	4J	9・10		I - 2	須志器	
SE 8741	井戸	7	井戸	4J	12	中世Ⅳ		鍋 4dL、異形削盤	
SE 8742	井戸	7	壁内井戸	5J	15	中世Ⅳ		鍋 4b	
SD 8743	溝	7	溝	5J	9	中世Ⅳ		古文 I - 4~ 鍋 4b	
SK 8744	土坑	7	溝	5J	2	中世Ⅲ~		鍋 3b 以降	
SK 8745	土坑	7	溝	4J	17・18	中世Ⅳ		鍋 4b-d、灰釉・山茶碗混入	
			上坑	4J	17・18	中世Ⅳ		鍋 4c-dL	
SK 8746	土坑	7	上坑	5K	25	中世Ⅳ		鍋 4c-d	
SK 8747	土坑	7	上坑	4K	5	中世Ⅳ		鍋 4d	
			上坑 2	5K	25	中世Ⅳ		鍋 4d	
SK 8748	土坑	7	土坑	4J	11	中世Ⅳ		山田第 5 型式あり	
			土坑	4J	11	中世Ⅲ~			
			上坑	4K	15	中世Ⅳ		鍋 4d	
SK 8749	土坑	7	上坑 2	4K	5	中世Ⅳ		鍋 4c 以降	
SZ 8750	溝ち込み	7	上坑	5J	16・17	中世Ⅳ		常滑ねり鉢 15世紀後半~	
SK 8751	土坑	7	上坑	5J	5	中世Ⅲ		鍋 3b	
SK 8752	土坑	7	上坑	5J	7	中世Ⅲ		鍋 1b、2 基重複か	
SZ 8753	溝ち込み	7	上坑	5J	1	中世Ⅲ		鍋 3b~	
SK 8754	土坑	7	上坑	5J	10	中世Ⅳ		鍋 4c	
SK 8755	土坑	7	上坑	5J	16	中世Ⅲ~		鍋 3b~	
SK 8756	土坑	7	上坑	5J	21	中世Ⅳ		鍋 4c~	
SK 8757	土坑	7	上坑	5J	22	中世Ⅳ		鍋 4c、明代漆付	
			黒色土坑	5J	23	中世Ⅳ		鍋 4d~	
SK 8758	土坑	7	土坑	4J	13	中世Ⅳ		鍋 4c~	
SK 8759	土坑	7	暗褐色土坑	4J	14	奈良・中世Ⅳ		須志器、鍋 4b~c、2 時期の遺構重複か?	
SK 8759	土坑	7	上坑 2	4J	13	中世Ⅳ		鍋 4d~	
SD 8760	溝	7	溝	4J	2	中世Ⅳ		鍋 4c~	
			溝	4J	3~8	中世Ⅳ		鍋 4d	
SD 8761	溝	7	溝 2	4J	10	奈良?			
SD 8762	溝	7	溝 2	4J	12	平安?	I - 1~		
SK 8763	土坑	7	上坑	4J	19	奈良	I - 3~4		

第 V - 3 表 第 7 次調査区遺構一覧(2)

通番遺構名	遺構の性質	次数	調査時遺構名	地区	グリット	時期	西宮編印	遺構の性格・遺物・その他の特徴
SK 8764	土坑	7	土坑	4J	12	中世Ⅲ		鍋 1a 山茶碗 5型式
SK 8765	土坑	7	土坑	4J	16・17	奈良?	I~47	
SK 8766	土坑	7	土坑	4J	9	中世IV		鍋 4b 以前
SK 8767	土坑	7	土坑	4J	7	中世IV		鍋 4c、大富 2後
SK 8768	土坑	7	土坑・土坑 2	4J	3	平安・中世IV		平安の遺構が重複?、鍋 4b-c
SK 8769	土坑	7	土坑	4J	6	中世IV		鍋 4d
SK 8770	土坑	7	土坑	4J	1	中世IV		常滑ねり鉢
SK 8771	土坑	7	土坑	4J	2	中世IV		鍋 4d 明代染付
SK 8772	土坑	7	土坑	4J	6	中世IV		鍋 4b 備行の類
SK 8773	土坑	7	土坑	4J	2・7	中世Ⅲ		鍋 2c
SK 8774	土坑	7	土坑	5J	17	中世Ⅲ		鍋 3a
SK 8775	土坑	7	土坑	5J	2	奈良・平安	I~II	
SK 8776	土坑	7	土坑	5J	12	中世IV		鍋 4c
SK 8777	土坑	7	土坑	5J	7	中世IV		鍋 4c
SH 8778	整穴住居	7	土坑	5J	1	奈良	I~4	上層に一部鍋 4c あり(振り残しか?)
SE 8779	井戸	7	槽内	4J	4	中世IV		土師器 槽 4c~
SK 8780	土坑	7	-坑	5J	19・20	中世IV		
SX 8781	土塼墓	7	土坑	5J	4	中世Ⅲ		土師器小皿 鍋 1b 備行 和鏡
SK 8782	土坑	7	黑色土坑 2	4J	18	奈良		
SK 8783	土坑	7	黒色土坑	4J	18	奈良		
SK 8784	土坑	7	土坑	4J	20	中世IV		大富 2前
SH 8785	整穴住居	7		5J	6・7	奈良?		出土遺物なし?
SD 8786	溝	7	溝 3	4J	10	平安?	II~I~	
SE 8787	井戸	7	井戸	4J	2	中世IV		鍋 4d
SK 8788	土坑	7	茶褐色土	5J	20	中世IV		鍋 4d
			茶褐色土	5J	21	中世IV		
			茶褐色土	5J	16	中世IV		
SD 8789	溝	7	溝	4J	2	中世IV		鍋 4b~
N790	欠番		欠番					
SE 6480	井戸	7	土坑・黑色土坑	4K	20	奈良		上層に一部鍋 4b あり(振り残し?)

第V-4表 第7次調査区遺構一覧(3)

通番遺構名	次数	グリット	ピット番号	ピット遺物の時期	建物時間	規模 (m) ² × 高さ・m	主軸	方位 (N基準)	備考
SB8791	7	5J15	p1	p1 I - 4~	I - 4~	4(6.6) × 26(4.6)	南北	N43° E	SD8736より新
		5J16	p2						
		5J19	p1						
		5J20	p1						
		5J25	p1						
SB8792	7	4J10	p1 · p4	p4 I - 4~	E - 2 ~ II - 3	3(4.9) × 3(4.4)	東西	N29° E	矩柱建物 重複がある可能性が高い
		4J14	p1 · p3 · p4	p1 II - 3, p1 II - 1, p3 II - 2					
		4J15	p1 · p4	p1 I - 4					
		4J20	p3	p3 II - 1					
SB8793	7	4J2	p5	p5 中世IV	中世IV	375.0) × 293.2)	東西	N25° E	
		5J21	p1						
SB8794	7	4J6	p1 · p6 · p13	p6 III - 2 · 中世III	中世III	4(8.0) × 23(3.8)	東西	N28° E	
		4J11	p2 · p9						
		4K15	p2						
SB8795	7	4K6	p2	p2 III - 2	中世IV	49(2) × 25(5.8)	南北	N28° E	
		4K5	p6	p6 中世IV					
		4K15	p1	p1 中世 I					
SA8796	7	4J3	p4		E - 2 (中世IV) 以上	357.2) × 10(19.8)	南北	N32° W	中世と古宮II間のピットが重複か?
		4J4	p1 · p4	p4 中世IV					
		4J7	p5 · p6	p6 中世IV					
		4J8	p1						
		4J10	p6	p6 II - 2					
		4J12	p2						
		4K20	p6						
SB8797	7	5J14	p1 · p3		I後半	36(5.1) × 1(1.0) 以上	東西	N45° E	
		5J15	p2	p2 I 後半					
SB8798	7	5J2	p1 · p2 · p3	p1 2 · 中世IV, p3 中世III	中世IV	59(4) × 2(3.8)	東西	N24° E	
		5J3	p2	p2 中世IV					
		5J7	p3	p3 中世IV					
		5J8	p2						
SB8799	7	5J6	p2	p2 中世III	中世IV	4788.0) × 2(4.6)	東西	N22° E	
		5J7	p1 · p9 · p10	p1 中世III, p9 中世IV					
		5J17	p1	p1 中世III (羽廬構?)					
SB8800	7	5J1	p2 · p3 · p4	p3 中世III, p4 I - 4	I - 4~	2755.2) × 4(8.0)	南北	N45° E	
		5J2	p1						
		5J4	p1						
		5J5	p1	p1 I - 4					
		5J10	p1	p1 I - 4 (遺物 11 と共通)					
SB8801	7	5J1	p1	p1 I 後半	I後半	25(5.0) × 3(8.0)	南北	N43° E	
		5J10	p1	(遺物 10 と共通)					
SB8802	7	5J1	p1	p1 中世 I		233.6) × 3(5.4)	南北	N28° W	
		5J17	p6	p6 I - 3					
		5J22	p2 · p4	p4 I					

第V-5表 第7次調査区掘立柱建物一覧

No.	出土地区 種別	器種	基準量	調整・目録の特徴	出土	地城	色・調	保存状	案 考	備記
1	JH10 SD8726E 下側	土器 片	14.0 2.5	外:オサエ・ナードコチナ-ケアリ 内:ナードコチナ	小石 内:灰	やや灰 灰	焼 焼	現6.0 現6.0	保存 現存	R066
2	JH3 SD8726E 下側	土器 片	14.0	17.8 内:陶片ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存	R067-1
3	JH16 SD8726E 下側	土器 片	14.0	14.7 内:陶片ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存	R229
4	JH15 SD8726E 下側	土器 片	14.0 2.5	外:ハサエ-ヨコナチ 内:ハサエ-ヨコナチ・ヘラケアリ	砂 砂	灰 灰	砂 砂	現6.0 現6.0	現存 現存	R068
5	JH15 SD8726E 下側	土器 片	14.0	14.6 内:ハサエ-ヨコナチ 内:ハサエ-ヨコナチ・ヘラケアリ	砂 砂	灰 灰	砂 砂	現6.0 現6.0	現存 現存	R065
6	JH10 SD8726E 下側	土器 片	14.0 3.0	外:ハサエ-ヨコナチ 内:ハサエ-ヨコナチ・ヘラケアリ	砂 砂	灰 灰	砂 砂	現6.0 現6.0	現存 現存	R091
7	JH10 SD8726E 下側	土器 片	14.0 3.0	外:ハサエ-ヨコナチ 内:ハサエ-ヨコナチ・ヘラケアリ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R062
8	JH16 SD8726E 下側	土器 片	14.0	29.1 内:ハサエ-ヨコナチ・ヘラケアリ	白 白	白 白	砂 砂	現6.0 現6.0	現存 現存	R231
9	JH16 SD8726E 下側	土器 片	14.0	12.7 内:ナードコチナ-灰斑に墨乳(一文字に残す)	白 白	白 白	砂 砂	現6.0 現6.0	現存 現存	R232
10	JH15 SD8726E 上側	土器 片	14.0 3.8	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R054
11	JH10 SD8726E 上側	土器 片	14.0 4.0	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R067
12	JH10 SD8726E 上側	土器 片	14.0 3.8	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R068
13	JH10 SD8726E 上側	土器 片	14.0 2.9	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R070
14	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 15.0	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R226
15	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0	15.2 全体が剥離につき不明	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R225
16	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0	18.0 全体が剥離につき不明	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R222
17	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 18.0	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R221
18	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 16.0	外:ヨコナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R139
19	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 15.8	外:ヨコナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R224
20	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 16.4	外:ヨコナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R227
21	JH10 SD8726E 上側	土器 片	14.0 3.0	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R069
22	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 15.7	外:オサエ・ナードコチナ-ケアリ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R061
23	JH15 SD8726E 上側	土器 片	14.0 3.1	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R054
24	JH15 SD8726E 上側	土器 片	14.0 3.1	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R053
25	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 15.0	外:オサエ・ナードコチナ-白台輪付コチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R228
26	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 5.1	外:オサエ・ナードコチナ-白台輪付コチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R073
27	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 2.0	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R055
28	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 2.9	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R065
29	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 2.8	外:オサエ・ナードコチナ-ケアリ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R074
30	JH15 SD8726E 上側	土器 片	14.0 3.5	外:ヨコナードコチナ-ケアリ 内:ナードコチナ-鉢	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R057
31	JH15 SD8726E 上側	土器 片	14.0	13.6 ヨコナードコチナ-鉢	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R058
32	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 3.9	外:オサエ・ナードコチナ-白台輪付コチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R064
33	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 15.7	外:ヨコナードコチナ-白台輪付コチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R143
34	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 21.3	外:オサエ・ナードコチナ-白台輪付コチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R144
35	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 33.7	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R142
36	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 16.2	外:ヨコナードコチナ-白台輪付コチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R141
37	JH15 SD8726E 上側	土器 片	14.0 26.4	外:オサエ・ナードコチナ-白台輪付コチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R012
38	JH16 SD8726E 上側	土器 片	14.0 3.3	外:オサエ・ナードコチナ 内:ナードコチナ	白 白	白 白	焼 焼	現6.0 現6.0	現存 現存	R046

第V-6表 第7次調査区出土遺物観察表(1)

No.	出土地区 西日本道場	器種	法身(cm)	測量・技術的特徴	約束	構成	色	調査	保存度	場所	備考
38	415 SD8738	土師器 杯 G	1.50 高さ 3.9	13.6 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 3.6	瓶底 底	灰白	10YR8/2	口縁	16/12	R059
40	6124 SD8736	土師器 杯 C	1.50 高さ 3.8	14.4 内:ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	砂粒合 良	瓶底 底	灰	7.5YR7/6	口縁	9/12	R038
41	4111 SD8735	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.8	16.2 全体が崩壊につき不明	重 2.4	瓶底 底	灰や軟	8YR7/8	口縁	3/12	R223
42	6128 SD8735	土師器 杯 C	1.50 高さ 3.6	15.9 内:ナデーヨコナデ・ケズリ 外:ナデーヨコナデ・断続状文	重 2.4	瓶底 底	灰白	7.5YR7/8	口縁	7/12	R035
43	6128 SD8735	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.6	16.8 内:ナデーヨコナデ・ケズリ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	7/12	R036
44	6128 SD8735	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.4	10.4 内:ナデーヨコナデ・ケズリ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	7.5YR7/6	口縁	12/12	R037
45	415 SD8736	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	17.0 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR7/6	口縁	5/12	R071
46	6124 SD8736	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	17.6 内:ナサエ・ナデーヨコナデ・トキナ 外:ナデーヨコナデ・断続状文	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	2/12	R060
47	415 SD8736	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.1	10.6 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰や軟	8YR6/6	口縁	13/12	R062
48	415 SD8736	土師器 瓶 A	1.90 高さ 3.0	19.8 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR7/6	口縁	3/12	R072
49	415 SD8736	土師器 瓶 A	1.90 高さ 3.0	19.0 内:ナサエ・ナデーヨコナデ・ケズリ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR7/6	口縁	4/12	R056
50	414 SD8736	土師器 瓶 A	1.90 高さ 3.0	19.8 内:ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	3/12	R053
51	5113 SD8736	土師器 瓶 A	1.90 高さ 3.0	16.3 内:ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	砂粒合 良	瓶底 底	灰	10YR6/4	口縁	5/12	R039
52	5108 SD8736	土師器 瓶 A	1.90 高さ 3.0	11.2 内:ナデーヨコナデ・ケズリ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	12/12	R027
53	4110 SD8736	土師器 瓶 A	1.90 高さ 3.0	13.7 内:ナデーヨコナデ・瓶底ケズリ(11mm) 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	7.5YR7/6	口縁	12/12	R151
54	415 SD8736	土師器 瓶 A	1.90 高さ 3.0	14.0 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	砂粒少 良	瓶底 底	灰や軟	8YR6/6	口縁	4/12	R052
55	415 SD8726	土師器 瓶 A	1.50 高さ 3.0	15.8 内:ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ・ケズリ	砂粒少 良	瓶底 底	灰	10YR6/4	口縁	6/12	R077
56	6124 SD8736	土師器 瓶 A	1.50 高さ 3.0	13.0 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ・ヘラケズリ	砂粒少 良	瓶底 底	灰や軟	10YR6/4	口縁	4/12	R068
57	4110 SD8736	土師器 瓶 A	1.50 高さ 3.0	15.8 内:ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ・ヘラケズリ	砂粒少 良	瓶底 底	灰	10YR7/4	口縁	1/12	R009
58	4110 SD8736	土師器 瓶 A	1.50 高さ 3.0	17.2 内:ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ・ケズリ	砂粒少 良	瓶底 底	灰	7.5YR7/6	口縁	3/12	R290
59	5124 SD8736	土師器 瓶 A	2.10 高さ 3.0	21.6 内:ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ・ケズリ	砂粒合 良	瓶底 底	灰	10YR7/7	口縁	5/12	R066
60	6124 SD8736	土師器 瓶 A	2.20 高さ 3.0	22.6 内:ナデーヨコナデ・ケズリ	砂粒合 良	瓶底 底	灰	10YR8/3	口縁	3/12	R075
61	4116 SD8736	土師器 瓶 A	2.50 高さ 3.0	35.8 内:ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ・ケズリ	重 2.4	瓶底 底	灰	10YR7/4	口縁	4/12	R130
62	415 SD8736	土師器 瓶子	1.90 高さ 3.0	41.0 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナサエ・ヨコナデ・ヘラケズリ	砂粒合 良	瓶底 底	灰	7.5YR7/5	口縁	4/12	R004
63	5112 SD8736	土師器 瓶 A	2.50 高さ 3.0	29.0 内:ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	小石多 合	瓶底 底	灰	6/6	口縁	12/12	R085
64	419 SS8740	土師器 杯 G	1.50 高さ 3.0	13.0 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰や軟	10YR8/4	口縁	6/12	R147
65	4119 SD8740	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	14.0 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	9/12	R220
66	419 SD8740	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	14.0 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	7/12	R119
67	419 SD8740	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	14.0 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	5/12	R104
68	4110 SD8740	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	16.3 内:ナサエ・ナデーヨコナデ・ケズリ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	5/12	R115
69	419 SD8740	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	14.6 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰や軟	7.5YR6/6	口縁	11/12	R108-2
70	4110 SD8740	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	14.2 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	砂粒合 良	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	5/12	R114
71	419 SD8740	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	15.2 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	7.5YR6/6	口縁	3/12	R126
72	4110-10 SD8740	土師器 杯 A	1.50 高さ 3.0	18.4 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	7.5YR6/6	口縁	10/12	R218
73	419 SD8740	土師器 瓶 A	2.10 高さ 3.0	21.2 内:ナサエ・ナデーヨコナデ・ケズリ 外:ナデーヨコナデ	砂粒合 良	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	5/12	R098
74	419 SD8740	土師器 瓶 A	1.50 高さ 3.0	16.5 内:ナサエ・ナデーヨコナデ 外:ナデーヨコナデ	重 2.4	瓶底 底	灰	8YR6/6	口縁	4/12	R097
75	419 SD8740	土師器 瓶 A	1.50 高さ 3.0	17.6 内:ナデーヨコナデ・ケズリ 外:ナデーヨコナデ・ケズリ	重 2.4	瓶底 底	灰	明度8 10YR7/6	口縁	11/12	R176
76	419-10 SD8740	土師器 瓶 A	1.50 高さ 3.0	18.4 内:ナサエ・ナデーヨコナデ・ハゲヌ 外:ナデーヨコナデ・ケズリ	重 2.4	瓶底 底	灰	明度8 10YR7/4	口縁	11/12	R177

第V-7表 第7次調査区出土遺物観察表(2)

順	出土地区 遺物番号	種類	通量(cm)	調査・測定の結果	第1	地城	色	調	現存度	備考	登録番号
77	J10 SK8740	小鉢器 貝	11mm	外:ハケメ・コナチ子 内:ハケメ・ココナチ	0.5~2.4mm 小粒	やや軟	灰	灰	11mm 4/12	ハケメは底部から始め、下半 ほど後に施す	R137
78	J10-10 SK8740	貝器	11mm	23.0mm 内:小粒ナナ・ナヂ	2.5mm 内:小粒ナナ	硬	灰	灰	7.0mm 11mm 3/12	完存 部分、部分剥離	R194
79	J118 SK8762	小鉢器 貝	11mm	13.4mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	やや軟	灰	灰 10mm 4/12	内面にヘラ記号	R108
80	J118 SK8762	小鉢器 貝	11mm	14.6mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	真	灰	5mm 6/6	11mm 2/12 内面にヘラ記号	R118
81	J118 SK8762	小鉢器 貝	11mm	13.6mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	真	灰	2.5mm 0/6	11mm 3/12	R106
82	J118 SK8762	小鉢器 貝	11mm	12.5mm 内:ハケメ	4.4mm 内:ナナ・コナチ	硬	真	白	5mm 6/6	11mm 4/12 内面にヘラ記号	R120
83	J118 SK8762	小鉢器 貝	11mm	15.4mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	やや軟	白	5mm 6/6	11mm 4/12 内:ヘラ記号	R110
84	J118 SK8762	小鉢器 貝	11mm	16.0mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	やや軟	灰	灰 10mm 4/12	内面にヘラ記号	R096
85	J118 SK8762	小鉢器 貝	11mm	16.2mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	灰	灰	11mm 2/12	内面に自然施	R095
86	J118 SK8762	小鉢器 貝	11mm	19.4mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	灰	浅灰	2.5mm 7/7	11mm 1/12 10mm 1/12	R093
87	J118 SK8762	小鉢器 貝	11mm	20.2mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	灰	灰	6.0mm 11mm 2/12	外面に自然施	R154
88	J118 SK8763	小鉢器 貝	11mm	16.6mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	白	白	7.5mm 7/8	11mm 3/12	R109
89	J118 SK8763	小鉢器 貝	11mm	22.0mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 6/6	11mm 2/12	R099
90	J118 SK8763	小鉢器 貝	11mm	28.2mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	白	白	灰 10mm 7/7	11mm 2/12 外面に難	R136
91	J118 SK8768	小鉢器 貝	11mm	13.5mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	真	白	5mm 6/6	11mm 2/12	R107
92	J118 SK8768	小鉢器 貝	11mm	13.9mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	真	白	10mm 5/5	11mm 2/12 10mm 2/12	R092
93	J118 SK8775	小鉢器 貝	11mm	15.3mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 7/6	11mm 6/12	R148
94	J118 SK8777	小鉢器 貝	11mm	19.8mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	灰 10mm 5/5	11mm 3/12 10mm 2/12 付ける手筋	R059
95	J118 SK8766	小鉢器 貝	11mm	12.5mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	白	白	5mm 6/6	11mm 3/12 10mm 2/12	R146-1
96	J118 SK8766	小鉢器 貝	11mm	15.9mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	硬	白	白	5mm 6/6	11mm 3/12	R214
97	J118 SK8769/729	小鉢器 貝	11mm	17.8mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 6/6	11mm 7/12	R213
98	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	19.8mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 6/6	11mm 9/12	R212
99	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	16.4mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 6/6	11mm 2/12	R105
100	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	24.7mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 6/6	11mm 6/12	R149
101	J118 SK8769	小鉢器 貝	6.1mm	11.0mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	高さ 1.0mm 幅: 0.5mm	高さ 3/12 適切度	R216
102	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	10.2mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	やや軟	灰	灰 10mm 2/7	11mm 6/12	R133
103	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	10.6mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	やや軟	灰	灰 10mm 2/7	11mm 3/12	R112
104	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	11.2mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	灰	灰	灰 10mm 3/6	11mm 4/12	R129
105	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	15.2mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	灰 10mm 5/5	11mm 2/12	R116
106	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	14.5mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 6/6	11mm 4/12	R207
107	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	16.0mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	7.5mm 7/8	11mm 1/12	R128
108	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	16.7mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 6/6	11mm 2/12	R113
109	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	14.3mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	7.5mm 6/6	11mm 2/12	R117
110	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	16.9mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 6/6	11mm 7/12	R145
111	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	20.6mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	2.5mm 6/6	11mm 3/12	R219
112	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	21.6mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	明るい灰 2.5mm 5/6	11mm 2/12	R122
113	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	22.2mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	5mm 6/6	11mm 3/12	R121
114	J118 SK8769	小鉢器 貝	11mm	21.4mm 内:ハケメ	5.0mm 内:ナナ・コナチ	小粒 硬	白	白	明るい灰 5mm 5/6	11mm 1/12	R125

第V-8表 第7次調査区出土遺物観察表(3)

No.	生土埋区 遺物名	器種	法號(年)	測量・抜法の特徴	出土 地點	場所	色 調	保存状 態	備 考	参考文
115	5017 遺物名	土器 鉢	1144	21.3 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和5.6/6 高台5/12	R124
116	412 遺物名	土器 鉢	1144	20.8 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和5.6/6 高台5/12	R150
117	5017 遺物名	土器 露真	1144	19.8 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和7.5/6 高台3/12	R123
118	517 遺物名	土器 露真	1144	12.0 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	白色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/7.4 高台6/12	R132
119	4117 遺物名	土器 露真	1144	9.7 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和12/12 高台12/12	R163
120	517 遺物名	土器 露真	1144	10.0 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	白色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/8/3 高台12/12	R098
121	412 遺物名	土器 露真	1144	10.0 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	白色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和3/12 外縁に自然端	R090
122	412 遺物名	土器 露真	1144	7.4 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和7/7 高台2/12	R091
123	4111 遺物名	土器 露真	1144	18.0 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和6.0 高台2/12	R094
124	4117 遺物名	土器 露真	827	8.2 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	高台	高台 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 高台1/12 自然端	R026
125	416 遺物名	土器 露真	1144	17.0 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和5.6/5.7 高台9/12	R120
126	516 遺物名	土器 露真	1144	16.8 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/7.4 高台10/12	R178
127	515 遺物名	土器 露真	1144	20.5 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和9.6/3 高台3/12	R102
128	515 遺物名	土器 露真	1144	27.4 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/8/3 高台3/12	R101
129	517 遺物名	土器 露真	1144	15.5 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和4/12	R131
130	4113 遺物名	土器 露真	1144	14.8 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/7.3 高台2/12	R088
131	511 遺物名	土器 露真	1144	17.8 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和7/7 高台3/12	R135
132	4115 遺物名	土器 露真	644	12.0 内:ナデニヨコナデ	高台	高台 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/7.3 高台7/12	R168
133	4111 遺物名	土器 露真	728	12.0 内:ナデニヨコナデ	高台	高台 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/5/3 高台6/12	R167
134	S25 遺物名	灰陶	728	12.0 内:ナデニヨコナデ	高台	高台 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和7/7 高台12/12	R162
135	4120 遺物名	土器 露真	1144	25.6 内:ササ・ナデニヨコナデ	昭和 露真	昭和 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和1/12 外縁に自然端(灰褐色)	R044
136	5119 遺物名	土器 露真	1144	6.7 内:ナデニヨコナデ	高台	高台 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/8/4 既定位置	R198
137	411 S267238	土器 露真	1144	15.0 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/8/4 口縁3/12 中世南伊勢系	R094
138	411 S267238	土器 露真	1144	15.0 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/8/4 口縁3/12 中世南伊勢系	R093
139	411 S267238	土器 露真	1144	15.0 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/8/4 口縁3/12 高台7/12 山东桜 菊美	R024
140	411 S267238	土器 露真	1144	15.0 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/8/4 口縁3/12 山茶桜 加多・猛	R025
141	411 S267238	土器 露真	1144	7.4 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/6/3 口縁5/12 中世南伊勢系	R046
142	5112 S267238	土器 露真	1144	11.0 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/6/3 口縁5/12 中世南伊勢系	R048
143	411 S267239	土器 露真	1144	12.3 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/6/3 口縁12/12 中世南伊勢系	R044
144	416-7 S267239	土器 露真	1144	9.2 内:ナデニヨコナデ→ナラ木 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/3/3(2類) 口縁5/12 劉(前) 外縁にヘア式	R018
145	416-7 S267239	土器 露真	1144	- 内:ナラ木	露真	露真 内:ナラ木	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/3/3(2類) 口縁5/12 劉(前) 外縁に頭部	R021
146	416-7 S267239	土器 露真	1144	14.8 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/6/4 口縁10/12 中世南伊勢系	R029
147	416-7 S267239	土器 露真	1144	25.1 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ササ・ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/6/3 口縁12/12 中世南伊勢系	R049
148	411 S267239	土器 露真	1144	19.2 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/6/2 口縁12/12 中世南伊勢系	R045
149	416-7 S267239	土器 露真	1144	22.8 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/6/3 口縁12/12 中世南伊勢系	R028
150	417 S26730	土器 露真	1144	22.6 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和2.5/6/2 口縁12/12 中世南伊勢系	R032
151	411 S267239	土器 露真	1144	33.0 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/8/4 口縁5/12 中世南伊勢系	R022
152	416 S267239	土器 露真	1144	42.6 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	露真	露真 内:ササ・ナデニヨコナデ 内:ナデニヨコナデ	褐色 -2cm -1.5cm	削出 良	削出 昭和10.9/8/4 口縁5/12 中世南伊勢系	R017

第V-9表 第7次調査区出土遺物觀察表(4)

No.	出土地名 地図番号	層別	法線(m)	調整・月日付の特徴	地土	地成	色調	既存度	備考	地籍番	
153	AB6-7 SD8739	上部層 削基	1188	40.8 内:ハメ×コナヂ・ケズリ 内:ロクナヂ系切り・高台断材ヨコナヂ	砂 -3m小 -7.5m	真	薄黄 25Y7/3	日緑 3/12 薄紫 8/12	中野西伊勢 原	R175	
154	SH17 SD8737	高台 堆積	748	9.4 外:ロクナヂ系切り・高台断材ヨコナヂ 内:ロクナヂ系	砂 -3m小 -7.5m	真	灰 7/9	薄紫 8/12	山本橋 岩美 通に面看上	R019	
155	JH16 SD8737	上部層 堆積	888	9.6 外:ナタヂ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰 灰	浅绿 5.5YR6/4 灰白 25Y8/2 绿 7.5YV9/3	日緑 5/12 灰白 2/12 灰白 11/12 六瀬川排水小川 内面にテラコッタ埋存	R043	
156	HK15 SD8737	高台 堆積	908	9.8 外:ロクナヂ系切り・高台 内:ロクナヂ系堆積	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 25Y8/2 绿 7.5YV9/3	日緑 2/12 灰白 11/12 六瀬川排水小川 内面にテラコッタ埋存	R245	
157	JH16 SD8737	高台 堆積	1018	10.1 外:ロクナヂ系切り・高台 内:ロクナヂ系堆積	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 25Y8/2 绿 7.5YV9/3	日緑 2/12 灰白 11/12 六瀬川排水小川 内面にテラコッタ埋存	R244	
158	HJ17 SD8737	高台 堆積	908	9.8 外:ナタヂ×コナヂ系切り・高台切口ヨコナヂ 内:ナタヂ系	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰 6/9 绿 2/12	内面に直角船 底	R029	
159	JH16 SD8737	上部層 削基	1188	10.8 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰 灰	半灰田伊勢 原	R035	
160	HJ17 SD8737	上部層 削基	1077	10.7 外:サエナタヂ×有筋材ヨコナヂ 内:ナタヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 7.5YR7/4 灰白 11/12 半灰田伊勢 原	R047		
161	JH16 SD8737	上部層 削基	1036	10.6 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 25Y8/3 灰白 1/12	半灰田伊勢 原 外面に埋 者	R031	
162	HJ17 SD8737	高台 堆積	316	9.4 外:ナタヂ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 10YR7/3 灰白 2/12	中野西伊勢 原 外面に埋 者	R257	
163	JH16 SD8737	上部層 削基	2935	9.5 外:ナタヂ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	薄黄 25Y8/3 日緑 10YR6/4	日緑 2/12 中野西伊勢 原	R030	
164	JH17 SD8737 通	高台 堆積 小組	808	9.0 外:サエナタヂ×ヨコナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	浅绿 10YR6/4 日緑 13/12	中野西伊勢 原	R182-2	
165	JH17 SD8737 通	高台 堆積 小組	920	9.0 外:サエナタヂ×ヨコナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 7.5YR7/4 日緑 10/12	中野西伊勢 原	R183-1	
166	JH17 SD8737 通	高台 堆積 小組	1048	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	7.5YR7/6 日緑 4/12	中野西伊勢 原	R180	
167	JH17 SD8737 通	高台 堆積	2548	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ・ケズリ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR7/3 日緑 2/12	中野西伊勢 原	R134	
168	JH17 SD8737 通	高台 堆積	2186	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ・ケズリ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR7/3 日緑 3/12	中野西伊勢 原 外面に埋 者	R179	
169	JH17 SD8737 通	高台 堆積	2624	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ・ケズリ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR7/3 日緑 11/12	中野西伊勢 原 外面に埋 者	R138	
170	JH17 SD8737 通	高台 堆積	2486	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ・ケズリ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR7/4 日緑 10/12	中野西伊勢 原 外面に埋 者	R260	
171	JH17 SD8737 通	高台 堆積	2838	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ・ケズリ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR7/3 日緑 12/12	中野西伊勢 原 外面に埋 者	R140	
172	JH17 SD8737 通	高台 堆積	3328	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR6/3 日緑 2/12	中野西伊勢 原 外面に埋 者	R185	
173	JH17 SD8737 通	高台 堆積	4336	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ・ケズリ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	薄黄 25Y7/3 日緑 2/12	中野西伊勢 原 外面に埋 者	R007	
174	JH17-18 SD8745	高台 堆積	1613	9.8 外:ロクナヂ系切り・高台断材ヨコナヂ・出側材 内:ロクナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 8/0 高台 2/12	6.5m陶器の系統表記 原	R100	
175	JH22 SD8757	高台 堆積	548	9.4 外:サエナタヂ 内:サエナタヂ・ヨコナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR6/3 日緑 2/12	中野西伊勢 原 原代吉原(染付)	R254	
176	JH17 SD8758	高台 堆積	1188	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	薄黄 25Y7/3 日緑 2/12	中野西伊勢 原 画面に埋 者	R258	
177	JH17 SD8770	高台 堆積	373	9.4 外:サエナタヂ 内:サエナタヂ・サエニヨコナヂ 内:サエニヨコナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 10YR6/4 日緑 2/12	中野西伊勢 原 画面に埋 者	R259	
178	JH17 SD8780	高台 堆積	1226	9.4 外:サエナタヂ×ヨコナヂ 内:ナタヂ×ヨコナヂ・断面付加	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 2/12	中野西伊勢 原 断面に埋 者	R187	
179	JH17 SD8780	高台 堆積	1118	9.4 外:ロクナヂ×ヨコナヂ・ケズリ 内:ロクナヂ×ヨコナヂ・スパン花文・断面	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 8/0 高台 2/12 高台 12/12 高瀬原	日灰 10YR6/4 日緑 2/12 中野西伊勢 原 断面に埋 者	R200	
180	JH17 SD8787	高台 堆積	1118	9.4 外:ナタヂ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 10YR6/4 日緑 2/12	中野西伊勢 原 画面に埋 者	R249	
181	JH17 SD8787	高台 堆積	0.65	9.4 外:ナタヂ×コナヂ切り・断面 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 8/0 高台 3/12	点断面埋 者	R166	
182	JH17 SD8781	高台 堆積	888	9.4 外:サエナタヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰 灰	日灰 10YR6/1 日緑 11/12	中野西伊勢 原	R190
183	JH17 SD8779	高台 堆積	1036	9.4 外:サエナタヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR7/4 日緑 3/12	中野西伊勢 原	R185	
184	JH17 SD8777	高台 堆積	624	9.4 外:サエナタヂ 内:ナタヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 5.5YR6/4 日緑 4/12	中野西伊勢 原	R183-2	
185	JH17 SD8777	高台 堆積	1024	9.4 外:ロクナヂ×コナヂ系 内:ロクナヂ系	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 25Y8/2 绿 7.5YV9/3	日緑 4/12 高台 12/12 高台 12/12 高瀬原	R216	
186	M17 SD8777	高台 堆積	1313	9.4 外:ハメ×コナヂ系 内:ロクナヂ系	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 25Y8/2 绿 7.5YV9/3	日緑 4/12 高台 12/12 高瀬原	R172	
187	JH17 SD8776	高台 堆積	1644	9.4 外:ロクナヂ系 内:ロクナヂ系	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 25Y8/2 绿 7.5YV9/3	日緑 4/12 高台 12/12 高瀬原	R252	
188	JH17 SD8784	高台 堆積	1114	9.4 外:ナタヂ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	灰白 25Y8/2 绿 7.5YV9/3	日緑 1/12 高台 12/12 高瀬原	R248	
189	JH17 SD8741	高台 堆積	3048	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR7/6 日灰 1/12	中野西伊勢 原 外面に埋 者	R261	
190	JH17 SD8741	高台 堆積	3024	9.4 外:ハメ×コナヂ 内:ナタヂ×コナヂ	土 -3m小 -7.5m	真	灰 灰	日灰 10YR7/6 日灰 1/12	中野西伊勢 原 外面に埋 者	R210	

第V-10表 第7次調査区出土遺物観察表(5)

No.	出土場所 施設-機器	器種	法尺(cm)	調査・技法の特徴	出土	地城	色・質	残存度	参考	写真		
191	4J10 4J15	陶器 陶器	11.84 5.4	外:ロクナガード-赤切り-高台付斜ヨコナデ 内:ロクナガ	直 直	明鏡	黒G 8/0	11尺2/12 直台12/12 斜台12	山形地 墓多・墓殺 高台に R158			
192	4J1 4J2	土器 土器	11.86	外:オサエ・ナヂ 内:ナヂ	-2.00± -2.00± -2.00± -2.00±	直 直	白 白	以深1尺7.5YRK7/4	11尺1/12	中野山伊勢系	R181	
193	4J13 4J12	土器 土器	11.86	外:ハナケ→ヨコナガ-肥手部付斜 内:ヨココロコグ	-2.00± -2.00±	直 直	白 白	以深1尺10YRK7/4	11尺9/12 肥手6/12	中野山伊勢系 無唇に偏 R169		
194	5J7 ピット	陶器 陶器	11.86	外:ロクナガード-赤切り-施錫 内:ロクナガ-施錫	-1.00± -1.00±	直 直	明鏡	灰白 10YRK8/2 黒 10YRK2/1	11尺 1/12	瀬戸太閤周	R269	
195	4J1 4J15	陶器 陶器	11.86	外:ロクナガード-施錫-施錫 内:ロクナガ-施錫	-1.00± -1.00±	直 直	明鏡	黒G 10YRK8/2 黒 10YRK2/1	11尺6/12 直台12/12 斜台12	瀬戸太閤 墓多・粘土膏和小石 高 台に偏 R197		
196	4J6 ピット	土器 土器	25.7	外:ハナケ-ヨコナデ 内:ナヂ-ヨコナデ	-1.00± -1.00±	直 直	白 白	以深1尺10YRK7/4	11尺 3/12	中野山伊勢系 外唇に施 R118		
197	4J6 道筋	陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-赤切引 内:ロクナガ	-2.00± -2.00±	直 直	明鏡	灰白 7/0	11尺4/12 直台12/12	山形 地美	R192	
198	5J5 道筋	陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-名切引 内:ロクナガ	-2.00± -2.00±	直 直	灰白 7/0	11尺9/12 直台12/12	山形地 多段段 内側に通村 若、外側に埋 R193			
199	4J11 道筋	陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-赤切引-高台付斜ヨコナデ 内:ロクナガ	-1.00± -1.00±	直 直	明鏡	灰白 7/0	11尺 1/12 高台12/12	山形地 地美 高台に削削板 R166		
200	5J1 道筋	陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-赤切引-高台付斜ヨコナデ 内:ロクナガ	-2.00± -2.00±	直 直	明鏡	灰白 7/0	11尺2/12 高台12/12	山形地 地美	R155	
201	5J8 道筋	陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-名切引-爲替付斜ヨコナデ 内:ロクナガ	-2.00± -2.00±	直 直	明鏡	灰白 8/0	11尺5/12 高台12/12	山形地 地美	R161	
202	5J13 道筋	陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-赤切引-爲替付ヨコナデ 内:ロクナガ	-2.00± -2.00±	直 直	明鏡	灰白 8/0	11尺2/12 高台12/12	山形地 多段段 高台に削 R157		
203	5J4 道筋	土器 土器	11.86	外:ハナケ・ヨコナデ 内:ナヂ-ヨコナデ	-1.00± -1.00±	直 直	白 白	以深1尺10YRK7/4	11尺 6/12	中野山伊勢系 外唇に偏 R097 2		
204	5J16 道筋	陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-赤切引-高台付斜ヨコナデ 内:ロクナガ	-2.00± -2.00±	直 直	白 白	10YRK8/0 白青 10YRK8/0	11尺2/12 高台3/12	明代古瓦(焼物)	R253	
205	5J25 道筋	陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-赤切引-施錫 内:ロクナガ-施錫	-2.00± -2.00±	直 直	明鏡	灰白 10YRK7/4 灰白 10YRK7/4 灰白 10YRK7/4 灰白 10YRK7/4	11尺3/12 高台4/12 斜台4/12	瀬戸太閤 全面施錫 R247		
206	5J6 道筋	陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-名切引-施錫 内:ロクナガ	-2.00± -2.00±	直 直	明鏡	灰白 10YRK7/4 灰白 10YRK7/4	11尺3/12	日口押と拂磨取り付く R196		
207	5J10 4J15 道筋	土器 陶器 土器	11.86	外:ロクナガード-赤切引-施錫 内:ロクナガ-施錫	-1.00± -1.00±	直 直	明鏡	灰白 10YRK8/2 灰白 10YRK8/2	11尺 1/12	瀬戸太閤周	R251	
208	4J6 道筋	土器 土器	7.7	外:オサエ・ナヂ 内:ナヂ	-2.00± -2.00±	直 直	淡黄 2.5YRK8/5	11尺5/12	中野山伊勢系	R181		
209	5J5 道筋	土器 土器	11.86	外:オサエ-当コナデ 内:ハナケ-当コナデ	-1.00± -1.00±	直 直	灰白 10YRK6/2	11尺 2/12	中野山伊勢系	R182 1		
210	5J17 道筋	土器 土器	11.86	外:オサエ・ナヂ-ヨコナデ 内:ナヂ-ヨコナデ	-1.00± -1.00±	直 直	白 白	以深1尺10YRK7/4	11尺 2/12	中野山伊勢系	R188	
211	4J6 5J1	土器 土器	11.86	外:オサエ・ナヂ-ヨコナデ 内:ナヂ-ヨコナデ	-1.00± -1.00±	直 直	白 白	以深1尺10YRK7/4	11尺 4/12	中野山伊勢系	R189	
212	5J19 道筋	土器 土器	11.86	外:オサエ・ナヂ-ヨコナデ 内:ナヂ-ヨコナデ-施錫付加	-1.00± -1.00±	直 直	白 白	7.5YRK7/6	11尺 3/12	中野山伊勢系	R189	
213	5J20 道筋	土器 土器	11.86	外:オサエ・ナヂ-ヨコナデ 内:ナヂ-ヨコナデ	-1.00± -1.00±	直 直	白 白	以深1尺10YRK8/4	11尺 4/12	中野山伊勢系	R191	
214	4J13 道筋	土器 土器	11.86	外:ナヂ-ヨココグ 内:船ナ-ヨコナデ	-1.00± -1.00±	直 直	白 白	以深1尺10YRK7/3	11尺 4/12	中野山伊勢系	R173	
215	5J16 道筋	土器 土器	11.86	外:ハナケ-ヨコナガ-肥手部付斜 内:ナヂ-ヨココグ	-2.00± -2.00±	直 直	明鏡	10YRK7/6	11尺9/12 肥手12/12	中野山伊勢系 外唇に偏 R170		
216	4J9 道筋	土器 土器	22.6	外:オサエ-ハナケ-ヨコナデ 内:ナヂ-ヨココグ	-2.00± -2.00±	直 直	白 白	7.5YRK7/6	11尺 1/12	中野山伊勢系 突丸が2つある R111		
217	5J1 道筋	土器 土器	11.86	外:ナヂ-ヨココグ 内:船ナ-ヨコナデ	-1.00± -1.00±	直 直	灰白 7.5YRK8/4	11尺 2/12	中野山伊勢系	R174		
218	5J10 道筋	土器 土器	11.86	外:ナヂ-ヨココグ-セザリ 内:ナヂ-ヨココグ	-2.00± -2.00±	直 直	白 白	以深1尺10YRK7/3	11尺 3/12	中野山伊勢系	R171	
219	4J11 道筋	土器 土器	32.6	外:ナヂ-ヨココグ 内:ナヂ-ヨコナデ-ヨコナデ-ケツリ 内:ナヂ-ヨココグ	-2.00± -2.00± -2.00±	直 直 直	白 白 白	以深1尺10YRK7/4	11尺 3/12	中野山伊勢系 無唇に偏 R163		
220	5J17 道筋	土器 土器	28.2	外:ナヂ-ヨコナデ 内:ナヂ-ヨコナデ-ヨコナデ-ケツリ 内:ナヂ-ヨココグ	-1.00± -1.00± -1.00±	直 直 直	白 白 白	以深1尺7.5YRK7/4	11尺 2/12	中野山伊勢系 斜削削 R164		
221	5J19 道筋	土器 土器	27.6	外:ナヂ-ヨコナデ 内:ナヂ-ヨコナデ-ヨコナデ-ヨコナデ-ヨコハ 内:ナヂ-ヨココグ	-2.00± -2.00± -2.00± -2.00±	直 直 直 直	白 白 白 白	以深1尺10YRK7/4	11尺 2/12	中野山伊勢系 無唇に偏 R041		
222	G1	内筒装輪	23.1	外:タナキ-受荷付斜ヨコナデ-ヨコハ 内:ナヂ-ヨコナデ	-1.00± -1.00±	直 直	灰白 灰白	以深1尺10YRK7/4	11尺 2/12	土師質	R248	
223	5J15 (5J15-4J15)	内筒装輪	17.0	外:タナキ-受荷付斜ヨコナデ-ヨコハ 内:オサエ・ナヂ	-1.00± -1.00±	直 直	灰白 灰白	以深1尺10YRK7/4	机 4/12	内筒装輪し直し棒残存 R242		
224	5J12 道筋	家川輪	-	冲縄のため調整した外唇付近に突起が ある。	-2.00±	直 直	高 高	10YRK8/6	幕内店	冲縄の外唇付近に突起が ある。	R243	
225	5J3 道筋	陶器 陶器	11.1	内筒装輪 4本柱に部分に要石から切り出し直せる	-	直 直	灰白 2.5YRK7/4	幕内店	配石	R041		
226	5J10 道筋	陶器 陶器	28.0	蓋は8分割	-	直 直	白 白	火成岩質 ヘンマ岩質			R153	
227	GR10 SD6738	石井輪	13.9	空軸の一括と風輪のみ残存	-	直 直	白 白	上部A 底質	底質の移行層		R256	
228	JH-2 SK6741	石井輪	41.5	石材15.4cm×16.7cm×41.5cm調整直輪器	-	直 直	高 高	10YRK8/6	幕内店	底質の移行層 底盤脚脚部の軸輪部に搬材材	R255	
229	5J4SS03781	内筒	11.1	直井式中柱、中壁半周、角柱半周、直井地、直 井蓋	0.75	直井 直井	白 白	直井直井	直井地直井直井		R261	

第V-11表 第7次調査区出土遺物観察表(6)



全景（北から）



南部（西から）



SB8791 (北から)



SD8736北部 (南から)



中世古道 (SD8737~39) (西から)



SD8736~8739 (北から)



南部（北から）



SX8781 遺物出土状況 鏡、土師器鍋 2 個体、土師器小皿 1 個体のほか、礫が数点見える。



3



6



4



7



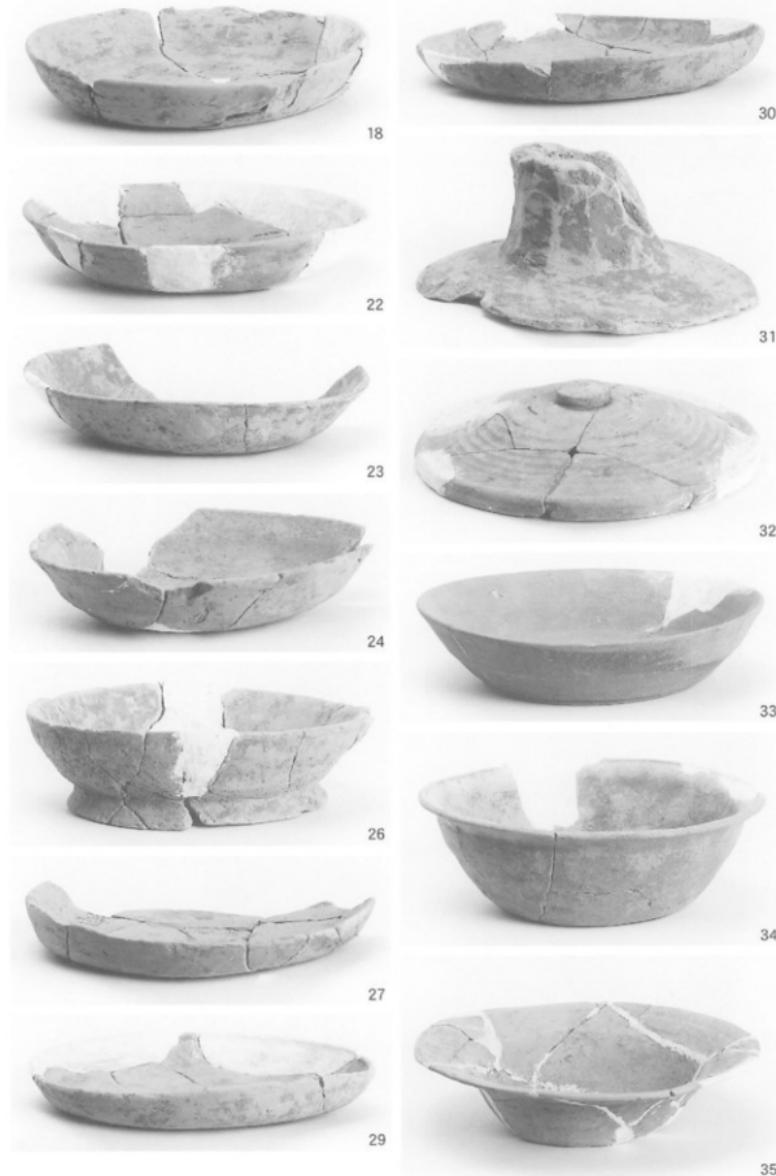
5

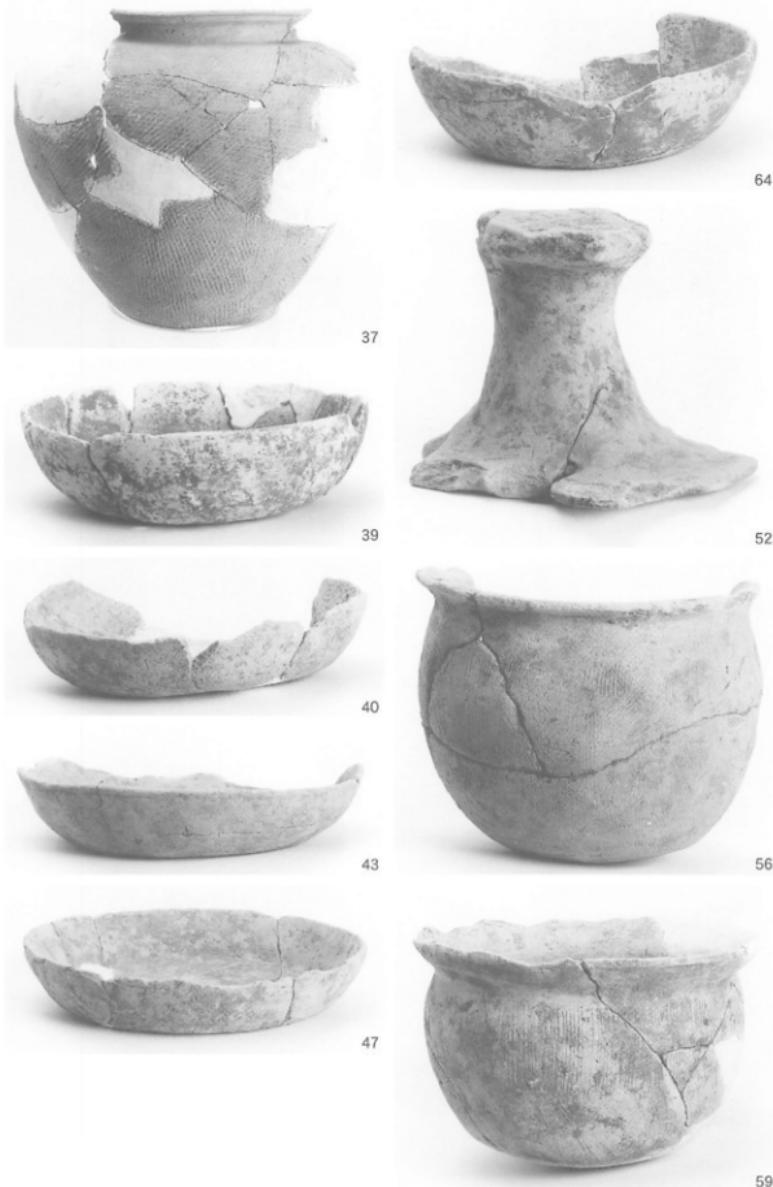


15



17







69



111



75



120



78



126



96



132



97



138



146



143



167



171



193



169



215



170



220



223



229

1 : 2



227



228

VI 史跡斎宮跡出土資料の保存処理と自然科学的調査

はじめに

斎宮歴史博物館より史跡斎宮跡出土資料7点を保存処理・分析業務委託として預かりし、調査を行う機会を得たので報告する。対象資料は以下のとおりである。

- ・No.1 鉢(133次出土)
- ・No.2 馬具(5次出土)
- ・No.3 毛彫馬具(137次出土)
- ・No.4～7 銅鏡4点(130次出土)

保存処理及びそれに伴う観察・調査は山岡奈美恵が、機器分析調査は菅井裕子と渡辺智恵美が実施した。

1 保存処理作業

保存処理の工程とその概要是次のとおりである。

(1) 処理前調査

写真撮影ならびにX線透過試験を実施した。この結果、No.4～7の銅鏡は「和同開珎」であること、そのうちNo.6は他の3点よりも腐蝕が進行し脆弱な状態であることが確認できた。また、肉眼観察より、No.1には両面に装飾が施されていることも確認できた。なお、X線透過試験は以下の条件で出力(電圧)を調整しながら実施した。

- ・装置：X線透過試験装置MG225型(フィリップス社)
- ・フィルム：Fuji-X-ray film Ix100
- ・増感紙：鉛増感紙 LF0.03
- ・焦点フィルム間距離：100cm
- ・電流：2mA

(2) 第1次クリーニング

1～3は地金の銅の劣化が激しくなり脆い状態だったため、第1次クリーニングは殆ど行っていない。4～7は、表面にこびりついた土を、エタノールを染み込ませて軟らかくしながら、竹串や筆を使って除去した。

(3) 洗浄

ポリエチレン製のネット(ダイオネット：ダイオ化成)で遺物を包んで養生し、有機溶剤(キシレン・

アセトン・酢酸エチルの混合液)の中に浸漬して表面に付着する油脂分や土等の不純物を除去した。

(4) BTA処理

今回保存処理した遺物は全て銅製品であったため、銅の安定化処理法であるBTA処理を実施した。これは、化学反応により銹の進行を抑える方法である。BTA溶液(ベンゾトリアゾール・3%アルコール溶液：片山化学)に浸漬した状態で減圧含浸を実施した。

(5) 樹脂含浸

遺物強化と防錆のために、フッ素系アクリル樹脂(Vフロン・L559溶液/大日本塗料(株))による減圧含浸を3回実施した。

この工程の終了した時点で、No.6が数点の破片に分割されていることが判明した。X線写真を見ても脆弱であることは予想されたため、充分に養生を施した上で処理作業を行ったのだが想定していた以上に脆く、とくに縁部分が細かく割れてしまった。文字部分は地金が他よりも分厚い構造であったため、ほぼ状態を保った状態であった。今後このような事がないよう、遺物の状態にはさらに注意を配り、養生の方法について改善を図らなければならない。

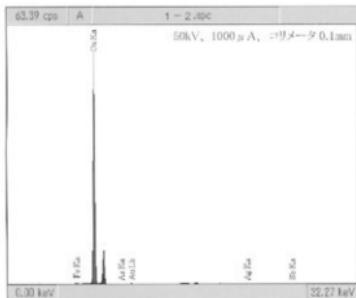
(6) 第2次クリーニング

第1次クリーニングで除去しきれなかった銹・土の除去と、No.1、3については鍍金面の表出を行った。ただし、地金の強度が充分でない箇所については欠損する恐れがあったので、鍍金面の表出を行わなかった。

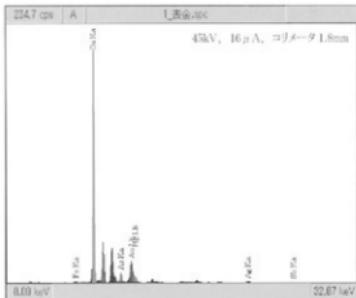
鍍金面の表出は、実体顯微鏡を覗きながら、電子工具(ENGRAVER/DREMEL社)や竹串、筆を用いて慎重にクリーニングを行った。その結果、No.1の表面は表が金、裏が銀による装飾であることが判明した。またNo.3については、線刻を施した髪の痕跡が詳細に分かるようになった。これらの分析調査については後述する。

(7) 樹脂塗布

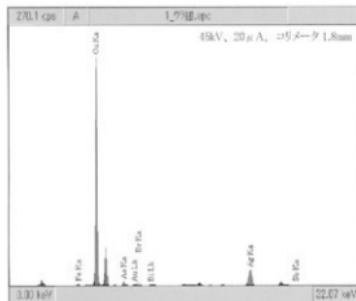
防錆効果を上げ遺物を保護するために、含浸時の2倍に希釈した樹脂を2回遺物に塗布した。



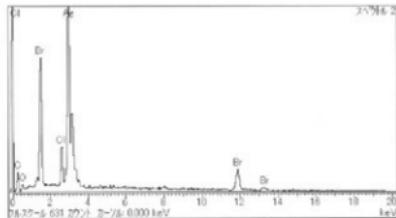
第VI-1図 分析結果(1)



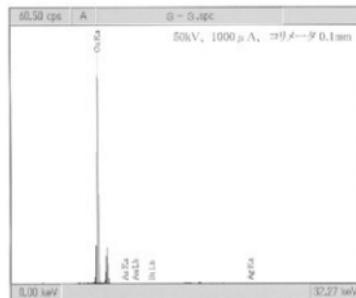
第VI-2図 分析結果(2)



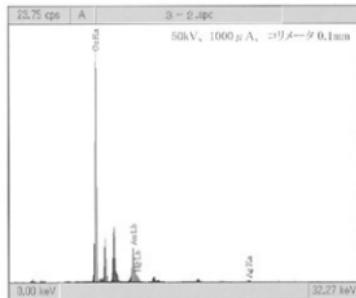
第VI-3図 分析結果(3)



第VI-4図 分析結果(4)



第VI-5図 分析結果(5)



第VI-6図 分析結果(6)

(8) 復元・整形

No.6の接合は、シアノアクリレート系接着剤（I781/スリーポンド社）を用いて行い、No.3・6の空隙部分や欠損部にはエポキシ系樹脂（アラルダイトXNR/H6504）を充填して復元・整形を行った。

(9) 樹脂塗布

樹脂塗布を1回行った。

(10) 仕上げ

樹脂含浸や樹脂塗布による光沢を、艶消し剤（ヒットスプレー/（株）カンペハビオ）を用いて抑え、復元部には水溶性アクリル絵の具（アクリラ/ホルベイン社）を用いて周囲と違和感の無い程度に彩色を施し、処理後の状態を写真撮影して処理を完了した。

3 自然科学的調査

(1) 分析対象と内容

- ・ No.1 第133次出土鉢、表面装飾技法
- ・ No.3 第137次出土毛彫馬具、表面装飾技法、線刻觀察

(2) 分析

分析に用いた装置は以下の通りである。

・走査型電子顕微鏡

（以下SEM、日立製作所製 S-3500N）

・電子線マイクロアナライザ

（以下EPMA、㈱堀場製作所製 EX-300）

条件：加速電圧25kV 真空度1~5Pa

・エネルギー分散型ケイ光X線分析装置

（以下XRF、セイコーインスツルメンツ㈱製 SEA5230）条件は各スペクトルに記載

XRF分析で照射するX線は透過力が強いため、試料の厚みによっては最表層に加え下層の情報も得られる。今回の測定条件はカリウム（K）より重い元素をみることを目的にしている。一方、EPMAでは電子線を当てるため、XRFに比べて表層の情報が得られる。軽元素および低エネルギー側の特性X線の検出に適している。

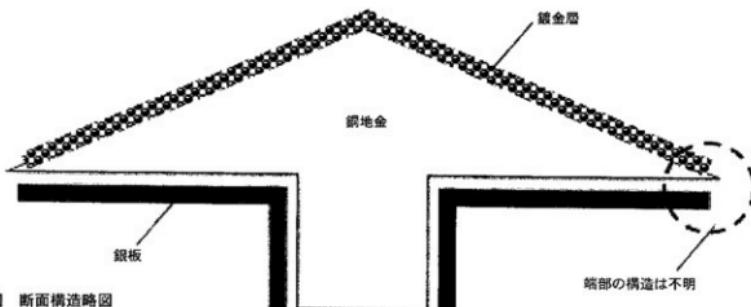
今回の分析では、試料の状態に応じて2つの手法を使い分けて調査した。

(3) 結果と考察

第133次出土資料（No.1） 表面は金色を呈しており、裏面は部分的に銀白色である。地金と考えられる部分①は緑色の腐食生成物に覆われており、この部位からはXRFで主に銅（Cu）を検出した（第VI-1図）。このことから地金は銅製であると考えられ、他にヒ素（As）、ビスマス（Bi）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）を含む。

表面の金色部分②からは金（Au）、水銀（Hg）を検出した（第VI-2図）。SEM観察およびEPMA分析の結果では、銅の上に金と水銀を含む層が存在していた。この層の表面は平らであり、平滑に磨かれたような状態を呈していたが（SEM1）、部分的にアマルガム粒子とみられる箇所（SEM2）を確認した。¹¹⁾このことから、銅の上に金アマルガムを用いた鍍金で装飾しているものと考える。

一方裏面③は銀（Ag）を顯著に含んでおり、金（Au）と水銀（Hg）は検出されなかった（第VI-3図）。この部位の表層からは銀（Ag）、塩素（Cl）、臭素（Br）を検出し（第VI-4図）、立方体が重なり合ったような結晶様であったため（SEM3）、臭化銀や塩化銀などのハロゲン化銀であるとみられる。本来は



VI-7図 断面構造略図

銀であったものが、土中のハロゲンと結合したと考えられる。加えて、④の部分には銅の腐食生成物に覆われた銀を含む層が存在する（SEM 4）ことからみて、この資料の裏面は銀の板（又は箔）により装飾されたと考える。但し、銀板の末端の様子は明瞭ではなく、当初から裏面のみ銀板を付けたのか、表面の縁まで巻き込んでいたのかは不明である（第VI-7図）。

第137次出土資料（No.3） 地金①は主に銅（Cu）を含み、銅製である（第VI-5図）。他にヒ素（As）、ビスマス（Bi）、銀（Ag）を含む。表面の金色部分②からは金（Au）と水銀（Hg）とを検出した（図6）。SEM観察とEPMA分析では銅の地金の上に金の層が存在することは確認できたが、今回の観察ではNo.1のようなアマルガム粒子はみられなかった（SEM 6）。四隅の鉢の周囲の凹部③では金箔が重なっているような状況（SEM 7、8）であり、この資料は銅地金の上に水銀（又はアマルガム）を用いて金箔を貼り付けたものである可能性が想定される。

金具周囲の線刻文様の溝④には鑿痕とみられる条痕があり（カラー図版）、実体顕微鏡による観察では断面構造はU字型で幅は約0.6mm、条痕のピッチは約0.3mmであった。また、溝は3～5回の鑿打ちで彫られていることがわかった。

（山岡奈美恵・菅井裕子・渡辺智恵美

財団法人 元興寺文化財研究所）

4 分析結果をうけて

第133次出土資料については、表面が銅地金に金メッキを施していた。一方、裏面は銀の板か箔での装飾が施された入たことが確認できた。当初から裏面のみに銀板を付けたのか、表面の縁まで巻き込んでいたのかは不明という結果であった。

第137次出土資料については、銅地金に金箔を貼りつけた金メッキであることが判明した。実体顕微鏡の観察から表面に施されているキザミは3～5回の鑿打ちで彫られたものであることが判明した。材質もさることながら、肉眼では確認できない製作技法の復原まで、踏み込むことができたのは大きな成果であると考える。

文末ではあるが、協力をいただいた山岡奈美恵・

菅井裕子・渡辺智恵美（ともに財団法人 元興寺文化財研究所）の各氏にお礼申し上げる。

（小濱 学）

註

(1)村上 隆、新山 栄：古文化財の科学、38、45-54（1993）



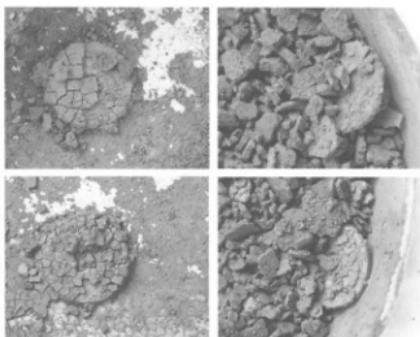
No.2 馬具 溶理前



No.2 馬具 溶理後



No.4~7 銅銭 溶理前



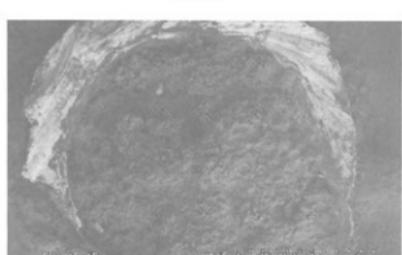
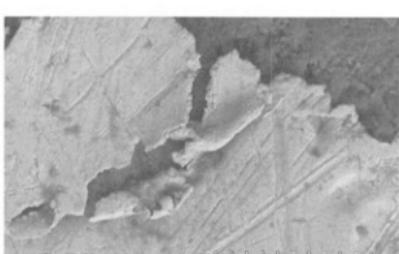
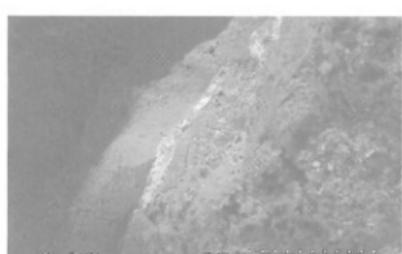
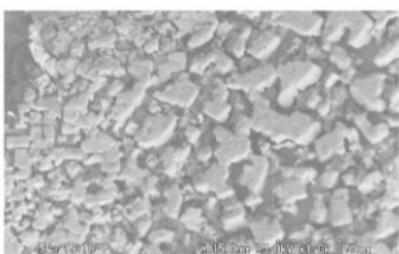
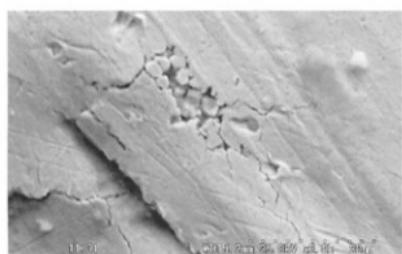
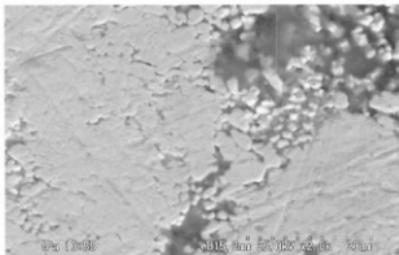
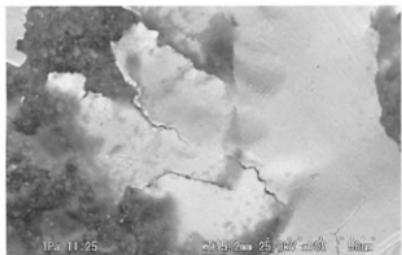
No.4~7 銅銭 溶理前（拡大）



No.6 銅銭 溶理中



No.4~7 銅銭 溶理後



報告書抄録

ふりがな	しけきさいくうあと へいせい 14ねんどはくつちょうさかいほう						
書名	史跡斎宮跡 平成14年度発掘調査概報						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	泉雄二・伊藤裕像・小瀬学・水崎公恵						
編集機関	斎宮歴史博物館						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Tel 0596-52-7027						
発行年月日	西暦 2004年 3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
斎宮跡	多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210 34°31'55" -34°32'30"	136°36'16" -136°37'37"	2002.04.01 ~2003.03.31	460 m ² (第136次) 700 m ² (第137次) 92 m ² (第139次)	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
斎宮跡第136次	官衙	奈良 平安	掘立柱建物 土坑 区画溝	土師器 須恵器 縁地陶器	寮庫と類似する 遺構配置		
斎宮跡第137次	官衙・集落	奈良 平安 錦倉 室町以降	竪穴住居 掘立柱建物 土坑 土壙墓 地鎮塗構	弥生土器 土師器 須恵器 縁地陶器 陶器(山茶碗・山皿) 馬具(帶飾金具・轡)	大型掘立柱建物 (東西6間、南北 2間以上)を検出。 初期斎宮関連か。		
斎宮跡第139次	官衙	奈良～錦倉	竪穴住居 道路(側溝) 井戸	土師器 須恵器	奈良古道の道路 側溝検出。		
斎宮跡第7次	官衙・集落	奈良 平安 錦倉 室町 以降	竪穴住居 掘立柱建物 土坑 道路跡	土師器 須恵器 中世陶磁器・和鏡	奈良古道の道路 側溝検出。		

* VIは、(財)元興寺文化財研究所山岡奈美恵・菅井裕子・渡辺智恵美各氏の協力をえた。

史跡斎宮跡

平成14年度

発掘調査概報

平成16(2004)年3月

編集・発行 斎宮歴史博物館

印 刷 千巻印刷産業株式会社
